平成15年度～19年度　私立大学学術研究高度化推進事業

学術フロンティア推進事業研究大会

第7回生涯学習フォーラム

2005年度
報告書

SEITOKU UNIVERSITY
INSTITUTE OF LIFELONG LEARNING

聖徳大学　生涯学習研究所

はじめに

平成 15 年度、聖徳大学生涯学習研究所の研究計画「生涯学習の視点に立った少子高齢社会の活性化に関する総合的研究」が文部科学省の「学術フロンティア推進事業」において採択されました。このため学内外の研究者プロジェクトでは、５つの部門にわたって５ヵ年にわたる研究に着手しているところです。

この研究の推進の課程で、さまざま急激な社会の変化に対応する研究課題が生かせるなど議論すべきことが山積している状況です。

第７回の聖徳大学生涯学習フォーラムは、学術フロンティア推進事業の一環としても位置づけています。今回テーマは、この研究の最も基本的な課題である「生涯学習の視点から地域の活性化を考える」を設定しました。特に「地域にチャレンジする女性」を検討することを特色としました。

この資料は、その大会の研究討議の一部をまとめたものです。いずれもすべてを十分にまとめたわけではありませんが、各分科会の議論の一部もあり、その雰囲気も感じられるものと思います。

この報告書は、今後の研究にとって貴重な資料となるものと思います。研究会そのものは限られた時間での討議でしたが、今後の研究の方向を示すものが多かったように思われます。

この報告書が、当日の参加者にとってはその記録であり、参加できなかった方にとっては、参考になる資料でありますよう念願し、また、この資料が幅広く活用されることを念願し、この研究のまとめを報告します。

聖徳大学生涯学習研究所

所長　福留　強

目次

はじめに

開催概要 …… 1

シンポジウム　「地域にチャレンジする女性」 …… 3

第１分科会　「子どもの環境と地域の課題」 …… 22

第２分科会　「創年の学習課題と地域への貢献」 …… 40

第３分科会　「市民が主役のまちづくりの現状と課題」 …… 61

第４分科会　「高校生と教師が考える地域参加」 …… 80

全体会　「女性のチャレンジ支援をめぐって」 …… 87

添付資料

パンフレット …… 資料 1-1

シンポジウム …… 資料 2-1

第１分科会 …… 資料 3-1

第２分科会 …… 資料 4-1

第３分科会 …… 資料 5-1

全体会 …… 資料 6-1

発表者一覧

◆ 開催概要

日　　時　平成１７年６月２６日（日）　１０：２０～１６：３０

場　　所　聖徳大学生涯学習社会貢献センター（１０号館）
参加対象　●一般市民●教育行政担当者●自治体生涯学習推進担当者
●社会教育関係団体関係者●学校教育関係者●ＰＴＡ関係者
●まちづくりボランティア●学生　など
主　　催　聖徳大学　生涯学習研究所
後　　援　全国生涯学習市町村協議会　全国生涯学習まちづくり研究会
特定非営利活動法人全国生涯学習まちづくり協会
千葉県教育委員会　松戸市教育委員会　教育新聞社

◆プログラム

９：３０……　受付
１０：２０……　開会式　……１４階
１０：４０……　シンポジウム　……１４階
１２：００……　昼食
１３：３０……　分科会　……第１分科会　７階
第２分科会　１４階
第３分科会　７階
第４分科会　１２階
１５：１５……　全体会　……１４階
１６：１０……　特別公演　……１４階

◇オペラ歌曲から　小泉　恵子（声楽家・聖徳大学音楽文化学科教授）
曲目：山田　耕筰　作曲　「からたちの花」
ドリーブス　作曲　「カディクスの娘」
伴奏（ピアノ）井桁　和美（聖徳大学音楽文化学科非常勤講師）
◇踊り　よさこいソーラン　生涯学習研究同好会　リリーズ

１６：３０……　閉会

シンポジウム「地域にチャレンジする女性」

● 谷口　郁子（イムノエイト株式会社　代表取締役社長）

● 杉本　由子（株式会社芳翠園・株式会社老松園　代表取締役社長）

● 長江　曜子（聖徳大学短期大学部教授・松戸商工会議所女性会副会長）

● 小川　誠子（國學院大學非常勤講師）

コーディネーター　福留　強（聖徳大学児童学科教授・生涯学習研究所所長）

福留：おはようございます。プログラムの一番目にはいりたいと思います。第７回の生涯学習フォーラムで一番最初に行うのがこのシンポジウムかと思いますが、すでにご案内の通り、会場は最初できたての頃はとても殺風景な所だと思ったのですが、なぜか今日は花一杯という感じですね。今日これからのテーマは、最初と最後は「女性」という風にテーマを実は設定しております。「地域にチャレンジする女性」というテーマにしました。今、男女共同参画社会ということを我が国は目指していますけれども、「横への挑戦」、「縦への挑戦」、「再挑戦」という言葉でチャレンジという言葉を使っているのですが、そのテーマを午前と午後に持ってまいりました。で、少しこれは、我が大学も女子大でありますから、このテーマを久し振りにとったという感じです。早速、これから今日のテーマに即してシンポジウムという形をとります。ちょっとやり方を少し変えてみました。さっそくお一人ずつの話を聞きながら次の、お話をいただきたいと思います。最初に一人１分程度、私は「今日このような話をします」という結論を述べ、自己紹介を含めてお話をいただきたいと思います。小川先生よろしくお願いします。

小川：おはようございます。小川誠子と申します。私は2002年の７月から2004年の８月までカナダ・バンクーバーにございます、ブリティッシュ・コロンビア(British Columbia)大学教育学部に客員研究員として在籍させていただいておりました。その時にロード・ビング・セカンダリー・スクール(Lord Byng Secondary School)という中学校・高校なんですけれども、そこのミュージック・ソサエティー(music society)で生徒の音楽学習をサポートするボランティア活動に参加させていただきました。今日は、そのミュージック・ソサエティーでのボランティア体験で、私が見て感じたものを皆さんにこちらのスライドでご紹介していきたいと思います。

それで、カナダに研究留学するきっかけなんですけれども、大学時代からずっと留学したいと思っておりました。そして、東洋大学で助手をしておりました時に任期が

４年間でそれが終了した時に専任の仕事を得る前に、今しかない、今しか行けないと思いまして、ブリティッシュ・コロンビア大学の先生とメールで意志の疎通を図りながら受け入れていただく事になりまして、ブリティッシュ・コロンビア大学に参りました。行ったら行ったでいいんですけれども、大変でした。１年目は非常に好奇心がございますので、新しいものを見て、わくわく発見しながら過ごしたんですけれども、２年目は、疲れが出てきます。非常にストレスがたまります。ちょっと英語が解るようになると日本人や日本の悪口なんかも聞こえてくるんですね。非常にストレスがたまってくる。そういうような生活を送っておりまして、これではいけないと思い、大学と家との往復だけではなくて、もうひとつの場面をつくらなきゃいけないと思ったこと、これがボランティアに参加するひとつのきっかけになったわけです。

今日は、その活動の体験をご紹介させていただきますと共に、カナダ社会におけるボランティア活動の状況を踏まえて、高校生にとってのボランティアの意味についても少し情報を提供していきたいというふうに思っております。

福留：どうもありがとうございました。それでは次に杉本さんお願いします。

杉本:どうも、皆さまおはようございます。私は日本茶の販売会社でございます芳翠園、老松園という会社を経営しておりまして、松戸の伊勢丹さんにも入ってございまして、伊勢丹からこちらの方へは来たことがなくて、こんな素晴らしい建物があったということを改めて感動しております。そして私は、代々、本家からいたしますと 400 年ほどやっております日本茶の会社でございまして、分家しましてから 130 年ぐらいやっておりまして、その頃から伊勢神宮の御用を代々務めている家業がございます。そして、そちらではやはり代々無添加で純国産で安全で安心でそして本物の味を追求するというのを、代々やってまいりまして、また、一番茶のみである一定の味を保つというのを長年代々伝えてきたわけでありますけれども、それに加えましてやはり老舗を守って行くというのは、やはりその時代時代に新しい試みをしなくては、老舗というのは伝えていくということができませんで、それにつきまして、私の代には、女の子しか生まれなかったのですけれども、その時に今ですと妹が三重県の伊勢神宮のところの松阪という市なのですが、そちらで生産、味の研究などをやっておりまして、私がその販売の方を受け持っているわけなんでございますけれども、そして私も会社と家とを入ったり来たりしかやってございませんでしたけれども、ある時会社と家の行ったり来たりだけでは視野が広がらないのでというので、老舗のやはりお店の二代目、三代目、四代目、代々やっている私と同世代の方々にお誘いを受けまして、青年会議所というところに入りまして、その時に福祉の委員会に所属をいたしまして、その時に肢体不自由児と健常児の合同のキャンプがありまして、そちらでお手伝いをすることによって、私どもの子どもが普通でいるということの大切さを学びまして、それがきっかけとなりまして、いろいろロータリークラブですとか、いろいろな東証の活動に私が参加するきっかけとなりました。そしてまた、私の父がそういった商工会議所の会頭でまちづくりとか福祉関係、介護関係の事にも着手しておりましたので、それが

きっかけになりまして、そしてまた、ロータリークラブにおきましても、やはり女性の方々の存在がまだまだ認められていないので、そちらについても少しずつ皆様方、世の中の方々にも知っていただきたいと、そういった活動を広めていきたいということがきっかけとなりまして、そういったことについて本日はお話できたらと思います。以上でございます。

谷口：皆さまおはようございます。イムノグループの谷口郁子でございます。お元気ですか。（マイク雑音）お元気ですかとお尋ねしてキーっとこられてしまいました。なぜこのお元気ですかと私申し上げたかと申しますとね、健康の定義ＷＨＯの健康の定義「ただ身体的に健康だけではなく精神的にも健康でなければ健康ではない」プチ病、最近多くございます。なので、あえて今、「おはようございます」と言ったら、元気に「おはようございます」と言われました。ただ、「お元気ですか」と言ったときに「元気よ」と言ってくださる方、ちょっと少ないです。今日はこの健康についてお話するわけではございませんで、今我が社が熱き思いをかけて取り組んでおりますプロジェクト、その辺の話をさせていただきたいと思います。タウンヘルスケアステーション構想と申します。古い商店街、日本全国何々銀座という古い商店街ございますね。そこに人工的に病院、介護関係のものを誘致します。誘ってそこで経済活動をしていただきます。そういったものを展開しておりまして、今、横浜市の行政さん、ＮＰＯさん、我が社の営利企業という民間で、ひとつのプロジェクト、私の構想を兼ね備えたものを展開してございます。その辺のことをお話させていただきたいなと思っております。よろしくお願いいたします。

福留：ありがとうございました。地元松戸市ではもうお馴染みの我が大学の長江先生、ひとつお願いします。

長江：皆さんおはようございます。地元でお馴染みと言っていただいていますが、決してお馴染みではないと思います。長江と言う名前は岐阜県多治見の名前でして旧姓は加藤でございます。聖徳で教えていますが、実は聖徳出身でございます。聖徳大学が聖徳学園短期大学といわれる学校としてこの地松戸に参りましたのが 40 年前でございます。私は年齢が昭和 28 年生まれで、今年の 10 月に 52 歳になります。なぜ歳のことを言ったかといいますとかつては人生 50 年で、人生は終わると、ひとつの流れでいうとそうだというふうに思いますけれども、今は寿命が延びて人生 50 年はまだやっと大人になったかなという年代だというふうに思っているからです。皆さんご存知でしょうか 2005 年をひとつの節目にしまして、50 歳以上の人口が全人口の半分以上になるというそういう時に、私、今、幸せなことに遭遇しているというふうに思います。どうしてかというと、今までは 50 歳からから先の人生がほとんどなかったと思います

ね。さて、大学で学んでいますが未だに、卒業できずに教師を21年やっております。その他ですね、地元松戸で実は八柱霊園というこれは死んだ方のお世話をする側の、そして生きている方との交流の場というか墓地があります。75,000基、墓石が立っておりまして75,000基の家族のお世話をするそういうまあ、墓石屋、石材店の三代目に生まれまして、まして女の子しか生まれなかった家で、墓石屋を継ぎたくないとダダをこねまして登校拒否はするは、いろんなことをしまして、現在に至っているわけです。けれども、父が24年前と8年前に2回ほど倒れたものですから、右足首切断・左目失明となりました。実は教師になる前、大学院生になっていた頃に結婚し、名前が加藤から長江に変わったにもかかわらず、実家のことが気になって、実家の近所に住み、そして会社経営を始めてから学校の先生もやるという、まあ、器用に見えるかも知れませんが、じつにまあ不器用な、いろんなことを断れず今日に至っています。実は47万3千人のこの松戸で、青年会議所、商工会議所の世界とお世話になりまして、地域の方に密着しながら、というよりいろんなことを教えていただき現在生涯学習のなかで、食の松戸物語とか学校の中では地域食材の導入をしてまた、寮生に「松戸を忘れないで欲しい」そういう食教育の展開をさせていただいています。商工会議所で、よろず松戸という松戸の良さを発見するエッセイを、一月に一回なんと100回も書いて、8年半も続けまして、「何にもいいとこないじゃない松戸」ってみんな嘆くんですけれど、実は面白いところが沢山あるというふうに逆転の発想をしながら生きております。十代は、生きることの意味に悩んだ自分がですね、死ぬことを幸せと思えるような人間として豊かに生きること、そして死ぬまで学び続けることそんな素敵な社会になれたらいいなというような気持で発言したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

福留：ありがとうございました、以上の4名の方に本日これからの話をしていただくわけです。もう一度申し上げます。手前から小川誠子さん今、大学の先生でもいらっしゃいますけれども、ご案内のとおり、様々な経歴でたいへん評判になった方です。研究者でもいらっしゃるし、今は主婦でもあるんでしたね。そういう様々な活動で研究を期待される方です。その次の杉本さんも有名なお茶の会社の社長さんですし、谷口さんも同じく薬と福祉の結びつく大きな会社のもちろん社長さんであります。我が国の女性社長の代表的なお二人が実はここにいらっしゃる。谷口さんの場合も今の総理大臣が就任挨拶で彼女の話を取り上げてきたくらいに大変話題の社長さんでいらっしゃいます。まあ、そういう方々で、言ってみれば、トップの女性が話をするんだなと、思っていただけばよいでしょう。でも、これまでに仕事の合間を調整し、大変なハンデを乗り越えながら社会参加なさっていて、なおかつ今、大勢の従業員ともつきあっていらっしゃるわけです。その中でどういったことが問題になっているのか、どういったことをしていけばいいのかで、ご自身がそれぞれ地域との関わりを持ってらっしゃる方ばかりなのです。そういった話ができるのかなというふうに思います。最初にボランティアの話で、海外にいらした話から、私もお話を伺った時に、この話を是非聞いていただきたいと思います。とても短いですけどね、そのさわりをお話いただきたい

と思います。小川さんよろしくお願いします。

小川：大変お待たせいたしました。発表させていただきます。ちょっと会場の方を暗くさせていただきまして、あちらにございますスクリーンでスライドをご覧いただきながらプレゼンさせていただきます。ちょっと暗くなって眠くなっちゃうかもしれませんけれどもごめんなさい。私は皆さんの背中を見ながら発表する形になってしまいますが、よろしくお願いいたします。

まず、最初のスライドなんですけれども、こちらが私がボランティア活動に参加させていただきましたロード・ビング・セカンダリー・スクールです。中学校高校一貫の公立の学校です。このように学校前に大きな掲示板があるんです。この掲示板を通して生徒によるコンサートであるとか、あるいは生徒によるお芝居であるとか、いろいろな学校の行事を私たちは道を歩きながら知ることができるんです。それで、掲示板の前にバス停がございまして、いつも私はそこを通るバスで大学に通っていたのですが、クリスマスのコンサートがあることを知りまして、たまたまぶらっと立ち寄ったこと、それがボランティア活動のきっかけです。こちらは、ちょっと暗いんですけれどもクリスマス・コンサートの様子です。いちばん左側がスコット・マクリナン(Scot MacLennan)先生という音楽の先生です。私は、ここで生徒たちの非常に活き活きとした表情に出会いました。もちろん、生徒達の音楽活動にも非常に興味がございました。でも、この生徒たちの活き活きとした表情の背後にはきっと先生や親たちの苦労があるだろうと、その苦労の舞台裏を見たくなったんです。それもボランティア活動のきっかけの一つだったのです。プログラムの最後にボランティア募集という事が書いてありましたので、早速、その音楽の先生にメールを送りまして、参加させてくださいということでお仲間に入れていただきました。

こちらが親たちのミーティングの様子です。月１回実施されます。大きなイベントになると月に２回行われます。一番左端が先生ですが、あとは親です。だいたいお父さんお母さん半々です。カナダ社会は共働きが多いので、仕事が終わってそれからご飯を食べてからミーティングにやってくるんです。ということで、午後８時からの開始なんですね。非常に遅いなと思ったんですけれども、だれもが共通に参加できる時間だったのです。それで、午後８時から 10 時頃まで熱く議論を交わすんですね。

このミーティングの中心的なテーマは資金調達の話でした。このミュージック・ソサエティーを活性化するために如何にお金をつくっていくか、これが重要な課題でした。楽器の購入、在校生や卒業生の為の奨学金を調達するために、寄付金やコンサートの収益をどうやって確保するか、そういったことが中心のテーマでした。このミュージック・ソサエティーは７つのバンドがございます。初級者から上級者まで、シンフォニー・オーケストラもございまして、７つのバンドが１年に 12 回コンサートを実施するんです。そのコンサートのチケット収入が５カナダドル、約 450 円なんですけれども、そのチケット収入も貴重な財源になっていくんです。

次のスライドですが、これは最も大きなコンサート‘Swyng with Byng’というジャズ・コンサートなんです。毎年２月に行われるもので、最も大きなコンサートで有名

なんですけれども、このように上級者のシニア・ステージ・バンドがジャズを演奏します。そして、その前にダンス・フロアがありまして、参加者がダンスを楽しむというとてもユニークなコンサートです。当日は、ダンスのインストラクターもお招きしています。そして、ダンス講習会をこのように開きまして地域の方々や親たちがこのようにダンスを楽しむというイベントです。

生徒だけでなくカナダ放送協会のプロの方にも来ていただきまして、このように演奏を盛り上げてくださいます。この‘Swyng with Byng’なんですけれども、なんと始まりは午後８時なんです。午後８時から 12 時までのイベントなんです。真夜中までですね。もちろん、生徒たちは、休憩しながら演奏するんですけれども、12 時まで演奏するんですね。それから、この日はリサーチ・デイ（research day）を用いてコンサートを開催しておりました。このリサーチ・デイというのは何かといいますと、教師の勉強のための日なんです。先生がお休みをして勉強をする日なんですが、その日を利用して行われておりました。会場の設営なんですけれども、先生とペアレント・ボランティア、生徒が一緒になって当日 12 時頃から設営にあたりました。

それから体育館の隅にサイレント・オークション(silent auction)のコーナーも設けられておりまして、楽器、コンサートのチケット、それから花のリース、テーブル・クロス等がこのように展示されていました。もし気に入ったものがあれば、参加者は名前と金額と連絡先を記しまして、一番高値をつけた人に後日連絡がいくシステムになっております。こういったオークションは、静かに行われるという意味でサイレント・オークションといわれるんですけれども、このオークションで得た収入もミュージック・ソサエティーの活性化に向けて重要な収入源になっているわけなんです。

それからもう一つ、会場にはビールとワインの販売のコーナーも設けられました。このビールとワインですけれども、事前のミーティングにおいて、話題になったんですが、このような公の場所でビールとワインを販売する時には誰かがリカー・ライセンス（liquor license）を持っていなければならないという話になったんです。そして、話をしていると先程の音楽の先生が、「僕が持っているから大丈夫」という話で次の話題にいったんですけれども、私は音楽の先生がリカー・ライセンスを持っていることに対して非常に驚きました。

カナダ社会は、日本の社会と異なって、飲酒に対して非常に厳しいんですね。例えば、公の場所、ビーチや公園、路上などでの飲酒は罰金の対象になります。禁じられているんですね。飲酒が可能なのは、自宅あるいはリカー・ライセンスを取得した場所のみです。そういった厳しい飲酒に関する規制があるにせよ、音楽の先生がリカー・ライセンスを持っているということはなかなか想像できなかったので、非常に驚きました。

でも、７年間もこのイベントが継続しているという事を考えると、マクレナン先生のそのリカー・ライセンスというのは、このミュージック・ソサエティーにとって重要な意味を持っているのかなというふうに感じました。冒頭でも触れましたが、生徒たちの活き活きとした表情の裏には教師の苦労があるであろうということをお話しましたが、何か教師の苦労の一端を垣間見たようなそんな気がいたしました。

そして、私はこのボランティア活動を通

して、地域の人々と交流を深めるという機会を得ることができました。それは、とっても貴重な体験でありまして、異国の地に飛び込んでいく、融和していくという意味で私にとってはビッグ・チャレンジでした。では、次にカナダ社会におけるボランティア活動の状況を少しお話させていただきたいと思います。15歳以上を対象とした2000年の調査によりますと、カナダ社会では、年間約650万人の人々がボランティア活動に参加しているといわれております。今日は、高校生にとってのボランティアの意味について考えていきたいと思いますので、こちらの図をご覧ください。レジュメにもございます。カナダ社会におけるボランティア活動の状況を年齢別にみたものです。高校生は15歳からということですから、この枠に入ります。29%の活動者率ということです。

私がボランティア活動に参加させていただきましたロード・ビング校の生徒達に、何回かお話する機会がございましたので、彼らにどうしてボランティア活動に参加するのということを聞いてみました。そうすると、多くの生徒はこう答えます。「進学した高等教育機関・大学などで奨学金を得るため。」というふうに答えます。確かに、カナダの奨学金を得るための申請書を見ておりますと、非常に社会的活動、特にボランティア活動を記すスペースが多く割かれているんですね。そういった背景がございまして、奨学金を得る為にボランティア活動に参加している方が多いんです。それでちょっと驚きまして、自発性の問題や、将来、奨学金という見返りを求めるという点において無償性の問題があるんじゃないかなというふうに思いました。

でも、彼らとお話をしていますと、こんなことにも気づかされます。彼らは、非常に社会のことをより広く知っているんです。社会の仕組についてよく知っている、そして働くということをより広い社会の文脈の中で考えているんですよね。そこが彼らにとってのボランティア活動の意味なのかなと感じました。もちろん、ボランティア体験が職業観の形成にとって、万能であるかどうかに関しては、議論の余地がございますけれども、ボランティア体験が職業観の形成、キャリア形成に重要な意味を持っているのではないかという印象は、一部ではありますが、彼らの会話を通して強く持ちました。以上でございます。(拍手)

福留：ありがとうございました。今のお話をお聞きになって、何かお聞きになりたいことありますか、今の感想は如何でしょう。何か他に同じ様な体験をなさった方は？

長江：同じ体験ではないんですけれども、高校生のコンサート活動という中で、小川さんがきっかけとしてはコンサートへ行くということですぐにボランティアの活動のグループに溶け込めるような仕組みが出来上がっているようですけれども、日本の場合はなかなかクローズな感じがするんですけれども、日本とカナダの違いというのを教えてください。

小川：私は、クリスマス・コンサートのプログラムの最後の部分にペアレント・ボランティアを募集していたので、応募したんですよね。だいたい、子どもが通っている、子どもがロード・ビングに通っていて、そのミュージック・ソサエティーを支えるために親が参加しているんですね。私は子どもがいないので、最初入る権利がないのか

なと思ったんです。だけれども、先生にお話しましたら、ウエルカムだよと。とにかくオープンで、先程スライド掲示板でお見せしましたけれども、学校の行事などは地域に対して広くお知らせするんですね。全くクローズではなくて、いつでも入りたい人が来て下さいというシステムで、私は非常に驚きました。だから、やりたい人は誰でも歓迎するというシステムが出来上がっている。というような印象をもちました。

長江:どうもありがとうございます。たまたまなんですけれども、松戸にもいくつも県立高校とかあるんですが、松戸国際という芸術系に強い県立高校があるんです。そちらの方では音楽の定期演奏をやるんですね。ただ、プログラムを作ったりする費用まではなかなかでないので、高校生が一生懸命資金集めというか広告集めに石屋のうちの店なんかにも来てくれて、毎回ですね広告は出させていただくという形でどちらかというと広告の部分だけ地域社会と繋がっている。そこからお金を得るということは高校生がやっているんですけれども、その活動全体に保護者以外が立ち会うということが非常にユニークだと思いました。ありがとうございました。

福留:今、逆の事を考えながら聞きました。日本にも様々な活動に海外からいらした方が多いわけですから、そういう方でも入れたらいいという感じですね。初めてその中に参加したことによってその地域融合したといわれた小川さんの話を逆にしてしまえば、日本に来られた大勢の方々を仲間に入れるといったことが必要ですね。そんなことを考えました。次に谷口さん。タウンヘルスステーションセンターは、今どこまで推進されているのでしょうか?

谷口:今の現状ということですが、ちょっとその辺のことを、今日始めて聞かれる会場の方がいらっしゃるので、アピールさせていただきたいと思います。そもそも我が社というか、私は薬剤師でございます。ケアマネージャーでもございます。病院とクリニックの経営コンサルタントでございます。この国家ライセンスを元に事業を起こしまして、国内で3社、アメリカ合衆国で1社それの名前がイムノグループ。イムノという意味はイムノロジー、免疫という意味なんですね。私が創業して、17年目になりますが、1989年創業当初、カタカナ三文字が谷口さん一部上場をするＩＰＯするよ、人気の名前だよと言われまして、カタカナ三文字イムノと命名しまして早17年経ってしまったというバックボーンをちょっとご紹介させていただきましてまあその事業内容、三本の柱でやっているわけですが、このプロジェクト、どこの会社でも社長が熱き思いをかけたプロジェクトといったものがあるかと思いますが、この営利企業において、プロジェクトというものは、あくまでも実業させて利益を追求するこれがベースなんですね。そこで我が社としては、構想としてタウンヘルスケアステーション構想ということで、独自のモデル事業をしておりました。横浜市にカルテ薬歴ともうします。患者さんのカルテです。人口27万人の鶴見区という所で、我が社10万件のカルテを持っております。そちらで我が社だけでやってみようと思ったのが、2000年介護保険が施行になった年でございました。地域の患者さん達のカルテがある揺りかごから墓場までという患者さんの時間軸に沿ったサービスを提供していこうという経営

理念もございまして、患者さんが65になったらかかりつけの薬局のうちの薬剤師に「僕のケアプラン作ってよ」ということを夢見ながら、作ったプロジェクトでございましたが、そこに商店街の活性化、まあ商店街といっても空き店舗、冷えちゃっているところ多いんですよね。一番地域のある意味お茶の間にならなくてはいけない商店街がとても冷え込んでしまった。そうした現実も私どもの鶴見区、10万人のカルテのある鶴見区に鶴見銀座という古い商店街がございましてね。じゃあそこに人を呼ぼう、患者様でも人なんですね。人が集まれば活性化しますと言うベースを持ちまして、クリニック、バッティングしない内科・外科・整形外科に眼科に皮膚科に総合病院並みのクリニックを誘致しました。そうしますと、今、病院で風邪で3分診療するよりか地域のクリニックさん、かかりつけ医を持ってくださいねという国の指導もありますよね、なので、お互いに病院とクリニック病診連携といいますこれは経済活動的にも医療診療報酬で先生方はウエルカムなんですよ。というようないろんな診療報酬体系を介護保険報酬体系がベースにあるんですけれども、そちらできちっとお仕事していただけるように、さきほど申し上げましたように、誘致人工的にお呼びをするクリニックをお呼びする介護事業所をお呼びすることで、空き店舗どんどんシャッターを開けさせました。それによって朝から患者様は1カ所で、まあ一例ですと、我が薬局にいらして、そこから診察券をばっとクリニックに配ります。それでうちの薬局でお待ちになっています。そういうふうなひとつのコミュニティーができたんですね。そしてそうこうしているうちに、あれっ、これは託児所があったらいいんじゃないかというような養老統合ケアというコンセプトに基づいております。これは何かと言いますとお子さん、子どもさんと高齢者の方って非常にケアを受ける側なんですよ。そうじゃなくてケアを与える側になりますと大変な相乗効果が芽生えると言うこれはある意味学術的なベースもあるものなんですが、ここにお年寄りもいっぱい、高齢者の方も見えます。ここに託児所も作ってしまえば、養老統合ケアセンターになるなと、思っておりまして。それも実現を今年の 10 月にいたしたいと思っております。そこに横浜市の行政さん、子育て支援のＮＰＯさん、この３社、先程さわりで申し上げましたが、新しい横浜市のプロジェクトとして１つ入れていただいております。これも１つのテストケースで我が社独自のモデル事業だったところに、行政さんとＮＰＯさんが力を添えてくださいました。ところがですね、このＮＰＯさんと行政さんというこの全く経済活動、利潤を追求するという意識が、それぞれカルチャーが違うんですよね。それでお仕事の運びにしてもいろんなところでお互いのそれぞれのカルチャーが出てきてしまいます。まあこれが大変な今プロトコルというか、そのプロセスが非常に逆に言えばですね、まあ今後記録に残っていくとしか、これで横浜市商店街の活性化を合わせ、高齢者、女性、お子さんというこの３つの融合ができて、ある意味完成ができましたらば、このノウハウは全国展開、我が社の中小企業でできるお仕事ではございませんので、全国にノウハウをすべて提供して全国展開できたらいいなと、私としては高いアンビシャスで今来ております。こんな現状でございます。先生。（拍手）

福留：ありがとうございました。なんか壮

大なプランで、地域全体で介護と医者もいて、薬屋さん、それを動かすボランティアもいてと、総合的なまちづくりの考え方ですね。そうしますと地域の活性化ということになりますが、結構、住みやすい所にしようということですが、これは日本全国に小さな町でも可能になりそうですか？

谷口：今それを日々精進しながら頑張っているところであります。今日会場にいる皆様是非後で、こういうことをしたらいいんじゃないなどお知恵をいただけると大変嬉しいです。よろしくお願いいたします。

福留：ダイナミックな作戦ですよね。小川さん今の話、カナダにはないでしょうね。

小川:ひとつお伺いしたいのですが、先程、横浜のプロジェクトで、行政とＮＰＯといったカルチャーの異なる組織が協力して行わなければいけないという事に大変さがあるということをお話されていましたが、その大変さを乗り越えるため工夫している点がございましたら、教えていただきたいと思います。

谷口：いえ、先生先程ブリティッシュ・コロンビア大学という違う国で大変ご苦労されたと思いますけれども、言葉の壁ってもちろんありますよね。全くある意味、カルチャーが違うと生まれ育ったところが違うとその言葉、同じ日本語でも違うんですよ。たぶん。ということはコミュニケーションを如何にとるか。ともかく我が社の会議は私自身が会議は好きじゃないので、１時間以内 50 分にしなさいと。人間の集中力は 50 分で切れると言われます。なので 50 分以下と、１時間させません。ティーブレイクをさせるといった仕掛けをしているんですが、今回のこの会議２時間でも３時間でも５時間でもやります。とことん話しをします。そこがですね、本当にそれぞれそれぞれが忍耐なんだと思います。我が社の部長クラスまあ私は熱き思いを持っておりますからこのプロジェクト会議には出ます。５時間でも忍耐します。お互いコミュニケーションが持てるまでお話をします。ですから、大変時間がかかります。2000 年からやっているんですからね、５年経っちゃいました。そのようなコミュニケーションをまずとるということなんじゃないかと、今は一言で思っております。

長江：社長がそういう企業をバックにした形でボランティアをやろうとか、まちづくりをといったかたちに一番ついて来そうで来ないのが社員じゃないかというふうに思うんですが、そういうところの理解、とことん話し合う以外に谷口社長さんのコツみたいなものはありますか？たとえばそういう社会貢献をやっているという事が社員にとってプライドになるっていうようなことは、実はバブルの当時にはよく企業が儲かったお金をいろいろなかたちで社会貢献にお金を出すということはものすごい数の企業がやりましたよね。しかしそれがバブルが崩壊して潮を引いてしまった後に、逆にいえば 2000 年から始められていると言うことなので、社会貢献をしていくということが逆に言えば利益を上げていなくてはできないし、様々なことで人間の潜在能力の活性化というか、変革というか変化を呼ぶんだと思うんですけれども、引き摺り出していくコツも大変なことだろうと思うので、そういうところをもしコツがありましたら、教えてください。

谷口：コツですね。私、女性に生まれてよかったと思うことがいくつかあるんですが、まず、子どもを産んだことですね。これはもうとても私にとっては女性に生まれてよかったと思う一つの大きなこと。次にはですね、2002年度に世界優秀女性企業家賞という賞をいただいたんですね。それも女性だから女性ゆえの賞です。如何に女性企業家が少ないか、アメリカでは180万人ガンガン起業しているのですが、日本ではまだまだ女性社長さんが６万人、創業者ですね。隣にいらっしゃる杉本社長のような老舗とは又違った起業家としてはたった６万人なんです。女性としてですね。あと、３つ目としてはうちの会社８割女性なんですよ。なので、ここでも良かったなというのはですね、女性の社員さんが薬剤師とかケアマネージャーそういったお互いに先生、先生と呼び合える一つの集団というのもあるかもしれませんが、女性の社長さんが女性社員さんに物を喋る時にですね、やっぱり女性支援になるような、例えばこのタウンヘルスケアステーション構想にしても私はいつもいつも申し上げているのは、65歳で高齢者などというのはとんでもないと、75歳新老人、新しい老人ですよ。85歳で真老人と私の敬愛する日野原先生が運動されていますけれども、まさしくその通りで昭和39年に老人健康が施行になった時、平均寿命、その当時、40年近く前になりましたが、68歳です。我が業界では健康寿命でものをいうんですが、先程お元気ですかといったようにね。健康な人これも女性がやっと 78歳、男性は72歳です。健康寿命ですよ。ということは、65でリタイアなんてとんでもないということもありまして、女性の企業家は65歳からでいいじゃないかと、子育てが終わってそれももっと後の話、前の話で65 歳から起業されていいんですよというような私の今女性起業家支援はあくまでも高齢者の女性をたとえば介護関係のお仕事いっぱいあるんです。まだ足りないですから、起業して欲しい。それもこの、タウンヘルスケアステーションの商店街の中で起業しちゃってくださいというようなお話もします。そうしますと社員女性でしょ。うち定年ないんです。自己申告なんです。国家資格者ですから目が見えなくなるとか、自分で目がとても見難くなって調剤過誤、事故をおこしてしまうとかね、そういう時はご自分で私はもう無理だと手を挙げてくれますので、その辺で非常に女性でよかった女性社長さんでよかったと今女性企業家なんていう言葉をいただきましたけれど女性社長さんですよね話が、とてもその辺がついてきてくれているなと、かといって男性社員を雇わないかといったらそうでもないんですよ、あくまでも男女共同参画の一環でございますので、ということはありえません。そんなところでよろしゅうございますか。

福留：はい、どうも

杉本：谷口社長とはだいぶ前からのお友達なんですけれども、改めてお聞きをすることがございませんで、やはりこう、うちの会社も８割方女性の社員がいるんですけれども、やはり私の会社もそうなんですけれども女性社長さんで特に谷口さんのように多岐に渡ってマルチな活動をなさってる方ご家族はどのように理解をいただいているのか私は非常に私の家族に対して理解してもらうということがなかなか苦心しておりまして、また、私どもの会社にいる社員もですね、正社員もおりますし、派遣社員も

おります、そしてパートさんで来て頂いている方もいらっしゃるんですが、なにしろ、うちの家族がという問題が非常にございますので、これから段々、段々と仕事を拡げていくにあたってですね、これは本当に基本中の基本なんですけれどもそういったことを谷口社長に伺ってみたいと思っておりますけれども、よろしくお願いします。

谷口：なんですか、私ばかりプライベートな話をさせていただくということは親友だからこそ振っているのでしょうが、後で先生方にも回しますので、その辺は一つ社会進出するための家族のサポートというもので回しますので、どうかよろしくお願いします。私はですね、女性であるという喜びを今語りました。まあ、母であるわけですね。妻であるとこういろいろあるわけですが、その時その時、例えば実の父が寝たきり、まあ、この辺は非常にプライベートなお話で恐縮ですけどね、そうなるといきなり自分はものすごく娘になっちゃうわけですよ。娘に、親族どこにも娘がいませんで、私ひとりなわけですね。そうなってしまった時にはもちろん介護に 120%いくわけですね。でも社長さんを 50%でするわけには行かないですから、これは私の社員にもいつも言っております。70%である意味全部をこなしながらその時その時の 120%出す力を残すように自分をコントロールするんですね。非常に難しいんですけれどもね、ですので、娘の受験の時はもうおもいっきり娘の受験、社長さんは6割になるかもしれませんが、70 でキープするとかそういうようにその時その時女性はしなやかに、男性もそうですね。男性ももちろんしなやかにその時その時に発揮するパワーをコントロールする。元気じゃないとできないんですよ。スピリテュアルにも元気でなければとてもできない。で、この家族のサポートもちろんそれを要請するにはその姿勢をいつも見せなくてはならない。自分がパワフルじゃないと家族はサポートしてくれないですね。弱った時まだ弱っていないからサポートしてもらっていないかも知れませんけどそういった使い分けをしています。それでなんとかついてきてもらっているのかもしれませんが、どうでしょうか。

長江：なんかちょっと恥ずかしいんですが、家族のサポートですね。ひとつはですね、私には子どもがいないんですが、夫はおりまして、パートナーの選択というのは本当に自分にとって、大切でした。皆さんレジュメを見て頂きますとわかると思うんですが、私は結婚する気がまるっきりなかった女の子で、小さい時になんで女に生まれたのかわからないみたいな、男の子みたいな女の子というんですか、女性であることに大変違和感がありまして、どうしてそうなったかというと、やっぱり私が石材業を継がなくてはいけないというか、三代目にならなくてはならない業界は全員男であるという社会なんですね。石屋ですから小さい時から、継ぐんだぞ、継ぐんだぞと、頭に刷り込まれたところが、男のハードルを飛ばなくてはいけないということで、常にそういうことが違和感になっておりまして、登校拒否などしたような時期があります。それがなんと大学院生の時に結婚してしまったのです。結婚してしまった理由なんですが、しまったではないんです。その理由というのはお願いをしないで自分がやりたい事を理解してくれるという人はもしかしたらこの人しか、世界に一人ぐらいしかいないのではないかと、早とちりをしまして、

つまり女が勉強を続けるという事を普通に理解してくれるというより、当たり前のことじゃないかと、俺が止めないのに、なんでお前が止めるんだと、そういうタイプの人に出会ったので、石屋を継がないでいいのは、この男と結婚する事だけだと思って、学者と結婚しました。その後父が倒れたということがあって、会社がつぶれそうになったり、様々の事があったんですけれども、家族、大変今は生まれてきたことを感謝できるほど愛しております。どうしてそういうふうに思えるようになったかなというと、やっぱりいろいろな危機があるたびに逃げずに真正面から家族と付き合い向きあうというんでしょうか、さっき谷口さんが言われたように受験の時には受験に一生懸命、当たり前のことなんですけれども、受験をおいておいて企業家としては生きていけば、どこかに綻びができてしまうと思うんですよね、元気に仕事もできないですね。父が倒れたので、実家から 300m、というかこの前、測ったら 150mだったと思いましたが、近所に住むとか、あるいは２度目倒れたら、実家内に住むとか、しっかり出戻りまして、離婚もしないで出戻って、たった一つ、自分にとって選択肢が、拡がることができたのは、やはり職住接近ですよね、職業と住居が非常に近かったからできたのです。それが、すべてだというふうに思います。やっぱり、さっき小川さんが言われたように、時間の使い方って非常に重要なんですね、人は皆平等に 24 時間しかないところで、なおかつ松戸青年会議所の仕事までやって、夜中３時まで常任の会議なんかやって、それで９時には教壇に立っていなくてはいけないなんていう異常事態ができるのも地域で密着していたからだと思います。

福留：長江先生、今の話を続けていただきたいのですが、今の家族のことも含めてね、理解を含めてね、地域との係わりを先生の場合は、持ちましたね、特に松戸の青年会議所とその辺の事と、今の話を加えていただくとどうなりますか。

長江:はい、先程お話したように、中学校の２年から高校の３年まで半分ぐらいしか学校へ行っていない子どもでした。それが聖徳に入りまして、好きなことを大学でできるということで、とても満足して、学歴的に積み上げていくという事があったわけですけれど、地域とは一切係わらない人生だったわけです。それがですね、ある時、うちは八柱の石屋さんなわけですからあそこ 39 軒石屋があるんですよ。そこになんと青年部があって、青年部は男だらけなわけです。はっきり言いますと、39 軒中女しか生れなかった家が７軒しかないんです。この職業はほとんどの場合、養子さんを貰って、その人を全面に出して女の人は後方部隊でお金を握っているというタイプなんですね。そうすると、私は夫が学者なもんで、後方部隊にいられずに父が何度も倒れるものですから、と、いっても地域社会というか、自分の会社以外の石屋さんとは係わるつもりがさらさらなかったんです。そうしましたら、ある大手の石屋さんのお嬢さんがこれは一人っ子なんですけど、彼女のいとこになる人が青年部の会長をやるって話があって、そうすると一人を入れてつぶれちゃいけないから、ついてはうちの目の前の会社なんですけど、幼馴染の男の子がやってきて、一人入れるから君一緒に入ってよと言われたんですね。入ったら男だらけでなおかつその彼女の方は養子さんを貰ったら、さっさと辞めちゃいました。実はその地元

の石屋さんの会に入ったら、幼稚園の時に知り合いだった範囲ではなくて、全体の石屋さんが見えてきて、なおかつ役員になれと次の年に言われました。６人の役員のうち５人が青年会議所に入っている人で、まんまと勧誘されまして、入ってみると小学校とか、中学校というのは、学区で行くじゃないですか、松戸市というのは先程もいいましたが、47 万３千人で実は東葛地区一番大きな町ですよね。駅前は、そんなふうには見えませんけど、ということはこの町に入ったら、実は私、高木小で常盤平中学なんですけれども、高木小という田舎の小学校と常盤平中学という新設校の一期生なんですが、たとえば、中部小の出身の人とかあるいは小金の方とかそういう区域を越えた５つの区域を越えた所にいきなり入れられちゃったわけですよね。そうすると業種も違うし、すごく人間関係そのものが、面白いですよ。なおかつ自腹を切ってボランティアしろと言うんですよね。それが目標の団体ですから、自腹を切ってボランティアしながらなおかつ男も女もないぞという体育系に入れられて、初めて逃げるに逃げられない地域の人とお願いに行ったり、いろいろイベントをするお願いするは、クレームに対しては謝りに行くはで、そこで初めてですね、松戸ってこんなに面白いし、こういうマイナスもあるしそれから逆に言えば、こんなに素晴らしい人達がいるんだというのに目覚めてしまったのです。松戸から日本、日本から世界という青年会議所の方の活動を広げて行ったんですけど、おかげ様でそれが為に世界 30 カ国のお墓研究も進みまして、自腹を切っていく限りはイギリスに行ったら墓を見なければなと。それと共にですね、聖徳に勤めておりますから、当然墓だけではお金がもったいないということで、必ず外国へ行ったら、大学を訪れてなおかつ地域のコミュニティーカレッジとかそういうのを見て回るという点から言えば、一石二鳥、三鳥ぐらいの事を見てまわりました。そういうところで、非常に貧乏性の昭和 20 年代に生れておりましてそんな形でちょっと視野が広がっていっただけで葱の生産農家の方に頭を下げて見学させてくださいって言えば、その葱を生涯学習の中に活かすとか、あるいは葱を食べていただいて全国から来ている千人の寮生に地域に戻って行っていただいた時に松戸といえば、玉三白玉粉とか葱とか茄子よいち漬とかあるいは梨ですね、そういったものを食べてもらった体験しか残らないと思って、そういうのが生きた生涯学習の企画が丁度循環していくというのでしょうか、だから石屋さんだったがためにそういったちょっとずつ人間関係と幅広い視点が広がって行ったんだというふうに思います。

福留：ありがとうございました。最後まで面倒をみるよという感じですかね。

長江：そうです。揺りかごから墓場までです。

福留：八潮市の前の市長が自分の家の墓を全部変えたんですよ。それはね、藤波家之墓だったのを、生涯学習之墓と書きましてね、私はこの世でもまちのリーダーである、でも、あの世でもきっとリーダーであるに違いないし、生涯学習を続けるのだからと、だから歴代の墓を全部生涯学習之墓としちゃったんですよね。もうひとり皆さんもきっと聞きたいでしょうね。覚悟したでしょう彼女も自分の家はどうなったかと、先程の課題が一つ残っておりますから、小川さ

ん、最後は杉本さんがまとめますから、では、小川さん。

小川：家族のサポートの話ですか？長江先生の今日の資料のところを見てはっとしたのですが、私もそうだと思う点がありまして。長江先生の資料をちょっと見せていただいてもよろしいですか？ご結婚された時に、悪妻宣言をされたということで、まさにそれなんですね。いい妻になることは最初からあきらめていました。まあ、家庭人としては低い評価ですけれども、例えば、カナダの子育て支援に関するＮＰＯのパンフレットを見ておりますと、いいお母さんになる必要はないんだよ、ゆっくりやればいいんだよと書かれております。いい母親にならなくてはならない、いい妻にならなくてはならないと思うとすごいプレッシャーになって、押しつぶされてしまうことが多いんじゃないかと思うんですね。それで、私は最初からあきらめて、悪い妻でいくことにして、現在に至るのですが。
家族のサポートという事ですが、家族のサポートにはいろんな事があるんですけれども、一番良かったなと思うのは、やはり、生きていく上ではいろんな悩みや課題、辛い事沢山ありますけれども、それを家族がいたらその日に忘れられるというメリットがございます。話をするだけで、聞いてもらうだけで忘れてしまって、次の日を迎えられる。でも、独身のときは、これが２泊３日であったり、３泊４日であったり、その悩みが続くわけですよね。それが家族の大切なサポートであったわと、そういうサポートがあったから仕事ができるのかなと、思っております。

福留：はい、ありがとうございました。今度は、最後に杉本さんに先程の仕事を会社を経営しながら様々な社会活動の中で女性の地位と言うか拡大して言わせて頂いているのですが、その辺を含めてお話いただければと思います。

杉本：なんか私が振った為に、皆さんすみません。ただとても家族というものは大切で、家族の応援なしには、社会活動もそして会社の仕事もできないなという事をいつもいつも痛切に感じておりますし、私も先程そういったことが気になりましたのは、うちの社員全員毎年面談をしております。そしてパートの方は半年に１回ずつですね、30分ずついろんなお話をさせていただいてやはり企業といたしましてどういう方がどういう風に考えて、どういうポリシーをもって仕事をしていただいて、私どもの商品をお客様方に伝えてくれているかという事をやっぱり分かり合うにはお互いの人間と人間の理解が成り立たなくては、いい商品があっても、たとえ美味しいお茶があっても、なかなか分かってもらえないんだなと言うことを、とても気にしておりまして、そういった時にやはり自分の待遇といった事以外に家族の話を随分される方がありますので、大変皆様方素晴らしい方々、ご家庭を持っている上で、どういう風にご

理解されているのか、気になりました。私の家は、先程申し上げましたとおり代々お茶を家業としておりまして、伊勢神宮の御用をしたり、いろんな制約がある中安全と安心の物をそしてクオリティの高い、東京に進出する時には、東京のお水がですね、まだなかなか三重県のお水とは違っておりましたので、やはりこう、温度も関係なく、冷たいお水でも上手に簡単に美味しいお茶がだせるような物を開発しておりまして、そして、父の背中を見て育ったものですから、やはり父がそういった商工会議所の会頭などをやる前には全部ですね、私や妹にいろんな事を授けて、そして会社がちゃんと行くようにということを確認してからお受けしたというふうに聞いております。そしてまたやはり今ですね、家族のサポートという点では、妹の方が生産とか財政とが全部やっているものですから、例えば新茶の時にはですね、朝からお茶を摘みますね夕方まで、そうすると夜中に全部摘んだものをもんだりしてリーフのお茶にするんですけれども、皆さん方生産の方々が一生懸命作っておられるときには、私たちも夜も寝ないで茶工場回りをします。そしてそこにはまたそれぞれのご家族の方がいらっしゃって、そういったことのコミュニケーションをとりながらいいものを少しずつ作っていくという事を心がけております。私の家の場合なんですが、やはり先程三重県の松阪と申しましたが、封建的な家でそうですね、おしんにでてくるようなと申し上げたらよいのでしょうか、そんな思いをうちの母はしておりまして、わりとお姫様育ちだったんですけれども、やっぱり商人の家に嫁いで、とてもすごくつらい思いをしたんです。それでもうこんなところは耐えられないからと、随分話を聞かされました。ところが父が亡くなりましたんですけど、やっぱり８年前に、その時はショックで手と足が動かなくなりました。それで、あんなに嫌だ嫌だと言っていたのにそこはやっぱりお父さんの事が好きだったのねと、妹とびっくりしたんですけれども、その時には私非常に先程先生もおっしゃっていたことですけれども、青年会議所で介護の訓練をしていたのが役に立ちました。そして私は息子がいるんですけれどもやはり仕事をしながら息子を育ててまいりますのに、どういったらグレないでいくだろう、私女兄弟ばかりなので、男の子をどうやって育てたらいいのかが分からなかったんですね。それで、朝見送って、きちんと見送る、お弁当を作るとか最低限のことは、ちゃんと連絡の返事はする、うそはつかないなどですね。いろいろ決めまして、決めた５つの事だけは、ちゃんと守って、あとはごめんなさい状態だったんですけれども、それからもう一つの中に鍵っ子にしないというふうに決めまして、朝見送った後に仕事に行きます。そうしましたら、必ず帰って来た時には、私が家に居る、その後仕事に行かなくてはいけないから、あなたがちゃんと帰ってこないと私は困るのだと言い聞かせまして、それで、その時にあって、お稽古事も全部、取引先の周りにお稽古事があって、10個ぐらいやっているわけですね、で、そのお稽古事に送って、そのやっている間に私は取引先に行っているというようなことをしまして、それが終わりましてまた一緒に帰るなり、どっかで買物するなり、食事をして、青年会議所やロータリーといった活動をやっていた。というふうにずっとやってまいりました。で、やはり本当に私どもの会社は同族会社でございますから、母も役員、妹も役員というような形でやっ

ておりますけれども、やはりどれだけ苦労しているかというのは、それぞれが分かっているわけで、そして一番理解をして欲しいのは子どもだったわけなんですけれども、その部分で、息子が私が朝お弁当なんか作っている時にも眠くてしょうがなくって、ばたっと倒れたことがあったんですね、そして子どもが今日はいいよと言ってくれて、やはり今日はいいよといってくれるまでやらなくてはならないんだなと思いまして、それで、先生もお母さんができないのにそんな無理することないんですよと、ここまできたら大丈夫といわれたので、やっと鍵も渡しましたし、それから先生にもお願いして、グレないでここまで来れば大丈夫って言ってくださったんですから、何かあったら、先生お願いしますよというふうに言いまして、今に至っているわけでございます。やはり家族の理解というものがなければ、今でも理解してくれているのかどうか分からないんですけれども、もう息子は別のところへ修行に行って、就職して自立をしてはいるんですが、やはりあの、自立をしなくてはいけない自立ができない子が多い中で、なんとか自立ができる子にと思い続けまして、全部自分で決めて、私に何の相談もしてくれなくて、最後の最後になると相談してくれるようにそれが成功だったか、失敗だったかもう少し経たないとわからないのですけれどそういったことがございます。そしてまた私もこういったいろんなボランティア活動をする中でやはり保守的な世界なんですね。日本茶というのは、特に食品業界は保守的で食品の経営者、女性の経営者の会にももちろん出席しておりますが、私がなぜ、ロータリーの皆さんにお配りしている中で、女性の方々のそういった女性が初めて入れるクラブを作ってみたり、初めて初代で会長をやらせてみたりとか、あと、地区で女性の委員会を作ってみたり、あと申し上げますと女性女性というのは、気恥ずかしいんですね、すごく男ばかりの社会で育ったりしていましたので、そしてまた男尊女卑で亭主関白が正しいんだよというような家で育ちましたので、そんなジャンヌダルクにはなれないなと思いました。ですけども、私がやらないで誰がやるのかなというふうに問題にも思いましたし、それからやはりそういった古くからの家に育った人こそ、そういった男性の方々にアピールできるというふうにガバナーの方に言われまして、ようやく役立てるんだなというふうに思いました。やはり、こちらに男性の方もたくさん来て欲しいなとおもったんですけど、女性が社会でいろいろな力を発揮する為には男の方々のご理解がないと是非そういったことがないとやっぱりやっていけないといったことがございます。うちの嫁さんはいいんだいいんだと言わないで、おうちへお帰りになりまして、うちのお母さんにも何かできることはないかという事を、こういういいところがあるのかという事を、是非もう一度見直してあげていただきたいと、思います。私が、男性社会においても、女性の方々のいいところをアピールしていく上には、男性の方々のご理解がなくてはいけませんし、きっかけをもらったのは家の家業だというふうに思います。代々伝わってきた、大切な本物のよりひろく、ひとりでも多くの方々に知っていただく為にはどうしたらいいか、アピールするきっかけでロータリークラブですとか、青年会議所東京商工会議所その他もろもろの会に参加させていただいて、そのきっかけをいただきまして。また、いろいろな皆さまに直接お話を伺うことがで

きまして、これもまた会社に持ち帰りまして、私どもの参考にさせていただきたいなと、思っております。　本日は良いチャンスを頂きありがとうございました。

福留：ありがとうございました。さて、話はまだまだ続く予定だったのでありますが、今の話を聞きながら、普通女性というのは、市民として、母として、妻として、また女性として働く人達としてという５つの柱があるといわれてきましたよね、ところが今話を聞いていますと、それに「娘」が加わったのね、「娘」というのは今までなかった言葉ですね、それが改めて今加わったと、感じました。なおかつ、このメンバーを見ると社会的にまた、経営者としての顔もありますので、これは凄いなと思いまして、先程の谷口さんの話の中で 100%のがありましたし、悪妻宣言もあったし、Ｂ級宣言みたいのもあったし、まあ努力しないでいいですね。非常にこれはいいなと、悪妻宣言も、Ｂ級宣言もいい妻なんだろうなと思ったりしたもんであります。男は決してそう思っていませんからね、そういうような様々な顔や姿勢があったのを伺いました。そして、このテーマ全体では、女性が地域参加をするとはどういうことであるかとか、どういうきっかけだろうか、どういう問題があるんだろうかそれをどういうふうに克服するのだろうかということが根底に聴くことができたらいいかなと、思ってたんですよ。図らずもそういう話が随分聞けたような気がします。話が変わりますけれども、これから７月にかかって、私たち研究所では、まちづくり研究会と一緒になって、ここで定期的な勉強会を月に１回か、２回のペースで思っています。研究か自由な研究会です。この前の方々もそれぞれまだですね、今日は一人 20 分足らずの話しかありませんので、２時間でも足りないくらいのメンバーですから、これは研究会の中で、もう一度おいでいただきたいと思います。続きをお話いただきたいと思います。で、会場の皆さんもそのように思っておいていただきたいと思います。今日聞いたので、「あ、それいつあるのか」と、気にしていただきたいと思います。定期的に本当に身近な研究会にしたいと思いますので、参加をお願いしたいと思います。さてこの話は次の午後の分科会につながります。分科会は具体的な取り組みだとか、会場の皆さまも、午前と午後のメンバー、午後から見える方も多いわけで、具合の悪い方もいらっしゃるかと思いますが、どうぞ時間の許す限り、引き続き午後の分科会にも繋がっていただきたいと思います。そこで、先程案内にもございましたが、４つの分科会に分かれて話し合いますので、それにご参加いただきたいと思っているわけです。もう私が他に話すスピーチはございませんが、たった一つだけ申し上げておきたいわけで、もう皆さんの資料の中に入っているかと思います。創年という言葉、実はもう皆さんにご協力いただいているわけですが、「創年」クリエイティブに生きる創造する創年です。「老人」とかそういう言葉をもう止めちゃいましょう。「高齢者」も止めちゃいましょう。創年は歳を取りません。でもまあ、一度は亡くならないと石屋さんが困ります。「創年」として活動を続けましょうというのが根底にあります。それが自分に合う力を自分に合う方法で、身体の弱い人もいるわけですが、自分に合う、できるだけのことで、周りや地域に貢献するように考えましょう。あるいは皆で貢献しやすい環境をお互い作りましょう、という発想です。それが創年

です、そういう発想がこの会にもありますので、どうぞ分科会でもそういうことを踏まえながら臨んでみていただけるとありがたいと思います。とっても短い中でも豊富だったかなと私はよろこんでいるわけですけれども、先程言いましたように、機会がありましたら、次の研究会などでさらによろしくお願いします。この会をこの時間で終わらせていただくと丁度 12 時ジャストでしょう。以上でもって終わらせていただきます。どうもありがとうございました。午後の会議もよろしくお願いします。(拍手)

第１分科会「子供の環境と地域の課題」

研究発表：　塩　美佐枝（聖徳大学人文学部児童学科教授）
研究発表：　森川　文子（聖徳短期大学部保育科助教授）
研究発表：　西　智子（聖徳大学人文学部社会福祉科助教授）

コーディネーター　村田　光子（聖徳大学人文学部児童文学科助教授）

村田：第１分科会のコーディネーターを担当します聖徳大学人文学部児童学科の村田と申します。よろしくお願いします。第一分科会は皆様のお手元に資料がございますが、「子供の環境と地域の課題」ということで皆様と一緒に考えていこうと思います。今日、お話いただきます先生の紹介をします。私のお隣から聖徳大学人文学部児童学科教授の塩美佐枝先生です。

塩:どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

村田：塩先生は東京都の教育委員会の指導主事をされました後、公立幼稚園の園長さんをされて、現在、聖徳大学人文学部で教えていらっしゃいます。文科省の委員なども多数お引き受けになって活躍されていたり、全国幼稚園教育研究会協議会という全国の公立、私立幼稚園合同の研究協議会の会長をされ、全国を飛び回っていらしてとてもお忙しい中を今日はおいでいただきました。どうぞよろしくお願いします。

次にあちらにいらっしゃいますのが聖徳大学人文学部社会福祉学科助教授の西智子先生です。西先生は世田谷区の公立保育園に勤務後、乳幼児育成相談所、現在の総合福祉センターの方に勤務、区立保育園の園長をされた後、聖徳大学で教えていらっしゃいます。

そのお隣が森川文子先生です。森川先生は聖徳大学短期大学部助教授で、やはり同じように世田谷区立の保育園に勤務、園長をされた後、聖徳大学にみえた先生です。以上の３人の先生方です。それではまず、塩先生のほうからお話いただきたいと思います。

塩：それでは座ったまま失礼いたします。はじめに「子供の環境と地域の課題」ということで、お話ししていくわけですが、私はこの議題をお話しするにあたり皆様お手元にございますように、“青年期の認知地域実態”という変なテーマをつけております。子どもたちが今、幼稚園ですと預かり保育という制度がございますので夕方の６時くらいまで園におりますし、保育園ですと標準７時くらいまで都市部ですと９時くらいまで子どもたちが保育所にいるという状態でございます。そういう実態から考えますと子どもたちが地域ではほとんど生活していないということが想定されます。現実に幼稚園や保育園の実態調査を見てみますとほとんど土日以外は地域では道を歩くこともないというような状態のようですので地域の生活が不足しているのではないか？不足の理由は生活の仕方にも原因がありますが、地域そのものが安全な道を失うとか、遊びの場が人工的になっているとか、子どもにはあまり向いていないなどというさまざま

な原因があると思うのですが、そこにも出かけていかれないという子どもたちの現状というものがあるということを、まず、踏まえなくてはいけないというふうに思います。今日、私は後のお二人の先生方が現実にどのように子どもたちに地域とふれあわせているかという実践のお話もたくさん出てくると思いますので、話題提供という形で女子大生が自分の子どもの時代を思い出して、地域というものをどのようにイメージしているかということを簡単な調査をしました。大変おもしろい結果を得られました。学術的にはどうかと思いますが、皆様とお話しする材料にはなると思いましたので、今日はあと7～8分と思いますが、ご提案させていただきたいと思います。

まず、お手元の資料をご覧ください。ページが打っていないので開きにくいかと思いますが、私のところを見ていただいて、まず、絵(図)が描いてあるところをご覧下さい。右側のページに枡(表)みたいなものが載っていまして、母とか父とか書いてあるグラフがあると思います。学生さんに自分の子ども時代(幼児期・小学校・中学校)、現在を思い浮かべて家族と学校<私は学校のことも調べなくてはならないので>と地域の関わりを思い出したとき、いわゆる認知ですね、実際はもっと違うと思いますが、自分の頭の中に印象として残っているのはどういう姿なのかということで、絵に描いてもらいました。もっと細かい調査票にはスケールの問題とか書いてあるのですが、丸の大きさの1から10まではかかわりの大きさ、自分を中心にしてくっついている状態なのか離れている状態なのか自分のイメージで枡の中に描いてみましょうということをみてみました。実際の調査ではこのグラフのなかの距離を全部スケールで測ってやったものなですが、そこは省きまして、ご覧いただくと判りますように自分の家族の生活というものが大変濃密だということがわかると思います。自分と母親。幼児期ちょっと父親がかわいそうですが、小さく押しつぶされています。中学校くらいになりますと自分と父親・母親はくっついている。母親の存在は5で父親は少し離れているけれども大きな存在になってくると思います。ところが現在はどうかというと、自分にくっついているのは弟と猫だよという感じです。父親と母親は少し離れた存在になっていると自分自身で感じているということです。学校は要素が別ということでそこはおいておきまして、地域を見てみますと地域はありません、ありません です。自分と隣の家、自分と隣の家、という感じです。このような感じを分析しました結果、前の文章のところに戻っていただきたいのですが、**(1)子どものころの地域とのかかわりについて**というところで家庭生活の数値は平均して、全部合計して221名の学生の場合、母親が幼児期8.6で中学校7.0、現在は7.0、父親は幼児期は6.6、中学校で5.1、現在は5.5ということで少しずつ下がってきている。地域とのかかわりを記入しなかった学生は221名中幼児期では85名も書かなかったのです。中学校期は92名書かなかった。現在は112名の学生が地域とのかかわりを書かなかった現実があります。何を書いたらよいかという状態です。でも、書いた学生もいます。その中身を見てみると地域で子どもと遊んだという人が67名でその大きさは6.3が平均でした。中学校期では48名で大きさは5.8ということで成長するにしたがって地域とのかかわりが希薄になっている状態がわかる。次に絵を描いてもらいました。

右側のページ**(2)子どものころ地域とのかかわりの思い出の絵を描いてもらう調査**で、子どものころの地域との関わりをグラフでは幼児期は85名の人が書かなかったにも

かかわらず、思い出の絵を書きましょうといったら、絵だけはかけるといった感じでそこで急にいろいろなことを思い出したらしく、そういう分析をいろいろ細かくしているのですが、その絵は200名の学生が書きました。関係が深い深くないは別として、思い出すことはある。そこで思い出すものは何かと描いたものを分析しましたら、場所に関するものが多くて、道が35名、公園が16名、自然環境が13名、遊び場が7名。また絵に戻っていただきますと道が描いてありますね。これは代表的なものでこれに類似したものがたくさん描かれていました。一例を見ると、自宅を真ん中にして保育園、お隣さん、公園、児童館一つ一つに線がつながっているもの。自宅から各々につながっている。自宅から各施設につながっているという認識です。自分を中心にした認識です。隣の絵は道が描いてあり学校だけが描かれており、具体像がほとんどなく象徴的に言えることは人間が描かれているにもかかわらず顔が描かれていないのです。自分が強調されている絵はない。道としての記憶、公園の記憶。公園を書いている学生も多くいました。公園を描いているが個別の顔はもたない。公園という場所についての思い出を描いている状態ということでこれも希薄をあらわしていると私たちは考えております。びっくりしたのは行事、イベントはたくさん描かれています。餅つきとかどんど焼き、盆踊りとか描かれています。ラジオ体操が8もあったのです。ラジオ体操は克明に絵が描かれていまして、地域の係りの方というような解説が書かれていました。すごく多くてびっくりしました。廃品回収が地域の思い出として描かれているものが6枚もありました。遊びそのものを描いているものは地域というより自分を描いている。遊んでいる状態を書いているのでそう認識してもよいのではないか。現在の地域での生活はどうかと絵を描いてもらいました。これは松戸の駅から学校までの地図、田町の駅から専門学校までの地図も描かせました。松戸の駅から学校までは1階部分がまったく判らない。お店に何があるのかまったく把握していなかった。駅の利用する側は認識しているけれども、反対側は認識が低くほとんど描かれていない。ゴリティーの「アンカーポイント理論」というものがありますが、生活する間に地域全体がすり込まれていく、生活すればするほどすり込まれていくということを考えますと、子ども時代にどのような生活をするかが重要で、私たちが幼児教育を考えるときのポイントを提示せているかと思いました。

現在の地域の生活を学生が今後子どもを生み育てることになる地域にどのような印象を持っているかを調査したものが**（3）現在の地域の生活の絵**です。場所に関するものがまた多いのですが、描くときにとまどってとてもざわめきが起こりました。今の地域の思い出に何を描こうか隣と相談する様子もあり、結果的にとても苦しんでいました。平日は地元の駅から家までの往復と地域の生活がない。休日も遊ぶとしたら地域ではなくどこか電車などでほかの場所へ出ることが多くほとんど人間が描かれていない絵が多く、電車の絵がたくさん描かれました。自転車に乗っている絵も描かれました。商店街を描く人、お弁当屋を描く人、絵にかけない場合は言葉で描いても良いと伝えたにもかかわらず、このような結果をみると地域とのかかりの希薄さを感じます。この人たちがやがて自分の地域に戻って子育てをすることになってその周りの地域とのかかわりを持っていくと考えた場合、このような現状をもった地域というものは子どもにとってどのような問題を持っているのかを考えていかなくてはいけないなという提

案をします。

皆様の地域の周りではどのようにお子さんが遊んでいるのでしょうか？そんなことも後ほど伺っていきたいと思います。ありがとうございました。

村田：とても興味深いお話でした。質問はすべての先生方にお話していただいた後お受けしていきたいと思いますがよろしいでしょうか？続きまして、森川先生に保育園を通しての子育て支援というあたりをお話していただきたいと思います。

森川：少しお時間が長くなると思いますが、お聞きいただきたいと思います。最初に自己紹介ですが、世田谷の公立保育園に35年間勤務しておりました。その中で子育てについて不安を持つ保護者や家族が増え、両親・祖父母などが子育てに不安を持つということが、子どもの成長に大きな影響を与えているということを実感しました。

多少調査もしたのですが、子育て相談でのケースを集計した結果や、勤務をしていて肌で感じる実感として「人との関係が非常にとりづらい子どもたちが増えてきている。無表情な様子だったり、無気力だったり、あるいは、友達と関わろうと思った時に乱暴になったり」と、確かに発達段階では未熟なこともよくあるのですが、いわゆるよく言われる“気になる子ども”の増加を実感しています。また、精神的疾患、出産後のうつ状態といった症状などを抱えている母親も急速に増えてきていると感じました。子ども自身のアトピーで世話が大変だとか、子どもにアレルギーがあって、非常に食事に気を使っているケースもあります。

このような状況は、特に３歳未満の子どもについて悩みが多いのです。３歳以上になると幼稚園に行ったり、保育園に通いだしたりして、そうした悩みを母親同士コミュニケーションをとり、相談しあいながら解決していくことによって、少なくなっていくように感じました。しかし、それでも、家庭で子どもを育てている保護者への支援というものは増えてきています。

私たちも保育園だけではなく、子育てをしている保護者に対して、20年も前に子育て相談を開始しました。また、その後、保育園に通う子どもの家庭だけでなく地域の子育て支援の取り組みも行なってきました。このような取り組みは、保育園だけではなく、地域にある施設同士が連携し、さらに子育て支援力を高めていこうという仕組みを紹介したいと思います。

今、図（＊頁図１参照）が出ています。

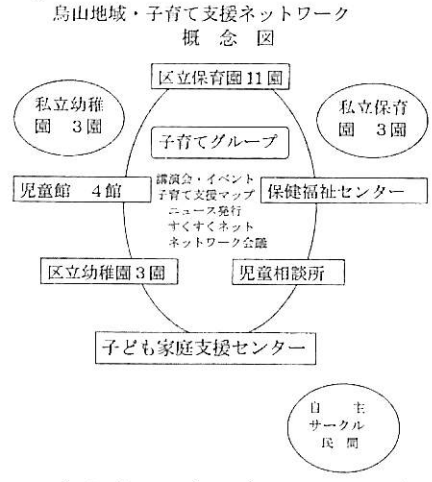


図3-1 烏山地区子育てネットワーク概念図

烏山地域での世田谷の子育て支援の事例について申し上げます。世田谷区は人口が80万人、41万世帯で0歳児から4歳児が約3万人弱、4歳児から9歳児が同じく約3万人弱となっています。世田谷区は、5つの地域に行政区域を分けていますが、その1つが烏山地域であり、私が保育園勤務していた頃にネットワークが発足しました。その頃からのお話をしていきたいと思います。

世田谷・烏山地区の地域ネットワークづくり

烏山地区には公立保育園が11ヵ所ありまして、児童館が4館、保健福祉センターがありました。これらの施設が中心となって、地域全体の子育て支援ネットワーク作りを将来目標として、まず、お互いにどんな子育て支援を行なっているかという情報交換を行ないました。最初は不定期に行なっていたものを定期的にしましょうと、翌年には定期開催に漕ぎつけ、2年後には地域でどのような子育て支援の場があるかということについて、保護者・地域住民に知らせようと〈子育てマップ〉づくりを始めました。そのために、それぞれの施設から代表や職員が参加し、まず、3千部を作りました。4年後には、子ども家庭支援センターができまして、さらに公立の3幼稚園、児童相談所も入りまして、地域にある子育て関連の施設が手をつなぎ、情報交換を行い、連携を深めることができました。

〈子育てマップ〉を作った後、それぞれの組織で行なっている行事や子育て支援について一緒にニュースを出すことにしました。〈ネットワークニュース烏山すくすくねっと〉と題して、年に5回各5千部を発行することができました。現在では毎月発行しており、さらにインターネットでも検索できるよう発信しています。以上は烏山地域についての話ですが、世田谷区5地域では、それぞれが同じような取り組みを行い子育ての情報を発信しています。特に烏山地域で特徴的なことは、現在まで継続的な取り組みが行なわれている中で、保健福祉センター・児童館・保育園の合同講演会が行なわれたことです。合同講演会は保育の手作りおもちゃや子どもの写真の展示、栄養士さんや看護士さんによる相談、臨時の保育室などを設け、分担しながら定期的に開催しています。

その他の交流事業としては、保育園では、地域の子育て支援として、〈子育て電話相談〉、地域の交流事業としては、〈園庭開放〉やいろいろな講座への呼びかけ、〈親子で遊びましょう〉などの行事への招待、といった取り組みをしています。保健福祉センターでは、〈育児相談〉〈家庭訪問〉〈歯科相談や検診〉〈その他の専門相談〉〈離乳食の講習会〉などを行なっています。児童館では、お祭りの企画をしたり、乳幼児サークル（曜日毎に親子で一緒に遊ぶ）の援助、絵本の貸し出しや、〈育児相談〉、〈遊びの広場〉〈お母さん同士のサークルの支援〉、部屋の開放などそれぞれが個別にも子育て支援を行なっています。また、これとは別に、保健福祉センター（現在は子ども家庭支援「からすやま」を併設）で、〈気になる子ども〉、ちょっと障害をもっていて、お母さんが育てるには難しい、あるいは悩んでしまって育児に不安を覚えたり、そのことが原因で虐待してしまいそうなお母さんたちを保健福祉センターに集まってもらい、支援しています。

その際、「遊び方がどうもよくわからない」「子どもとのかかわり方がわからない」といったケースも出てきます。こういった場合、保健師では専門外でよく判らないので、保育園からおもちゃなどを持って保育士が出向き、子育てクループに参加して、具体的な遊ばせ方をお母さん達に見たり、感じていただくようなことも定期的に行なっています。

このような様々な交流をしながら、地域の

情報の共有化を図った結果、総合的な子育て情報の発信、新たに引っ越してきても、どの場所に行っても同じ情報がすぐ得られるようになりました。

個別ケース検討の連絡会

このほか、地域ごとに個別事例が様々にあります。虐待のある子、育児困難な重いケースの場合、それが保育園で発見されたり、児童館で発見されたり、保健福祉センターで発見されたり、あるいは自分から悩みを相談に来るなど、多様な取っ掛かりがありますが、その地域の全ての人が虐待や育児困難な重いケースを一つの場所で抱えるのではなく、地域全体でそのことを共有していきましょうと虐待などの個別ケースについての連絡会を発足させました。この連絡会は幼稚園、小学校、中学校、など全ての教育機関、児童相談所、それを窓口で受けてコーディネートする行政機関（子ども家庭支援課など）、さらに児童委員や民生委員など地域で子どもにかかわる人たちが参加して、まず総体的に取り組むことを確立するため、準備会を数回行い、連絡会を立ち上げました。この連絡会自体は個別ケースの解決を直ちに行なう会ではありませんが、それぞれの専門職種の人たちが、情報の共有を行い、連絡を取り合って、緊急に対応する必要が生じた場合関係する人々が集まって個別ケース会議を開き対応することができるようになりました。

このような取り組みを行う上でも、これまで取り組んできた、子育て支援ネットワークの活動を通して得た、人と人との関係が大きく役立ちました。連絡会の結成に関しては非常に大きな成果があったと考えています。しかし、今後地域のネットワークはまだまだ行政と地域がそれぞれの枠に止まらず柔軟な積極的な取り組みが求められています。

公立保育園の地域との連携

次に公立保育園が個別具体的に地域との連携をどのようにしているかということを紹介したいと思います。公立保育園は世田谷区には54ヵ所あります。以前は、それぞれの園では、独自の発想で夏祭りや運動会、さらに卒園児の子どもたちに呼びかけて地域交流事業を行なって参りました。

古い話ですが、1992年世田谷区が地域交流事業の要綱を作り、お祭り好きな世田谷ということもあって、一園当たり10万円の予算がつきました。11園が予算を持ち寄り備品の整備を行い、いろいろな行事を各園工夫を凝らし展開し、大変好評で定着していきました。流れの中で各園内で実施するだけではなく、保育者が積極的に地域に出て親子と一緒に遊び、子育ての楽しさを伝えることを目的に、保育士による遊びの紹介、栄養士・看護師による育児相談コーナー設け、〈烏山遊ぼう会〉と名付け区民センターホールで催しました。すごい人数が集まりました。100組200人以上の参加で、本当に身動きが取れないほどの人気だったのです。区民会館は広く、ホールを使ったり、和室を使って数多くのコーナーを設けたのですが、これではじっくり遊べないということで、翌年2ヶ所〔区民センター・新樹苑（特養）〕で開催しました。しかし、これもまた満員だったので、さらに保育園2ヶ所を加え計4ヶ所で同時開催ということになりました。が、イベントで地域での保育園の認知度は上がったこともあり、今後は、もっと身近に日常的に利用できることが大切ではないか、顔と顔を合わせて親密な関係を築くことが大事ではないかということになり、原点に戻って、保育園とその保護者との親密な関係をつくりながら、地域交流事業を展開していくことになりまして、現在も続けられています。

その他地域の特徴を生かし、老人ホームなどがあるところでは運動会を一緒に行なったり、毎月訪問したりと、定期的な交流も行なっています。小学生・中学生・高校生との交流も実施しています。

このように保育施設は、今後、地域の中で、子育ての知識、経験、技術といった専門性やその保育園の施設自体を活用する地域の子育て支援の中核として益々重要になってくると思います。

子育て支援センターなどの取り組み

他の自治体や区では、積極的に取組んできた子育て支援センターについて、世田谷区では児童館を中心に、保育園などに子育て支援センター機能を持たせてきました。今後は独立した施設を建設することになっています。現在は太子堂（世田谷の中心部）にある子育てひろばという、お母さんと子どもたちが何時でも集まったり、遊べる所があります。保育園では、日時が決まっていて、保育園の時間に合わせなければならなかったのですが、こういった広場を設けることによって、制約がなくなりました。そうした中で、私立の保育園が、〈負ぶい紐〉の講習会を行なったり、私立保育園が参加して子育て中の親子と遊んだりといったことを定期的に行なっています。イベントではなく、地域と密着し、定期的に交流し、その中から、母親同士の交流も芽生え、サークルを立ち上げたり、自宅周辺での放流を深めているという成果を挙げています。

中学生との交流事業

先ほどの中学生との交流事業についてビデオでご紹介します。私が園長をしていた保育園が取材されたので、そのビデオを見て頂きたいと思います。練馬区のボランティア活動と一緒にご覧下さい。

《ビデオの内容》

1．60歳代の女性たちのボランティアグループ『手をつなごう』と子育て中の親子との交流の様子

2．中学生と子どもの交流

今ご覧頂いた、この中学生体験学習は、10年以上続いています。受け入れ前に中学校に出向き、事前の話し合いをします。2クラス60人が一度に来ますので、最初はどうなることかと思っていたのですが、子どもたち一人ひとりが、お兄ちゃんお姉ちゃんたちとの交流を楽しみにしていて、中学生が足りないぐらいでした。先生が「次の授業があるので帰りますよ」と言っても皆帰らないのです。中学生は、この体験学習を終えると、感想を書くのですが、自分たちにもこんなに小さな頃があった事や、また、可愛がってもらったことを親に感謝、親にサンキューといったメッセージがたくさん綴られています。時間があれば後ほど紹介させていただきます。

今後の課題

このネットワークづくりの図を見て頂きましたが、世田谷区では、公立保育園が54園、私立保育園20園、公立幼稚園12園、私立幼稚園58園、その他幼稚園に類似した施設が4園と多くの就学前の子どもたちが集まる所があります。それに加えて、ネットワークに入っていない無認可の保育室が26ヶ所あります。さらに最近急増している認証保育所が21ヶ所もあります。自治体の財政難から公立の民営化も広がっています。法律改正で経営主体は企業の参加も認められた現状で、このネットワークは大変重要だと感じています。

認証保育所や無認可の保育所はネットワークに入ってこられないのです。施設の運営だけで、手一杯で、これらの施設と連携を持つことは大変難しいと実感じました。これから、そのような施設に通っている子どもたちをきちんと地域の中で育っていく環境をどう作って行くか、これからの取り組みが必要だと感

じています。イベントなどに積極的に参加する保護者は良いのですが、虐待のケースなども発見しづらいことも実はあるわけなのです。そういった人たちにどう手を差し伸べていったらよいかということで、今、保健師が在宅訪問を行なっていますが、人手の問題で回数も不足し、不十分な状態です。

平成18年度11月を目標に現在準備しているのは、保育園の保育士・看護士・保健師と保健所の保健師が合同で訪問機能を強化しようという計画です。また、保健所に来る３ヶ月検診・６ヶ月検診などでフォローが必要な保護者に対して、（当然同意は必要なのですが）定期的に１週間に１回、あるいは１ヶ月に３回位を目安に保育園に親子で体験保育をという形で門戸を開こうという計画です。そこで、給食を食べ、保育園で過ごす時間を長くして、親たちに保育士の子どもに対する接し方を見て、学習してもらったり、現場の保育士たちも、丁寧に伝えていくという〈体験保育〉もほぼ同時期に実施できるよう計画しているところです。

どうもご静聴ありがとうございました。

村田：ありがとうございました。それでは西先生にはまた同じ地区になりますが地域の特性を生かした事例をお話していただきます。

西：私のほうからは、「“顔”の見える地域作りをめざして」ということで“トライアングルフェスタ”というイベントを通して見えてきた、地域と子どもの関わりについて発表させていただきたいと思います。

〈ＶＴＲ上映〉「トライアングルフェスタというイベント誕生の経過を紹介」

「トライアングルフェスタ」とは、東京都世田谷区の上祖師谷地域で行われている地域のイベントの名称であり、３つのイベントをひとつにしたもので平成５年に第１回が行われました。それ以来、毎年11月に行われています。

３つのイベントとは、①“フィールドフェスティバル”という名前で、町づくりのために始まった地域のお祭り、②“ぱるランド”というぱる児童館が中心となって行ってきた児童館祭り、③“祖師谷芸術祭”という留学生会館（昨年度から独立行政法人国際交流会館と名称を改めている）が中心となり国際交流を図るための行事。この３つのお祭りがまるでトライアングルのように３辺を形作り、響きあって作り上げるイベントなのでこの名称がついています。

最初に見ていただきましたビデオはトライアングルラアングルフェスタが始まって２年目のものです。それから12年経って、今年は13回目を迎えます。私自身も一昨年、保育園の立場でこのイベントに関わる機会がありました。この経験を基にトライアングルフェスタが地域の子どもたちの関わりの中でどのように変遷してきたかを問題点も含めてお話させていただきます。

先ほど、森川先生のから地域でいろいろな子どもたちの支援というネットワークのお話がありました。まさしくこのトライアングルフェスタは、０歳の乳幼児から青少年、成人、高齢者それに日本に留学している数十カ国の留学生までも輪を広げ、子どもの健全育成を中心に据えて地域のネットワーク作りをしているかと思います。

地域のイベントを多くの性質の違う団体が関わって開催していくときにはいくつか確認すべき点があるかと思います。

まず、第一点としてその地域の特性は何なのか考え、特性を生かしていきましょうということです。第二点目は住民の構成を考慮していくことです。第三点目が目的を明確にして

いくことです。第四点として相互の立場の理解は欠かせないということではないかと思っています。以上のようなことが前提にないと地域で子どもの健全育成の為に何かしていきましょうといっても行政、町の自治会、住民の方、学校、施設それぞれが自分流の理解の仕方で進めていっても非常に難しいかと思います。以上の四点が常に明確にされていること、繰り返し確認されていって合意の下で進んでいくことがとても大事なことであると体験を通じて感じてきました。

以上の観点からこのトライアングルフェスタを振り返ってみます。まず、この地域の条件をお話します。東京の郊外の住宅地です。地図と、フェスタのパンフレットを見ていただくと判りますように大きなマンション群の中に児童館・保育園はあります。また区民農園もあり、マンションの裏手には大きな都立の祖師谷公園もあり緑豊かな地域です。代々に渡っての地元住民の方は少ない地域でもあります。家族構成を見るとほとんどが核家族です。マンション群の方は両親とも何らかの仕事を持っている方も多くかなり多いということです。子どもの育成、教育には非常に意識も高い。けれども地域との連携の足がかりが少ない、というような土地柄です。もうひとつこの地域の特徴的なことは、国際的な交流の場である国際交流会館があるということです。それと、先ほども申しましたように大きな都立公園が地域の中心にあることで初めてできるイベントであるし、これがこの地域の特徴でもあるかと思います。住民構成を見ると15歳未満の人口が13%（４歳まで４%・５～９歳まで４%）程度で20代までの総合計より65歳以上が若干上回っています。

では、このトライアングルフェスタはどのような形で運営され動いていっているのか、又連携をとっているのかといいますと実行委員会方式で動いています。３つの各フェスタから代表が集まりトライアングルフェスタ実行委員会が作られています。実行委員会のメンバーですが出張所が中心となってどこの町にもあるかとは思いますが、青少年の地区委員会の中から特に関心のある方が大人の実行委員として選出されています。そこに行政、国際交流会館および児童館の実行委員が加わり全体の大まかな運営について決定し携わります。実際には各３箇所のフェスタの実行委員がより具体的な運営を検討し細かな運営計画を立て実行していきます。これは大人側の動きですが、この実行委員会と平行して中高大生のボランティアが実行委員会の運営を支え、さらに子どもの実行委員会があります。

実行委員会の中で目的は繰り返し確認されてきており、あくまでも青少年の健全育成がメインでもあるし合意事項でもあるということで、現在の企画はすべて中学生の企画案で動いています。さらに“ぱるランド”という児童館を中心にした部門では小学生だけの子ども実行委員会もあり、子どもたちが自主的に考え手作りコーナーのお店を決めるなどの活動につながっていっています。実行委員会の組織は一見複雑のようですが、要は中学生が中心となって考えたやりたいという企画を何よりメインに動かしてあげるために、大人は会場をどうするか、運営費であるお金をどうするかといった事務的なバックアップをしているといえるでしょう。言い換えてみると地元住民の人々と組織があってそこで子どもたちがあっちのおばちゃんたちのアドバイスを受け、又こちらの先生たちのアドバイスを受け、いろいろな機関の人から意見をもらって行ったり来たりしながらお祭りを作り上げていくと考えていただければよいかと思います。さらに大人の実行委員と子どもをつなぐ役割として中高生・学生スタッフの役割も大

きいといえるかと思います。

それではどれだけの公共機関や地域の組織が関わっているかといいますと、年々関係は広がり、中学校が３校、小学校が２校のＰＴＡと地区委員、２学校区のボップという学校内学童クラブ、２つの児童館と保育園は公私立１園ずつ、２地域の自治会、出張所をはじめとする行政関係機関（保健福祉センター・警察・国際交流担当課等）と多くの期間さまざまな立場の人々が関わっています。こういった縦横斜めのさまざまな人々の協力の下、トライアングルフェスタは動いていくのですから実際に機関の調整をしている出張所の方や児童館の職員の方の苦労は大きいものかと思います。

実行委員会の大きな役割はフェスタそのものの運営をスムーズにという狙いがあるわけですがそれ以上に地域の様々な立場の人同士が知り合える場としての大きな意味があるかと思います。要は子どもを囲む様々な人々の顔つなぎの場として重要な位置を占めているということです。子どもと大人が顔つなぎになる、大人同士も顔つなぎになる、行政の役所の方と学校の先生と地域の施設の人と地元の住民の方とが顔つなぎになるという意味合いが非常に強くなってきています。同じ地域で生活もしくは仕事を通じて子どもを取り巻く人同士の顔がわかるということはとても大きな地域の利点ではないかと思います。新しく赴任した児童館長さんは「電話の向こうに顔が見えるようになった」ことで個別ケースへの対応もスムーズになってきたといった感想も話されていました。又、子どもたちにとっても地域の大人とじかに触れることさまざまな価値観を知る大きな学びのチャンスといえるかと思います。

では、次にここ近年のフェスタの写真をご覧戴きながら、地域におけるフェスタの役割の変遷についてお話したいと思います。

これは私立保育園と公立保育園の両方で行っている幼児コーナーで、子育て支援の意味が非常に大きくなってきています。普通お祭りといいますと金魚つりや、ヨーヨーつりといったように大人が仕掛け、楽しんで通り過ぎていくといった場合が多いのですが、ここはあくまで子どもたちが主役で親子で遊んでもらうのを狙っています。小麦粉粘土を親子で作ったり、シートを広く引いた上で輪投げをしたり、おままごとをしたり、親子で手作りおもちゃを作ったりするコーナーを設けています。子どもが遊ぶのを見てちょっとほっとしてもらったりしています。いってみれば子育て支援の広場事業のイベント版ですね。

フェスタの中でこれをやるのはどんな意味があるかといいますと、赤ちゃんを連れて、普通の町のお祭りに行きますと小さな子は疲れてぐずったり眠ってしまいます。大変な思いをして連れて行ってもと母親ひとりの時には足も向かなくなるかと思います。そのようなことがないように０歳から３、４歳の就園前の小さなお子さんも安心して連れて行ける子育てバリアフリー的なお祭りの一角となっています。ここの中で、子育て相談のようなことも自然とできてきています。この幼児コーナーにはどのような効果があるかといいますとまず、遊びの場の提供と、遊びを伝えていくという役割です。次に同世代の子どもを持っている親同士がゆったり遊ぶ中で自然に顔見知りになれること、その中で保育士、看護師、栄養士といったメンバーが入っていますので子育て相談に乗れることが効果を生み出しています。日常的に保育園で行う子育て事業の遊びの広場よりも開放感があり、わざわざ参加するのではなくちょっと通りすがりに立ち寄っていくという気軽さがフェスタの中、ならではのよさかと思います。

私たちが意図した以上に良い効果というのが、この幼児コーナーに小学生や中学生がのぞきに来ます。特に中学生以上の学生ボランティアスタッフが「大丈夫ですか？」と除きに来ます。そこで「わぁ～かわいい」と言って小さな子の相手をしますね。すると疲れているお母さんにとってわが子がほめられると言うことはとても元気の出ることですから「何だろう」と言う気持ちと同時に最高の気分も味わうことができるわけです。私たち保育者が指導的立場でほめているのとは全然違って、とても自然な形で「まぁ～かわいい！遊んでいい？」という感じで入ってくるわけです。たぶん中高校生にとっても非常に良い作用になっていますし、ごく自然な形でこのようなところで関わりあえて、母親がとても勇気付けられるのです。相互作用ですね。本来は今まで町の中にはこのような場所が沢山あったはずです。顔の見えるお買い物をしていた時代にはごく普通の事だったかと思います。今はこうやって企画し子育てバリアフリー化して初めて経験できる若いマンション群の母親たちの体験の場と言う意味合いも大きいのです。

一番最初のビデオを思い出していただくと判りますが、最初のころは移動動物園を呼んできて触らせたり、ステージも華やかな民族舞踊で盛り上げるといった、大人から提供するものが中心でした。イベント中心から日々の支援活動へと変わってきているのが現在の姿であり、意味合いかと思っています。

小学生の実行委員会が中心になって企画する児童館の活動も変わってきています。フェスタの中で年配の方と小学生が囲碁をしていますが今では児童館の日常的な活動として定着しています。ボランティアの地域の方たちが子供劇場の手伝いをしてくれています。子どもが企画し、公園の中には手作りのお店屋さん(ビーズ小物など)が30近く並んでいます。ほかに、地域のおじさんたちが木工でいろいろ作ってくれたりしたところで一緒に遊んだり作り方を教えてもらったり、お花を生けるのを年配の方々から教えていただくコーナーがあったりしますが、いずれも普段の放課後の児童館のクラブとして立ち上がり定着してきています。このように異世代間のかかわりの会としての役割も持ってきています。

これは 12 年間積み上げてきた中で出てきた形ではないかと思います。

ステージの写真を見てください。学生スタッフが大きな役割を担ってくれています。12年前からこの地域にいて育っていった人たちを中心とした学生スタッフが、２日間、前夜祭からステージ作り、進行の手助けなど多くの場で支えてくれています。地域の大人と子どもをつなぐ役としても重要な仕事をしてくれています。

公園の中央ステージは幼児から地域の大人、留学生のさまざまな発表の場となっています。学生スタッフ自らも登場しステージを盛り上げていますし、保育園のＯＢで発表したりもしています。昨年の成果の一つとして反省会に取り上げられていたのは、小学生のブラスバンド部が発表した後に中学生のブラスバンド部がはじめて学校全体で参加して発表したその効果についてでした。小学生から見れば中学生はとても素敵ですよね。その時の小学生の憧れの瞳を見てとてもよい刺激になっていることが実感できたとの事でした。今まで小学生は小学生の中で、中学生は中学生の中で発表していたわけですから観客も同様に小学校の親は小学校で見、中学校の親も然りだったわけです。ところが両方の親が両方の発表を見ることで、自分たちの将来、我が子の将来に期待をかけたり、中学生の反抗期の子を持つ親は、小学生の小さい子を見て「こう

だったのかしら」と暖かい気持ちになったりといった効果もあったのではないかということです。親たちもステージの大きな盛り上がり役になっています。

さらにステージの活動を通しての効果と言うことに関してお話しますが、後の会で中学校の校長先生の言葉にも端的に表れていました。フェスタの中学生実行委員で頑張っていた子やステージ企画で活躍していた子達は学校であまり目立たない子ども達なのだそうです。学校で目立つこといえば、成績の良い子、部活を頑張っている子、一部つっぱっている子等です。学校で目立たない子がなんと地域で生き生きと役割を果たしているのだろうと見直してもらうきっかけにもなったわけです。中学生同士にしても、ブラスバンド部の子から見ると部活をやっていない帰宅部のメンバーの中には地域にこんなに貢献している子が居たんだという見直し、お互い相互の見直し、そういう場の提供にフェスタのステージ活動がなっていることは大きな効果ではないかと言うことが反省に出ていました。

国際交流会館を中心とした留学生の企画と参加の仕方は 12 年間あまり大きく変わっていません。というのも留学生の方は一定年限で入れ替わりになるため変化に富んだ企画は難しいと言う現実もあります。先ほどのビデオで見ていただきましたように、芸術作品を展示し、各国の民族舞踊を見せていただく、又世界各国の料理の出店が出る、日本文化(お茶、お花、剣道等) に触れ身に着けたものを披露していただくなどが中心です。ここ数年来は、トライアングルフェスタの前夜祭で地域の子ども達から大人まで参加自由で仮装し地域をパレードをします。終点の国際交流会館に到着すると留学生の方々が歓迎して出迎えてくれ交流が図られるようになりました。留学生の方達もステージで発表して下さっているのですが、実行委員の大人も子どもも一緒に行うことで時間の感覚の違いや宗教観の違いなど戸惑いながらも自然な形での交流が図られています。留学生の方のお子さんも実際に保育園や小学校に来ていますので、会館が開放されるのは年一回、このフェスタの時だけですがお互いの異文化を理解しあうという意味でも大きな役割を持っているかと思います。

写真を見ていただきながら最近の様子をお話して来ました。良いことばかりお話してきたように思うのですが 12 年間続けていますと成果も問題点も数多くあります。

成果としては小学生を例に取るなら異世代交流の中で憧れの対象を見つけ、自分の力を出していき更なるステップアップに繋がっているということもひとつでしょう。反面、今の小学生は長時間大きな群れの中で遊べない現状もあるわけで、お店屋さんで手作りビーズやさんをつくろうといっても３～４人の集団で 20 個も 30 個もお店ができてしまう。挙句にそれぞれの子はそれぞれのスケジュールがあってなかなか当日までそろい切れないという問題も起きてくる。それを大人がどう支援するのかということが意見の分かれるところです。親が全部手伝ってしまうということそれが本当に親の参加といえるのかというような問題もでてきています。

それにこれだけの縦の組織、横の組織が関係しますし、たくさんの関連機関がありますから、行政が後押しをするといっても行政機関自体がお互いの枠を超えて連携しなければなりません。その連絡調整の難しさは沢山あるわけです。その意味でも“目的”を常に再確認しておく必要があります。

このイベントでいいますと乳幼児から青少年の健全育成が基調にあるわけですからフェスタの中のお店屋さんにしてもその趣旨から外

れては意味を成さないわけです。イベントとして大きくなれば商売としてのお店を出したいといってくる方がいます。それを許可してしまった年もあったそうで、ちょっと意味合いが違ってきてしまう。もう一度再確認しあってどこの部署でも（都の公園管理事務所にもお願いしているとの事）子どもの企画を中心にしていこうと再確認しあって進めているのが現在です。今は地元の区民農家の出す野菜売り場だけは場所を限定して許可していて、後すべての出店、屋台は親達の手によるたこ焼きやさん、焼き鳥屋さん、クレープやさんだったりするわけです。すべて親や地域の大人が作った手作りのお店が沢山並ぶわけです。もちろん若干の収益金は出るわけですが昨年はその使い道について検討した結果、実行委員の中学生達の意見でまとまり全体の収益金はすべて中越地震の寄付金にしたということでした。その他、各部所部所での運営資金は独立して清算して次年度への運営資金としているとのことでした。

12年間積み上げてきた成果としては、当初は国際交流、町づくり、子どもの育成という趣旨の基に行政主導型、住民参加型で始めた事業であったわけですが、今は住民主導型になってきているところが良いのではないかと思います。出張所の職員も、児童館・保育園の職員も公立は3、4年で変わります。そうすると住民の方々が教えてくれるわけです。「そろそろ企画・実行委員会を行わなくちゃいけない」とか「都立公園の管理事務所に行って公園の全域を借りとかないといけない時期ですよ」とか、「自治会の方が実行委員会用に集会室は抑えておきましたよ、子ども実行委員会用には毎週部屋を確保しましたよ」といったように地域の方が率先して行動を起こし、住民主導型でできてきています。それでは逆に行政はどのような役割を担っていくべきなのか、子どもの支援を行っていくということにしてもどのような形で行っていったほうが良いのか等、いろいろな問題が出てきているのです。子どもが主役というけれど、ほんとうに主役であるために大人は何をバックアップしマンネリ化した部分をどう打開していくかなど今後考えるべき問題は沢山あると思います。

さらに住民の構成比を考えた時、世田谷区のこの上祖師谷地域は50代以上が33%を占めており、子育てが終わった世代のその力を十分発揮していただきながら、15歳までの人口は13%に満たないわけですから、子どもたちにどう還元していくためのコーディネイトとの問題など地域と子どもとの問題を考えると多くのことが今後の課題として浮かび上がってくるかと思います。時間の関係上この辺で報告は終わらせていただきます。

村田：ありがとうございました。ビデオや写真を交えてお話していただきましたので具体的で判りやすかったのですが、残された時間がわずかになってしまいました。このようなところが判らないですとか、自分たちでも皆さんいろんなことをされていると思うのですが、そのような話や感想を交えて参加してくださっている方々からのご意見をお聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか。感想でも、もう少し聞いてみたいということでも結構ですが。

参加者A（女性）：私の次女が上祖師谷に最近新婚で住むようになりまして、1月に赤ちゃんが生まれます。本当はほかの講話を聞きにいこうと思っていたのですが、“祖師谷”と出ていたので参加しました。今のお話を伺いまことに幸せなおばあちゃんになりそうです。留学会館のフェスティバルにもぜひ行きたいと思います。

西:今年も11月の第３日曜日に前夜祭として行います。

参加者Ａ（女性）:長男の嫁は大田区におりまして、２歳になる孫はよく児童館にお世話になっております。松戸は児童館が２つしかないですが、都内はそういう面で良いなと思ってます。大田区や上祖師谷地区にしてもとてもうらやましいなと思って見させていただきました。

村田：次はどうでしょう？いかがですか？

参加者Ｂ（女性）:地域での縦のつながりが希薄になっているなか皆様方のご協力があってのことと思いますが、活動の中でその都度、何かここに力を入れているといったところ、毎年同じようなことにプラスアルファというようなことはないのでしょうか。
たとえば最近ではこのような環境のことが心配されていますが、子供さんたちに何か力を入れて指導なさっているところはございますか？

西：この地域に小学校のＰＴＡの母親たちが立ち上げた“エコクラブ”というものがありまして、昨年ですと「きらきらメダルコーナー」を担当しています。廃品だけを使ってメダルを作るということを行っています。それと、去年は残念ながら大変怖い事件が多かったので防犯に力を入れまして、学校に来ている子どもたちには全員防犯ベルを配りましたが、その対称でない通学していない小さな子どもたちには防犯ベルの使い方コーナーを設けました。現実的にはちょっと悲しいことなのですが、とても静かな住宅地ということは逆に言えばこのような防犯も皆で考えないといけないということなのです。このような理由から去年は防犯ベルを皆に配るというコーナーを出張所で行いました。時代を反映して、その都度その都度ですね。

参加者Ｂ（女性）:どうもありがとうございます。

村田：ほかにございませんか？

塩：私からも、少しよろしいですか？たくさんお話したのですが、たとえば幼稚園、保育園にいる子どもたちが土曜日も日曜日も児童館に行くということはそれで、地域での生活は良いのでしょうか？その辺のことを地域は子どもたちにどのような生活をさせるべきかということをもっと地域が関わっていかなくてはならないのではないか。というように私は思っているのです。それで幼稚園や保育園が行っていることはそれを活気付けるためのひとつのきっかけ作りなのですが、それだけで十分だと思われては困るのですね。
本来的にこの点について先生方はどのように考えられますか？

森川：地域の中で子育てをしている母親たちの支援なのですが、公園に行くということひとつをとっても私も子どもを連れて公園に行ったりするのですが、時々異様な感じがする

ときがあるのです。広い公園ですとそのような感じはないのですが、住宅地の中の母親たちが集まりやすい、買い物帰りに寄れるような地域の公園ですと入ろうとするとちょっと躊躇してしまうような「あら、来たの」というような感じでその中に「失礼します、おじゃまします。」と言わないといけないような入り辛い雰囲気があります。その母親たちを観察しているとグループごとにそろそろご飯を食べようといってブルーシートを敷いて何人かはその場で用意してきたものを食べる。お昼過ぎまで遊ばせてそろそろ帰りましょうと帰っていきます。以前、“公園デビュー”という言葉があったと思いますが、母親たちが地域で友達を作るとその仲良し友達だけでかたまってしまう。それはそれで良いと思います。仲の良い友達がいることは否定しませんが、何かそこからその場にいるどのような人ともっと気楽に話したり、知らない子がきても、違う年齢の子が来ても「おねえちゃんがきたね。」というように心を開いた交流があれば良いなと感じることがあります。そういった意味では孤立した母親たちが出会う場所があったり、勉強という意味でそこでは気楽に他所の家に遊びに行くというのではなくて、利害関係なく入り込める。そこで出会えるチャンスがあるということは良いことだと思います。

塩：西先生が主体型から指導型にしたいイベント的なことから日常的にしたいということに関してはいかがしょうか？

西：日常の子育て支援的な意味合いが大きくなるということですね。後はもうひとつ、土曜日、日曜日に関することでしたら、家族を結びつけるきっかけであってほしいわけですね。このイベントが土日あるということは親子で出てきて、親子で楽しんでほしいという願いがあるということと、この地域の特性なのかこの世代だからなのか不明ですが、父親自身も本当は子どもの活動に参加したいし、家族で一緒にいたいけれど、そのきっかけがつかめない。そのきっかけ作りのためにこのイベントがあるという見方も出来るわけです。実際には親自身がこの地域で楽しんでいる姿を見て、子どもが地域に親しんでいくというような形が良いのではと思います。家族で団欒するのもよし、親同士が休日で皆が一緒にいるのも良しなのですが、土日施設を核にする必要は私はないと思います。地域の人が知り合うトライアングルフェスタは地域に開放されたイベントですから顔見知りを作ってきっかけ作りをしましょう、ということで繋がってきています。基本的にはもっと家族単位で動くことがあっても良いのではないかと個人的に思うところと、あと、もうひとつは地域に戻ってきている父親達自身も子育てに参加したいという意識はあるのだということを強く感じます。父親達だけでOB会の夕焼けコンサートなどをこの後行い始めました。夏に父親たちがコンサート会場を作ってその周りで子どもたちが楽しんでいるということを実際に行っていたりするのですべて施設が核になる必要はないと思っています。

村田：結局３名の提案の一番根底には“人間関係の希薄化への懸念”ということがあると思います。地域コミュニティーのようなものをいかに皆で作っていくかということだと思うのですが。子育てという家庭の営みであったことが、そのような考えがなくなってきて、社会でそれを行っていかなくてはいけないというような環境が現実になって来ていますね。そのような意味でそれぞれが知恵を出し合って関係を作り、自分ができることにどう参加していくかということではないかと思います。

塩先生には先ほどかなり時間を急いでいただいて、十分にお話いただけたかったところがあると思うのですが、お話いただけますか？

塩：そんなことはないですよ。

村田：とても興味深い研究内容で、自分が育っていく中でそのような生活体験が積み上げられていない。原体験、原風景がしっかりできていればもっと絵も描けるのではと思うのですが。

塩：ＮＨＫテレビの少子化問題の番組を見ていたら、ある男性が電車の中で泣いていた子どもを見て、「子どもくらい泣かないようにしっかりしつけろ！」とその地域でしっかりしつけろと怒ったと。でこのようなことはどうなんでしょうか。やはり地域の暮らし方とか子どもを含んだ暮らし方とかそのようなイベントを行いながら地域の皆の合意点を確認するようになっていって、何かあっても大丈夫だよと言い合えるようなコミュニティーができれば良いですね。所々点のようにいろんなことを行っていて、それが地域だと主張しても本物かなと私は思ってしまいます。

村田：それがつながり始めて住民主導型になってきているのかなとも…。

塩：そうですね。

西：それは12年という月日があってこそなのかもしれませんね。

塩：やはり継続していかなくてはだめなのですね。

西：保育園の行事に逆に地域の小学生の子どもたちが来て太鼓をたたいて、オープニングを飾ってくれたりしています。保育園の子もたちが小学校の 20 分休みに招かれて自分たちの踊りを披露し、自信をつけてきたりといった、そういう施設同士の行き来もスムーズに出来るようになったという利点もあります。

村田：西先生の実践の中で中学生が任されて実行していくという、自分が役に立っているという存在感みたいなものが得られていくということがとても大事なのではと考えます。イベントから出発しても一人ひとりが輝ける場所とか時がもてれば違ってくると思います。

西：それは私が、中学校の虐待などの別のネットワークのところで校長先生にお会いしたときに、「この前イベントでがんばっていた子達は学校では目立たない子なんだよね。」といったところが相互作用だと思いました。先生たちも子どもを見直したわけですし、地元であんなに活動していたんだ帰宅部のメンバーは、ともいっていました。

塩：集まっている男性の方々はお仕事をされているので地域の生活はほとんどございませんよね。実は私自身も地域の生活はほとんどありません。そうすると皆様地域の、コミュニティーの一員という意識、住んでいる地域愛、郷土に対する愛着ですとかそのようなものはお持ちなのでしょうか。

参加者Ｃ（男性）：よろしいですか。私は隣の船橋市から参加しているのですが、男性が少ない中、なぜ参加しているかと申しますと昨日柏の葉の助成センターでこのセミナーを紹介されて参加しています。これはすばらしいこれだけの先生方のお話を聞ければよいなと。で本当に立派な講話でとても興味深く聞くこ

とができました。今のお話ですが私は今 63 歳で、定年後２年間嘱託で働き去年退職をいたしました。会社にいたころはどうだったかと考えますと、男性は男性でストレスが多いわけです。少なくても 40 代くらいからリストラにあわないだろうかという不安を抱えながらも家は守っていかなくてはならないと一週間を過ごす。休みの土曜日曜日なるととても疲れてぐったりして、お昼過ぎまで寝ていてできることならビールでも飲んで。それが一番疲れが取れる。そんな状態でフェスティバルがあるから行きましょうといわれても、行く気になれない。私の場合のみならず、ほかの父親も似たり寄ったりでした。一生懸命母親たちが行っていることは判っていて申し訳ないなと思っていたわけなのです。で、このように退職してみるとそのときやっておかなくてはいけないことはたくさんあるのだと思うわけです。たとえば児童虐待が３万人以上だということですとか、ここ２、３日の事件で肉親を殺してしまう事件は 15 歳、17 歳の子どもが起こしています。それというのは小さい頃の児童の頃から両親との間柄というものが非常に大事であると思うわけです。小さい時のしつけ、自分らしく育つことの大事さ。やはり困難があると思いますが、正常な発達をしてほしいと思うわけです。ですからこのような講話は本当は父親にも聞いてほしいと思うわけです。実際疲れている父親が多すぎです。どうでしょうかイベントには父親もたくさん参加しているのですか？

西：父親はやはり母親より少ないですが、休みの日の良さです。小さいお子さんを連れて遊びに来ています。大きい公園ということでつれて来易いのでしょう。子どもたちがうろうろしていても何となく自分がここにいても遊んでいてくれるかなという感じ。でそこで知り合った父親達が OB 会など立ち上げて夕焼けコンサートなどを企画し自分たちが楽しむコンサート会場を作っていく。今は“親父の会”などいろいろなものがあるみたいですが。そこから発足したのがこれなのです。

参加者Ｃ（男性）：これも２～３日前の話ですが、２年前に私の家の裏の畑が造成されて 20 軒くらい家が建ちました。その中で子どもを怒っている母親の声が聞こえてきて、それが絶叫に近いのです。夜中の１時、２時にです。良く聞いてみるとどうやら父親は夜仕事に出かけるらしく不在なのです。絶叫しながら子どもを叱っているのです。耐えられずに私の妻が警察か何かに連絡をしたのです。児童虐待ではないかと。連絡後私服の女性警官が来たり、民生委員が「最近はどうですか」と聞きに来たりしました。警察が来る前は一週間に２から３回怒鳴りつけていたのに落ち着いてきています。このように病んだ母親というのは相当います。せっかくこのように良いネットワークができているのにそこに入っていけない母親がたくさんいるのだなと。かわいそうだなと思います。たぶん母親は心の病、心が病んでいるのでは。病んでいると母親も子どももかわいそうだと。聞いてみるとドメスティックバイオレンスもそうですね。連鎖すると聞きました。その本人が幼い頃に体験していると女性に暴力を振るう男性を選んでしまう。というような話を聞いたことがあります。子どもというのは社会の宝ですから、私も定年退職したので関われることには関わっていきたいと思うわけです。

村田：どうもありがとうございました。私の進行があまり上手くいきませんで、皆様に十分お話いただけませんでしたが、そろそろ時間になりますので終わりにしたいと思います。

出来上がったばかりの冊子をいただいてまいりましたが、松戸でもこのような“次世代支援の行動計画”が作られ、次世代育成や子育て支援に一生懸命取り組まれています。
児童福祉課の方のお話では今までの子育て支援は保育園を重点的に行ってきたが、先程出ましたような虐待などの問題が深刻化しているため在宅育児にも直目し、新たに家庭訪問などが盛り込まれたということでした。また、各地で高齢者の方が子育ての経験や時間的余裕を生かし、積極的に参加される子育て支援システムも出来ています。ご参会の皆様の中でも退職された方、子育てを終えてお時間のある方もいらっしゃるようですので、ぜひ、それぞれのところで子ども達を健全に育てていけるためにお力をいただきたいと思います。
本日はどうもありがとうございました。
（拍手）

第２分科会「創年の学習課題と地域への貢献」

事例発表　：　松澤　利行（財団法人やしお生涯学習まちづくり財団常務理事）
事例発表　：　蓮井　昌雄（ＮＰＯ全日本健康クラブ会長（ＣＥＯ））
事例発表　：　松山　明子（新居浜市おもちゃ図書館きしゃポッポ代表）

コーディネーター　齊藤　ゆか（聖徳大学生涯学習研究所専任講師）

齊藤：そろそろ時間になりましたので、始めさせていただきたいと思います。こちらは、第２分科会の「創年の学習課題と地域への貢献」という課題別研究会になります。こちらのキーワードは、「創年」ということになりますので、創年の地域のネットワーク形成ということが論題になります。

まず、今日お配りしている資料の確認をしたいと思います。今回のレジュメは、第７回聖徳大学生涯学習フォーラムの中の、第２分科会を見て頂きたいと思います。それ以外にお配りしている資料についてご紹介いたします。ひとつが、松澤利行さんの「創年のたまり場づくり」という資料を一枚配らせていただきました。もう一つが、「きしゃポッポだより」という、松山さんの新聞記事等が含まれております。最後に、蓮井さんから健康倶楽部のご案内の資料をお配りしておりますので、そちの方をご覧ください。お願いいたします。尚、「創年のたまり場」については、まちづくり協会のパンフレット「創年の友の会」の資料があります。以上が配布資料となります。

申し遅れましたが、私は、聖徳大学の生涯学習研究所のスタッフであります齊藤ゆかと申します。私は、普段、この生涯学習社会貢献センターの６Ｆにおりますので、いつでも皆さまこちらにいらっしゃいましたらお声をかけていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

では始めさせていただきたいと思います。まず、財団法人やしお生涯学習まちづくり財団常任理事でいらっしゃいます松澤利行さんからお話を伺いたいと思います。まず、松澤さんのご紹介を簡単に申しあげます。松澤さんは、全国生涯学習市町村協議会世話人でありますし、全国で束ねている生涯学習の全国的なリーダーでもあります。また、ＮＰＯ法人全国生涯学習まちづくり協会事務局長でもいらっしゃいます。それ以外に文部科学省の地域づくり支援アドバイザー他に全国の体験活動、ボランティア学習などをすすめていらっしゃいます。全国的な生涯学習とまちづくりに関するリーダーとして全国各地で講演をしていらっしゃる方でいらっしゃいます。

続きまして先に女性を紹介させていただきます。今日は、愛媛県新居浜市から松山明子さんをお呼びいたしました。昨年は、愛媛県新居浜市で、全国生涯学習サミットが開催されました。松山さんは、新居浜市のおもちゃ図書館きしゃポッポの代表でいらっしゃいまして、長年にわたり障がい児のための手作りのおもちゃということを提供していらっしゃいます。それ以外に自分のご自宅で夕日が見える自宅開放の「たま

り場」を、開放される試みをされていらっしゃる方です。そういったお話を伺えるかと思います。

最後に、最近ちょっとマスコミ（東葛読売）等でも話題になってらっしゃいます蓮井昌雄さんをお呼びいたしました。蓮井さんはとてもユニークな方です。とてもユニークというのは、プライベートですが、家族が 15 人ということです。

家族は、８人のお子さんがいらっしゃる全国でもとてもユニークな大家族の方であります。それ以外に、千葉県の養老乃瀧のチェーン店を経営するなどの経営者でもありました。また、最近では白井市のカフェ「ザ・ワークス」を営業されておりまして、そこで「創年のたまり場」第１号として今、ご活躍でマスコミ等でも取り上げられている方です。その辺のお話を伺えるかと思います。以上になります。

では、まず、松澤さんからお伺いしたいと思います。１人だいたい 20 分ぐらいを考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

松澤：みなさん、こんにちは。ご紹介いただきました八潮市から参りました松澤です。まず私の方から創年のたまり場というテーマで 20 分程お話をさせていただきたいと思います。座って失礼をさせていただきます。ご紹介いただいた八潮市というところはですね、このすぐ近く、距離的には今日も３人ほど八潮市から女性の方が見えていますが、埼玉県でも１番千葉に近いところといいますか、埼玉県の東南の端のほうにありまして、南側を東京都の足立区、葛飾区と接していまして、東側を三郷市というところを挟んですぐ千葉県になります。東京、埼玉、千葉の接点あたりになりますけれども、鉄道で言いますと、今、鉄道はございません。で、今年８月につくばエクスプレスという鉄道が開業することになっております。８月 24 日ですね。この鉄道は東京秋葉原から茨城県つくば学園都市を結ぶ 60 キロの高速鉄道なんですけれども、それが開業しますと八潮が秋葉原から数えて８番目の駅、秋葉原まで一番近い電車で、快速なども通りますので、16 分で秋葉原へ到着するという至近距離にあります。だいたい東京駅から新宿まで行く時間と同じ位の時間で八潮市にくることができます。そしてまた、八潮を通じて千葉県、茨城県の方へ、つくば学園都市の方へ結ぶようになるというので、市民の皆さんの交通アクセスが飛躍的に８月からよくなるわけですけれども、その八潮市は平成３年に生涯学習の都市宣言をしまして、私は市役所の中でずっと生涯学習まちづくりの仕事をしておりましたけれども、この４月から財団法人の方へ派遣になりまして、今、やしお生涯楽習館というところで仕事をさせていただいております。

今日のテーマの創年ですけれども、お手元の資料で配らせていただきました創年のたまり場をつくろうというふうな、私もまちづくり協会の事務局にたずさわっておりまして、今年本格的に展開をしていくこの創年運動を、私の方でもいろいろな意味で研究し、また全国展開ができるよう、皆さんとも連携を図りながらすすめていきたいと思っておりますところです。レジュメを用意させていただきましたが、第２分科会と書いてあるページを開いた次のページでございますけれども、そこに私のレジメの上に「創年の定義」をいうのを書かせていただいております。この定義というのは、協会で出しているパンフレット等に掲載さ

れている内容と全く同じでそこからカットしたものであります。それを読ませていただきますと、「『創年』とは、地域のために自らの力を発揮し、創造的に生きる大人（中高年）を呼ぶ。少子高齢社会における『創年』は、老人や高齢者とは呼ばず、地域の青少年とともに、生涯にわたって自分が輝き続けるよう主張するものである」というのが、協会が定義した創年でございます。

創年といいますと、「これは言葉が違いますよ」とご指摘を頂く「創」の字が創るという字になっており協会が提案し全国に今広めているものでありますけれども、まさにこの自ら創りだしていくそういう人達、そしてお互いに連携をとり、地域をそれぞれに活かしあいながら、それぞれに学びあいながら、知恵を出し合いながら、地域のため、青少年のため、いろいろなものを解決しながら自分探し、それから仲間探し、いろんな意味での地域の宝探しなどをしていこうということになっていくと思います。中高年と言いますとなにか響きがですね、もう活動のピークを過ぎたようなイメージで語られる場合がございます。それは一部の偏った見方でありまして、まさにその創年の世代になってまいりますと、今まで見えていなかった物や、今までの経験をふまえたいろいろな円熟味を増した様々な活動の展開が期待されるわけですし、いろいろな深みのある人間性あふれるそういう交流も期待が出来るものであると考えております。

今日は、後ほどお二方のご発表の中で、まさにその辺のわかりやすい事例が皆さまにもご紹介して頂けるのでございますが、私の方からは創年の学習課題と地域貢献というテーマでこの分科会が行われますので、そのまずきっかけといいますか、ヒントみたいなお話が出来ればと思ってこのレジュメを作らせていただきました。ちょっと不安でございますが、次にすすめさせていただきます。いろいろ書かせていただきましたけれども、やっぱり人間、生きていく中で健康が1番だろうな、と最近私も思う様になりました。いろいろと自分の健康、家族の健康を考えてくるようになりますと、大事に体を動かしたり、大事に時間を使っていったり、と言うふうなことを考えるようになります。年齢に応じた体の動かし方とか、スケジュールの仕方とか、それからお付き合いの仕方とか、あろうかと思います、そのへんのところがいろいろな活動事例の中でも現れたりしています。最初に書かせていただいた「日本21世紀ビジョン」ですけれども、これは今年の4月に経済財政諮問会議、これは小泉総理が議長になって骨太の改革の一環として発表されているビジョンでありますけれども、今年の4月に発表になりました。つい昨日の読売新聞の朝刊にこのことの記事が載っております。今日資料ではお配りをいたしておりませんが、ここには、25年後の日本はこういう風になっていきますという「21世紀ビジョン」のことをフォーラムとして議論された内容の事が特集で書かれております。25年後の日本、すなわち2030年の日本の目指すべきものというのをこの「21世紀ビジョン」というものでかかれておりますけれども、この中で3つほどのポイントがありまして、そのうちのひとつにこちらに書かせていただきました、「時持ちが楽しむ健康寿命80歳」というのがございます。この時持ちという表現が初めてでたのが、この21世紀ビジョンでございます。物を持っている、あるいはお金を持っているのが所有という定義のひとつの大きな位置づけと言い

ますか、定義の中で確立されていますが、所有という中で時持ちという、時間を所有すると言うことが明確に謳われたというのがこの21世紀ビジョンの特徴であります。またその 25 年後の日本のあるべき姿の中で、健康寿命がいまより５才伸びるだろう。健康寿命とは、寿命が人生の最後までの時間でありますけれど、健康で暮らしてお元気でいられる時間といいますか、健康寿命というのが80歳になるとしております。また、自由に活動できる可処分時間というのですが、自由に使える時間が現在は21年ぐらいなのですが、これが23年ぐらいに12%ぐらい拡大するだろうという予測をこの中でいたしております。３つあげられている中では、時持ちが楽しむというようにご紹介させていただきましたが、そのほかにも開かれた文化創造国家とか、豊かな公（おおやけ）・小さな官などということがいわれていますけれども、特にこの「時持ち」が楽しむ「健康寿命80歳」というのが今日のテーマに１番近いものかと思いまして引用させていただいております。その中で言われていることが、人が躍動する社会、楽しく働き、よく学び、よく遊ぶということであります。で、よく学び、よく遊べというのは我々、我々というように一緒に括ってしまってはいけませんが、私が小さい頃よく学校でよく学び、よく遊べと先生の方からいろいろ言われて勉強に、あるいはお友達作り、運動などに小さい頃から学校の中で取り組んできたり、家庭や地域の中で言われてきた言葉でありますけれども、楽しく働くことが出来るそして、よく学び、よく遊ぶことができる。これは、生涯を通じて子どもさんだけでなく、そういうことがいわれている。そして、多様で良質なサービスに囲まれた暮らし、地域を越えて拡がる交流と、いうふうな事がこの中で言われていることであります。少し具体的にお話をしようかと思いましたが、ちょっとお時間の関係でご紹介できずすみません。私の話はヒントのような話ですので、展開が早いかもしれませんが、次に移らせていただきます。

次に注目される活動事例として「国民生活白書」からご紹介させていただきます。国民生活白書は毎年６～７月に出ますが、今年まだなので、一応今の時点では新しい昨年版の生活白書に載っていた事例であります。ここではいくつかの事例が紹介されているのですが、例えば、今日のお二方の事例はもっともすばらしい取り組みでありますが、まちづくり研究会がいろいろな意味でフォーラム等でご紹介をさせていただいている事業もありますが、その他にもこういう事例があるという事でお含み置きを頂けたらと思います。

ひとつは、この地元千葉の事でありますが、生活協同組合コープの「おたがいさま事業」というものがございます。この「おたがいさま事業」というのは、ちょっとしたお手伝い、困りごとを助けるという事がポイントになっています。レジュメに書かせていただいたものを読ませていただきますと、子どもの送迎や犬の散歩など、暮らしのなかのちょっとした困りごとを気軽に応援したり、また助けてもらう活動を行っている、という風なことですね。これはあらかじめ自分が応援できることを登録しておいて、コーディネーターがコープにいまして、その人が困っている人と応援する人を組み合わせているというふうな事業であります。ちょっとした困りごとというのが、どういったことであるかというと、白書によりますとたとえば、お掃除、洗濯、買物、

食事作り、幼稚園保育園の送迎、庭の草取り、重い家具の移動、ペットのお世話、花の水やり、草木の刈り込み等、たとえば、病院の付き添いなどというちょっとした事、以前は当然家族がやらないといけないとか、本人がやらないといけないというふうなことだったと思います。あえて、他に頼むといったことではなかったことでありますけれども、例えば、病院の順番取り、犬の散歩ですとか、そんなこと他の人に頼むの？といったイメージがあったことかもしれませんが、そうしたこともこのコープが仲立ちとなってやっていると、これは料金が決まっていまして、応援内容によって料金が決まっておりまして、１時間 800 円、1000 円、1300 円とか、夜とか土日とかは一寸特別料金といったことをやっているんですね。こうしたことが実際に行われているといったことが、白書にも書かれています。

次の「花いっぱいのまちづくり」一寸時間の関係で短めにさせていただきます。１人の主婦がガーデニングコンテスト等を立ち上げて、それをきっかけに地域の多くの方たちは花のまちづくりに取り組んだという事例であります。本当に１人の主婦がガーデニングコンテストをやろうと、とっても熱心な方でありまして、その人は外国にまで行ってですね、ガーデニングコンテストの本場まで行ってですね、これはニュージーランドのクライストチャーチというところで、地域住民を対象としたガーデニングコンテストを行っているところなんですけれども、こういったところまでいって、そしてその人が熱心に周りの方にお話をして、そういう風な事業がまちぐるみで展開されるようになった、新興住宅地ですね。というふうなことです。新興住宅地の新興が違っていますね。すみません。商業振興の振興になっちゃっていますね。失礼いたしました。

次に、「子どもを見守る地域の目」というふうに題させていただいております。これは内閣府の「生活達人」初鹿野さんというかたです。この内閣府の生活達人というのはどういう方かというと、これは内閣府でこのような定義をしております。未来社会の生き方を先取りして自分を磨き生活の質を高めている人々を生活達人と呼んでいる。と、これはホームページにも出ておりますので、ご興味のある方はホームページで生活達人と引いていただきますと全国に登録された方が出てきます。この方は大分の方です。この方がどんな事をやっているかというと、池田小学校の児童殺傷事件がございましたよね。あれをきっかけに、この方はＰＴＡの役員をやっていたのですが、子どもたちをどうやったら守れるかというところからスタートして、そのためには地域コミュニティの再生と活性化が必要だというふうな事から挨拶運動をしようといったところから始めました。下校時に子どもたちへの挨拶運動をはじめようと、ＰＴＡの役員の方に呼びかけて、今では、いろんなところにこれが拡がって、最近では警察と連携して不審者が子どもに声をかけるといった事や、窃盗などがあった時には、防犯情報メール等を地域の人の携帯電話やパソコンに一斉発信したりですね、それから、地域の方々と一緒に挨拶運動だけじゃなく、見回りをしたりやるようになったと。これもお一人の方が、熱心に取り組んだそれに輪が広がったということですね。といったことが、白書に書かれています。

最後のところに学習と活動のヒントというふうに書かせていただきましたが、これは「生き方の基本」という本が出ておりま

して、ここからの抜粋でございます。これを書かれたのは、永池榮吉先生という方で、社団法人スコーレ家庭教育振興協会の会長です。まち研でも大変おなじみの方でいらっしゃいます。先だって、韓国の大学から教育学博士の称号をいただきまして、今日会場にいらっしゃっていますが、福留先生や資生堂の有田さんや、私などが、よかったらいらっしゃいと声をかけていただきまして、新宿のホテルで祝賀会に出席した際に頂いてきました、「生き方の基本」からの抜粋でございます。このサブタイトルが「論語と聖書に学ぶ」でありますが、東洋のロングセラーといわれておりますのが論語ですね。孔子の言葉を弟子が「孔子はこう言った」と、綴られたものです。皆さまもよくご覧になる本だと思います。西洋のベストセラーというのが聖書ですね。これもお馴染みな物でありますけれどもこの論語と聖書の共通する部分は、どういうことであろうか、論語でいう倫理から聖書でいう倫理、その交差点はどういうところにあるか、人間として求めていくところはどういったところであるかといったことがこの本に書かれています。このなかから、５点ほど挙げさせていただきまして、これを活動のヒントといったものに位置づけさせていただけたらと思う趣旨で書かせていただきました。この「人には自分がして欲しいことをする」というのは、この「生き方の基本」の最初の方のページにかかれています。１番最初に、人には自分がしてほしいことをするというふうなことです。これを論語でいいますと論語の訓読でいいますと、こんなふうになっています。（子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎、子曰、其恕乎、己所不欲、勿施於人也、）子貢問うて曰わく、弟子の子貢が孔子に訊ねたという意味ですけれども一言にして以て終身これを行うべき者ありや。というふうなことですね。「たったの一言でしかも一生涯これを行うべきという指針の言葉はありませんか。」と、弟子の子貢が孔子に聞いています。子曰わく、其れ恕（じょ）か。孔子は答えて言いました「それは恕というべきか」恕というのは、女性の女と書いて横に口と書いて下に心と書くんですけれども、恕というのは、人を思いやるという意味だそうですね。それは恕というべきか、己れの欲せざる所は、人に施すこと勿（な）かれと、自分が欲しないことを他人にしないことだとこういうふうに論語ではいっています。ようは、自分がしてほしくないことは他人にしないことだよ。一言で人生、生涯これを行うべき言葉はありますかと聞かれて孔子はそのように言っております。同じ内容で聖書では、「人にしてもらいたいと思うことは何でもあなた方は人にしなさい。」マタイ伝福音書第７章第11節にございますけれども、人にしてもらいたいと思うことは何でも人にしなさいと、この２つの言葉は切り口の違いがあって、意味は同じで孔子の言葉は抑制的ですが、イエスの言葉はより積極的で、ようは相手がして欲しいことをしましょう。相手がして欲しくないことはやっちゃいけませんというような事ですね。で、みるとまあ当然というふうに思われかもしれませんが、人生生きていくうえで、それが一番大事だというふうに孔子は言っているわけでございます。

次ぎ、２点目は、「学ぶときは素直になろう」という事でございます。（子曰、吾與回言終日、不違如愚、退而省其私、亦足以發、回也不愚、）これ論語では、子の曰わく、吾れ回と言う。終日、違（たが）わざること愚なるが如し。これを現代語訳にします

と、孔子は言いました。一日中話をしてもはいはいと言うばかりで、馬鹿のように見える弟子が、退きて其の私を省（み）れば、しかし戻ってその私生活をになって見ると、亦た以て発するに足れり。回や愚ならず。いったん言ったことをきちんと把握している。彼はなかなか馬鹿どころではないというのが、孔子にございます。論語にございます。で、聖書では、同じ表現の中では、「はっきり言っておく、心を入れ替えて子どものようにならなくては決して天の国に入ることはできない。」これもマタイ伝ですが、こういうふうに素直に無心に生きるで、ここの部分が学ぶときは素直になろうということですね。これについてはですね、琴の歴史箏曲の歴史に誰も知らない方はいないという宮城道雄さんが、残した言葉も書いてありますけれども、修行中は馬鹿になっていなければ上達しない、馬鹿というのは言い換えれば、物にこだわらない素直な事である。理屈っぽいのは、一番修行の妨げになる。その次に戒めなければならないのは、慢心である。高慢な気持ちが出たら、その人の芸は止まってしまう。もちろん自信は必要である。しかし、それはあくまで謙遜の中での自信でなければならない。謙遜のブレーキがかからない自信はやがて慢心になる。慢心の出るのはまだ自分の芸が幼稚な証拠で芸が進めは進むほど慢心はできなくなるものである。これは、宮城道雄先生が残した宮城道雄全集の中の随筆集で述べている言葉ですけれども、学ぶときは素直になろうというヒントの例でございます。

次に心の富を蓄えるということですが、これは徳とか隣人愛といったところの話でございます。論語の原文では、（子曰、徳不孤、必有鄰、）子の曰わく、徳は孤ならず。人間としての豊かな生き方をしていれば、孤立することはない、必らず隣あり。必ずよい理解者や仲間に恵まれるものである。というふうに論語ではいっておりますけれども、徳は孤ならずですね。それで聖書の方では、隣人を愛しなさいというふうなことを言っています。徳と隣人愛これが心の富を高めるというふうなところのお話です。

で、次が、すみませんちょっと駆け足になってしまっていますが、「目指すものは必ず達成できる」ですね。（子曰、仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣、）子の曰わく、仁遠からんや。我れ仁を欲すれば、斯（ここ）に仁至る。 孔子は言いました。人間としての道は遠くにある理想にすぎないのだろうか。そうではない。自分が本当に求める気なら、それは身近なところにあるというふうなことです。論語ではこういっています。

聖書ではこのようになっています。「私は言っておく、求めなさい、そうすれば与えられる、探しなさい、そうすれば見つかる。門を叩きなさい、そうすれば開かれる。」ルカによる福音書第 11 章ですね。叩けよされば開かれんという文語体の有名な言葉もございます。これが聖書のこの部分です。最後に「すべては実践にかかっている」という話でございます。論語で（子貢問君子、子曰、先行其言、而後従之、）子の曰わく、先ず其の言を行い、而して後（のち）にこれに従う。 これは口語訳は、自分にいうべき事があれば、先ず行いなさい。その上で述べなさい。これは聖書では「人は行いによって、義とされるのであって、信仰だけによるのもではありません。」ヤコブの民第２章ですね。行為に示されてこそ真実ということでございます。というような事例なり本の抜粋をさせていただきましたけれども、創年の学習課題、地域というところの

ヒントにならなかったかもしれませんが、最後の行動しましょうという意味はですね、私たちの町でもいろいろな議論があったりするのですが、議論が沢山あってその先に結果として進んでいかないというふうなことがあると、議論しただけでよかったのだろうかという話になるときがございます。ＮＡＴＯといのはＮＡＴＯ北太平洋条約機構というのが昔ありましたけれど、これはある先生が not action talk only ではだめですよと、いっていましたけれどね、言うだけじゃなくて、行動に示しましょう、まずやってみましょう。という意味でしょうかね。そういうふうに考えます。まず、行動を起こしてみましょうというふうな言葉を最後に私の話をくくらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

齊藤：ありがとうございました。松澤さんからは、全国的にまちづくり運動にかかわってらっしゃるんですが、実は行政の方です。皆さん「今の役人は・・・」と、おっしゃる方が結構いらっしゃるかもしれませんが、松澤さんは実践家でもあります。松澤さんはご自宅を開放して自宅の「たまり場」を展開しているので、のちほど自宅で開放している「たまり場」についても伺ってみたいと思います。次に、今の話でありましたが、not action talk only ですよね。すべて実践にかかっているということが重要です。

まず、ボランティアとして活動しているという松山明子さんからおもちゃ図書館の他にもいろいろと実践されています。実は、昨日私初めてお会いしたんですが、とても魅力的な方です。今、資料の中にもありますが、新聞などでもとり上げられており、ちょっと話を伺ってボランティアの実践としての松山さん、そのように至るまでの経過や思いを含めてお話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

松山：皆さまこんにちは。私は愛媛県新居浜市の松山と申します。どうぞよろしくお願いします。

私のほんとうにささやかなボランティアの活動と、私の人生が創年という時期にさしかかり、どのように生きていきたいかということをお話できたらと思っています。今、本当はどきどきしているんですけど私は以前アニメーターと、生涯学習まちづくりコーディネーターの講習を受けた時にお隣に座っていらっしゃる松澤さんが先生で、いろいろな事を教えていただきました。新居浜市の仲間が「松澤さんがいらっしゃるから大丈夫よ、頑張っていってらっしゃい」と送り出してくれました。もし、詰まった時があったら助けてくださいますようよろしくお願いします。資料を用意していますので、よかったらお家に帰ってゆっくりとご覧になってください。

今から 10 年ほど前になりますが新居浜市に総合福祉センターができる事になり市役所の方から「市民が活動するのなら、市は場所を提供しましょう」とお話がありました。その時まで、おもちゃ図書館がどう

いうものか知らなかったのですが、「障がい児さんが地域の中でお母さんやボランティアさんとおもちゃで楽しく遊ぶ活動」という事を知りました。「障がい児さんが安心して遊べるんだったら、どんなに素敵なことだろう」と先進地の見学をしたり、ボランティア講座を聞いているうちに「じゃあやりましょう」という方が 25 人集まって、1995 年の 11 月１日にボランティアグループができました。「きしゃポッポ」と名前をつけました。「鈍行の汽車が周りの景色を見ながら前へ進んで行くのって素敵よね」と活動がはじまりました。それから開館を目指し手作りのおもちゃを作り始めました。

今日少し持ってきて後ろに並べていますので、あとからご覧になってください。その時に気をつけたのは安全でカラフルな事です。材料はフェルトとか木綿の布とか簡単なものです。マジックテープを使ってくっついたり離れたりできるものとか、音が出るとか工夫しながら作りました。1996 年４月６日にオープンし 10 年過ぎました。今年の６月７日～12 日まで、新居浜市郷土美術館で「手作りおもちゃがいっぱい！～きしゃポッポ 10 年の歩み～」展を開き 10 年間の報告を市民の皆さんにしたところです。おもちゃ図書館は毎日利用できます。また、障がい児さんに遠慮なく遊んでもらうために、ボランティアが一緒に入って遊ぶことを、第２と第４土曜日にしております。活動の内容ですが手作り部会、整理部会、広報部会、和太鼓部会にわかれています。手作り部会は毎週火曜日に１日中作っています。和太鼓部会はボランティア活動をしているうちに発展していきました。整理部会もみなさんが時間のあるとき福祉センターに立ちより整理をしたりいろいろやっています。広報部会は「きしゃポッポだより」を毎月発行して、市役所のメールボックスで、各小学校とか、自治会とかいろんなところにお配りしています。部会を超えてみんなで協力し活動しています。

今回初めてパワーポイントを使って、活動の内容を画面で見ていただけるように用意をしましたので、見ていただけたらと思います。

看板ですが出発の時に紙で作った物です。この看板を布で作ったらいねと言いながら、まだできていないので、10 年間使い続けております。ここに並んでいる人達は私達の仲間です。若い方は 20 代から大きい人は 80 代まで。自治会とか校区とかというのでなく、新居浜市全体や西条などお隣の町の方も入っています。地域や世代を越えて活動をしています。

手作りのおもちゃを少し紹介したいと思います。これは、エプロンシアターと言って胸にエプロンを当てて、いろんな物語を展開します。このエプロンはお買い物ごっこができるようになっています。小さな袋がぶら下がっているのはお財布です。お金をたくさん作りました。１円、５円、10 円、100 円、1000 円、10000 円まで作りました。お金を作り続けたので、もうグループの中の誰もが「お金持ちになりました。もうお金は要りません」いうくらいお金を作りました。

これはデコレーションケーキです。切ることができて、イチゴをつけたり、ロウソクをつけたりできます。

これはスイカです。スイカも今日持ってきているので見てください。きしゃポッポのスイカは一年中食べ頃です。おもちゃの包丁で切るとシャキシャキと音がします。

これはりんごで皮を剥くことができます。みかんもバナナも皮をむくことができます。

大変人気があります。

画面をみていただきたいんですけど、これで遊ぶのは子どもばかりではなく、大人の他市の方が見学にきてくださるんですけど、沢山のおもちゃを並べると、皆さん子どもにかえって遊んでくれます。

これはクリスマスの時に近くの保育の子ども達が遊びにきてくれたところです。いま、いろんな学校で総合学習の時間にいろんな時間の使い方をしていますが、中学生さんに「私達はおもちゃ図書館の活動をして、手作りおもちゃをつくってそれを障がい児さんにプレゼントしたい。」ということで手作りおもちゃ作りを教えて欲しいと依頼されて１学期と２学期ずっと学校の方へ毎週１回行きました。そこでジャンボケーキを作りました。これが出来上がったケーキですが、校区の小学校の障がい児学級の方へプレゼントされました。

これは昨年、愛媛県全域で生涯学習の全国大会が開かれましたがその時の様子です。このときも子どもさんにおもちゃで遊んでいただきました。これは、太鼓の取り組みです。平成 13 年に助成金をいただけることになって、迷わず太鼓に取り組みました。それはどうしてかといったら、以前、障がい者さんが太鼓に取り組んでいるのを見た時、いいなぁと思い、つぎの年にクリスマス会にきてもらいました。すると初めて聞いた時より本当に上手になっていて、その次にきてもらった時には、ますます上手になっていました。本当に大変失礼な言い方なんですが、コツコツ練習すればここまで上手になるんだと言うことに私達みんなが感動しました。それで、迷わず太鼓に取り組みました。今たたいているのは、お母さんとボランティアさんですが、障がい児さんに「太鼓を叩きましょう」と言っても、逃げてなかなか太鼓の前に並んでくれないので、先に大人が練習して子どもに手ほどきをしようという取り組みをしています。４年経ちました。

これは、太鼓の練習を始めて１年経ったときに 24 時間テレビに呼んでいただいて太鼓を叩いているところです。それがご縁で３年連続出演させていただきました。これは集合している写真なんですけど、私はこの写真は大好きなんです。というのはスタッフの方もにこやかにしてくださっているし、太鼓の先生、太鼓を運んでくださるボランティアさん、それから車椅子の方がいたり、耳はきこえないけど太鼓を叩いた振動が楽しくて参加している子どもとか、知的障がい者さんとかいろんな方がこの中にいます。そんなところが、私は好きです。

次ですけど、これは私が今日出かける時にお世話になった新居浜駅の待合室の中です。真中に立っているのは駅長さんです。どうして駅が出てきたかというと、活動しているときに市民の方から和服をいただくことがあります。その和服をなかなかおもちゃにはできないので、考えた末に座布団にしました。それを新居浜駅のイスに使っていただいたり、自分たちにできることをコツコツしています。

これは先ほどお話しました、活動して 10 年目を迎えて活動報告をしたところです。最初は本を見ておもちゃをつくっていたんですけど、だんだん自分たちで考えて作ることになりまして、新居浜市は海に面した町ですので、ちょっと格好よくシーパラダイスと名前をつけて、お魚をたくさん浮かべるおもちゃをつくりました。このおもちゃも全部取り外しができます。これは大人が取り付けたんですけど、子どもが遊ぶときは全然違う形になります。

これが四国を走っている特急しおかぜ号です。私の家から見える新居浜の景色です。石鎚山系です。都会の作られた景色も大好きなんですけど、私やっぱり、緑が一杯の山があって、寒い時は雪が降るし季節によって色がかわる、そんな景色が大好きです。次は私の家から見える瀬戸内海です。沖ゆく船が素敵なんですね。ある日・・・なんですけど何が起るでしょう。

瀬戸内海に面した新居浜は人口 13 万人の工業都市なんですけど、そこに沈む夕日に私は「はっ」と気付いたんです。その時、手を伸ばせば届くような夕日に私は感激しました。その日からお家にいて、夕方、夕日が見える日は夕日を撮り続けました。飛行機雲がきれいでした。鳥が飛んでいると思うんですね。これは展覧会別子銅山写真展の高校生さんと一緒に撮った写真なんですけど、どうして私が夕日に惹かれたかというのは、新聞の記事がはいっておりますから、また読んでいただければとおもいますけれども、父が写真が大好きで、別子銅山の写真を撮り続けていました。今から 15 年ほど前に亡くなったんですが、もう亡くなって 15 年も経って新居浜市、愛媛県総合科学博物館で企画展をしていただきました。３月５日から５月 15 日まで２ヶ月と 10 日写真展が開催されました。私もうそんなに長い間人がきてくれるのかと心配しましたが、20,400 人来てくださって、科学博物館としては記録的な人数だったそうです。別子銅山をふるさととする人が多く、その地域に沿った催しだったから大勢の方が足を運んでくださったみたいです。そのときに一番乗りで来てくれた南高の生徒さんと記念撮影しました。

私が創年のたまり場をしようと思ったのは、父の写真がきっかけになってなんとなく私も夕日の写真を撮り始めました。そしたら、１年くらい経った時に愛媛新聞の方が 12 月に取材にこられたんですけど、１月４日に凄く大きな記事で載せてくださったんです。それで、私いつの間にか夕日の写真家になってしまったんです。私は素直にその気になる人なので、おもちゃ図書館のボランティアの経験と父の別子銅山の写真と私が住んでいるマンションから見える夕日をメニューに、創年のたまり場をしようかなと、取り組んでいるところです。お話したいことはいろいろあったんですけれども、なかなか上手くはお話できなかったんですけど、私の事例発表はこんなところです。ありがとうございました。（拍手）

齊藤：ありがとうございました。まさに、すべては実践にかかっているそのものをあらわしているような松山さんでした。今、手作りのおもちゃを皆さんのお手元に回しているですが、私もびっくりしました。皮の剥けるオレンジとか・・・私も今３歳と２歳の子どもがいますが、実際手にしたらよろこんではなさないような温もりも感じられました。ありがとうございます。今、ボランティアは日本の中では約３割いると言われています。しかし、実際に松山さんのような着実な実践的活動をずっとし続けていらってしゃる人は、必ずしも多いわけではありません。今、このフロアにも、松山さんのようにいろいろと何かの思いを持って実践し、何かやろうと思っていらっしゃる方がいると思います。しかし、やりたくてもなかなかそこまではできないわと言って、辞めてしまうそういった方がいると思いますが、どのように巻き込んでいけるか、松山さんからお話をお願いします。

松山：わたしも10年の中に必ずしも笑っているばかりでもなくって、1年目ぐらいの時に困った時がありました。障がい児さんのお母さんは「きれいに作ったおもちゃで遊ぶ時に汚したらいけない」とか、「なめてベトベトしてはいけない」とか、「投げて壊してはいけない」とかそういう心配がありました。

逆に手作りおもちゃを作ってくれたボランティアさんからは「あんなに一生懸命作ったのに遊んでくれない」という思いがありました。遊んでくれないのではなくって遊ぶ力がなかったのです。そこでみんなでお話し合いをし、遊ぶ力がないときにはたとえば目の見えない人のためには音を鳴らす工夫をするとか、ざらざらした布とか、ツルツルした布とか、ふわふわした布とかそんな工夫がいることが分かりました。障がい児のお母さんにはせっかく作ってくれたのだから遠慮しないで遊んで、借りて遊んでという事を言い続けて、また元気なボランティアのお母さんには壊れたらもう一度作れば良いじゃないという気持ちの確認というか、お互いを信頼して大丈夫という気持ちになる時間が必要でした。

それと、みんな忙しく暮らしているので、毎日暇ではありませんね。だから活動できる時は一生懸命活動する。でも自分が忙しい時にはそっと抜ける。その抜ける時に「私忙しいから出来ないわ」と言うマイナスのものをグループの中には投げかけない。忙しい時には休んで、大丈夫の時は来ればいいという事をみんなでお話し合いをしました。

それともう1つたまたま私が代表をし、40人くらい会員さんがいらっしゃるのですが、会員さんが何かを投げかけた時に即「そればダメよ」とか「できないということをちょっと止めてください」といわれました。まず、「そうね」とか「はい」と言ってくださいといわれました。そしたらもし出来なくてもやっているうちに出来ないという事を納得する。納得する時間が必要だ。まず松山さんが「うん、いいよ」と言ってくださいということをいわれました。

今ボランティアをやりたいと思う人が沢山いらっしゃると思うのですが、おおげさに考えないで本当に楽に自分ができることから取り組んだらいいと思うんです。たとえば、手作りおもちゃを作る時でも最初からすごいものを作ろうと思うんじゃなくて、ちょっと今思い出したんですけど、ここに猫のお手玉があります。この猫のお手玉を作ろうと思えば、このオレンジの布と下の黒い布と背中になるこれだけの布があったらできるんです。だからその活動に参加する時に何が何でもそこへ行って手作りをしなくても、もしお家にこれだけの布があれば、どっかタンスの隅にでもあれば、それを提供することもボランティアなんですよね。だから、いろんな角度で考えたらいいと思っています。

齊藤：ありがとうございました。次に、蓮井さん、男性のボランティアとして経営者としてということから始まったのでしょうか経営者として、ボランティアとしてこれからまたボランティアだけではなく、コミュニティビジネスという視点があると思うのですが、そういった視点も加えて、今、展開なさっているからＮＰＯ法人とかつ自分の経営人としてのお話等も伺えましたらありがたいと思っております。よろしくお願いいたします。

蓮井：それでは、しんがりを勤めさせてい

ただきます蓮井でございます。先程、齊藤さんから紹介されましたけれど、私の家族は15人の大家族、実は15人じゃなくて30人なんですね。私は、子ども８人、孫 18人、子ども達の連れ合いを入れますと 30人ですが、一緒に住んでいるわけではございませんよ。そういうような子沢山のいわゆる家族でございます。ちょっとそれを訂正させていただきます。これは蓮井さんの自慢は何かと言うと、これだけでございますので、私は生涯現役の会でも蓮井さんは子どもが多いのだから少子化問題の対策委員長をやってくれないかということで、そういうこともやっているんです。いかに私が子どもを沢山産むが如何に人生彩って楽しいかということを伝えたいなという様なことで、皆にいろいろな話をしているのですが、まあ、今日は少子化対策の話ではないんでこれぐらいにしておりますが、ここのレジュメにございますが、今日はたまり場の事だけ話せばよいのでしょうが、私の背景もお話してこのようなたまり場に辿り着いたということもお話した方が分かりやすいのではないかと書いた次第でございます。

私は 40 歳まで東京青年会議所というところに入りまして、理事長選挙とかね、というようなものを戦ったりして、まあ、私は創業経営者ですから、いわゆる慶応閥と早稲田閥と創業者と３つのグループに分かれて 15 年ぶりに理事長選挙なんかを戦ったというような思い出もございます。そういうような団体に入ってそこで活躍するのは好きなんですね。青年会議所を卒業しますと、次は倫理を研究しようということで、青年会議所の経歴を利用して法人会というものを立ち上げたいので協力してくれないかということで、倫理法人会というものを協力しましてね、現在非常に盛んになっておりますけれども、それのいわゆるお手伝いをして、10年間この松戸、東葛地域というところで支所長をやっておりました。10年位前までですね。これで私は10年間毎朝４時に起きて５時から６時迄いろいろと講話をしてまわったり、しゃべることはそういうことで勉強させていただいたんですが、そういうことから私は 60 歳で養老乃瀧を子どもが多いことから養老乃瀧の創始者は今85歳ですが、私は青年会議所の時代から非常にお世話になっておりましてお付き合いしていたものですから、今も創業者の個人的なまあ、顧問も含めた秘書役を務めているんです。非常勤でね。そのことから、子ども達は養老の居酒屋を成人して大きくなったら１軒ずつ持たせてと、で８人の子どもに８軒まで養老乃瀧をやって、60歳で引退したわけです。私は、糖尿病だったんですね。ちょっと青年会議所の無茶苦茶な生活が祟ったのと、いろいろな事業をやっては失敗し、いろいろパワフルにやろうということで、無茶をやっていたものですから、糖尿病にかかりまして、60歳でこれはもうだめだなっと、体力がもたないと、居酒屋は現場がきついからということで、８人の子ども達に任せて私はいわゆる引退だということでここに書いてあります、テレパゴという生活がはじまったんです。

このテレパゴとは何かと、これはテレビとパソコンとゴルフの略語なんです。これしかなかったんです。引退してさあ何をやるか、これから引退生活だというと朝からテレビを見る。あるいは、養老各店があります。その営業成績をパソコンでみるとか、ゴルフ仲間が多いので、ゴルフは誘われますから、そうするとよく考えて見ますと、父親が63歳で死んじゃったんです、朝から

でんとテレビの前に座って、テレビを見ながら朝酒ですよ、これ３年やったら死にますね。だいたいこのテレパゴ生活、親父はその頃パソコンがないですからね、テレ酒ですね。テレ酒はだめですね。３年で脳溢血。よく考えますと俺はパソコンやったりしてちょっと違った中身ですが、基本的には同じ様な生活なんです。これはだめだと、ということで、私はこれは社会参加しなくてはならないと、友達がやっていますライフベンチャークラブというクラブに入りまして、その仲間と生涯元気だ生涯元気だとやっていたんですけれども、周りを見回しますと不健康で皆、世の中からリタイアしちゃう人が多いですね。これは、健康が大切だと、健康がないと生涯現役はないと、いう様なことがありまして、私は健康倶楽部というのを作ったんです。それで健康問題を勉強しようと健康倶楽部を作っていわゆるホームページを作ってみたんですが、健康倶楽部とアクセスしたら、何と３万件～４万件あるんですよ。パッとパソコンで打つと。あっ、これはだめだ健康倶楽部では埋没する、ちっとも目立たないと東京をつけたら、うち一軒しかないからパソコンで東京健康倶楽部と打つと第一位でパッと出るんですね。ＹＡＨＯＯで。で、いわゆるＮＰＯにしましてね、私は残念ながら東京青年会議所では理事長になれなかったんで、自分で作ったＮＰＯで理事長になってですね、自分で果たせなかった夢を果たして、今は後任の理事長で私は会長になっているんですが、そこで、いわゆる健康だけでは健康食品を売る団体と間違われるというんで、健康で明るくということで、家庭の健康もそれから楽しいのは生活経済の健康、心豊かにというと心の健康とこれが生きがいの４本柱、これは幸せ、自己実現につながる４本柱ということで、毎月例会をしているのであります。なんでもできる、何をやったって健康、これをですね、政治の健康と政治問題にいってもいいですしね、国の問題と、国の健康はなっていないと国の健康も言える。だいたい世の中のボランティア活動に首を突っ込めるということがございまして、お蔭様で１年半で今 300 人くらいの会員ですが、千葉、それから年内に神奈川ですとかね、埼玉にやりたいと言う人もおりますので、全国に３万人の会員を展開しようというのが、私の夢なんです。そういうようなことで、ラッパを吹いておりますところに福留先生と出会いがあったわけであります。

そして、私は昨年の６月に社会起業家という本を読みまして、アメリカでアイスクリーム屋とか大きい社会起業家の記事が目に付きまして。これはいいなと、私も 60 歳で金儲けは止めようと止めたんだと。60 歳以上になるとこれはもう私はボランティアで金儲けから人儲けだと、人儲けするというのはいいでしょう。言葉からいうとひともうけというとお金をがっぽり稼ぐ。そうじゃなくて、人間の人儲けなんですね。人儲けする、人稼ぎする、ということをやろうじゃないかと、呼びかけて健康倶楽部をやっているんですよね。これは金儲けとは全然違う。それで、よし、社会起業家になろうとこれは公益を重んじる企業という意味ですよ。これだなと、これがぴったりだと、これから 60 歳以上でやることはということで、東京通商(株)という 1000 万円の会社を立ち上げまして、「ザ・ワークス」と、それで、「ザ・ワークス」で何をやるかと言うと、いわゆる生きがいと健康を売ると、難しいんですよ、生きがいと健康を売るというのは、このわかったような、わからな

いようなね、それでいったい企業は成り立つのかと、私も自分でやりながら、疑問に思いながらやったんですけども、生きがいはですね、手芸教室をやったんです。手作りのお店と言うことですね。娘がアメリカに居りますんで、まあ、スクラップブッキングという手作りの写真、いわゆるフォトアートというアルバムを手作りするんですね。これがアメリカでは3000億円産業になっているんです。これは、日本に押し寄せるぞと、ということで、スクラップブッキングを中心とした手作りの生きがい、それと健康というものは、有機食品を中心とした材料使ったカフェをやろうということで身体にいい材料しか使わないと徹底してやろうと言うことで、まあカフェをこの生きがいと健康と言うことでやっている。そこへ、福留先生から創年の集いの話が来たんですね。これはうちの生きがいと健康にドッキングするとピッタリではないかということで、「はい！私がやります」ということで早くやれやれとせっついて、まだ準備ができていないと言うのをできてなくていいから、私がやる、１番にやりますと、いうことで、今年の３月３日にもう、いわゆる松澤さんのまち研に議決を頂いて第１号ということで、これは１号だから値打ちがあるんですね。１号だとマスコミが来るんですよ。だいたい２番３番目じゃだいたいだめですよ。これはね。いわゆる３月３日に第１号ということで、中村市長、白井の市長も来ましたしね。そこで、いわゆる披露宴をやったわけです。その店は100坪位の店ですが、ユニークなメニューがございまして、手作りのメニューですが、大人のお子様ランチという旗を立てたランチとか、非常にユニークなメニューをいっぱいやっているんですが、トイレも広くきれいで、トイレだけは１番にしろといって作ったトイレがあります。すると福留先生がそれを見てびっくりして、田舎にしてはいいトイレが立派なトイレがあると、これはトイレと書くのはもったいないよということで、先生何と書けばよいでしょうかと聞くと「シンデレラルーム」と書くといいよと、それはいいと、その日のうちに前にも看板を作ってシンデレラルームと、松澤さんのご紹介の記事の中にも「ザ・ワークス　カフェにはシンデレラルームがある」と、出ていますけれどもね、そういうユニークなことを展開いたしておりまして、それで私は健康倶楽部でおかげで二元会という物を作りまして、１元は60歳なんです。そして60歳をいわゆる二回りそれが二元ですね。二元会明るく元気で120才迄生きる会、これの会長を私やっておりまして、これはこの前旗揚げをやったら、まあ50人くらいの会員ができまして、盛大に旗揚げをやりました。こういう運動を展開いたしまして、私の名刺の裏にはですね、精神年齢と戸籍年令の両方を書いているわけです。私は成人までは歳を数えないようにしようと理事が10人いるんですけど、20引いて名刺に書こう、書きなさいと皆、名刺には現在只今成人年齢何歳と書かせている。私は成人年齢46歳、46歳と思って生きています。私は服装を見ても若い、46歳だったらどんな服装をするかということを基準に服装を選んでいますから。66歳は忘れて46歳ですからこれを100歳まで生きると120まで戸籍年齢で生きる計算になります。120歳までピンピンコロリで生きて、Ｎｏ　ＮＮＮねんねん寝たきりにならないようにしましょうと、そうしますと今32兆の国民医療のうち老人医療費が12～13兆あるんですね。そのうち終末医療費がですね、死ぬ前

の２ヶ月、老人医療費全体の２割ぐらいかかっていますからね、２兆７～８千億かかっているんです。これがピンピンコロリで死ねばこれだけの節約になりますから、１人からできる社会貢献がこの健康倶楽部に入会してＰＰＫで死にましょうと私は呼びかけているんです。もう難しいことはないの。自分が健康に気をつけてやっていれば、それが大きな社会貢献だとそういう話をしていると、創年のたまり場に行き着けませんね。

そろそろ創年のたまり場というところへ行かなくてはならないのですが、私は創年のたまり場を３月３日にやって、どういうことをやろうかと、いったい、そういうことはね、まち研でノウハウあるようで実際はないんですよ。私がお手つきで早くやっているわけですから、ノウハウがマニュアルができる前にやっちゃっているわけですから、何をすればいいかという物がないわけですから、私が作らなきゃなんない。何をやるかと、まあ、とにかく人が集まることをやれば、いわゆるいいんだろうというようなことで、創年のたまり場として、ここに書いてありますように、いろいろやっています。サルサダンスをやったり、タンゴも、月に１回このようなことをやっているんです。タンゴのダンスとかね、コンサートそういったことで、マスコミからもいろいろと注目されまして、皆さんのお手元にありますようにまあ、朝日も来た、読売も来た大手新聞社が来て書いてくれたわけですね。それでですね、まあ、非常にマスコミが活用できるということで、うちの営業成績も伸びてきたんですね。これはたまり場のおかげもありますし、そして福留先生にまち研はボランティア運動をしているようですけれどもうちは、まあ、儲けないと存続できないんで、これは儲けてもいいですかね？と聞くと、ああ、儲けてください。蓮井さん儲けなくちゃ、たまり場は儲けるんですよと、おっしゃるので、そうですか、じゃあ儲かるようにどんどんやりましょうということで、こういう風に書いてあることをどんどんやっているわけです。まいったのは、この間の読売新聞ですね、ここで、悩んでいる事のある 40 から 80 歳位の男女らが白井市富士のカフェワークスに集い気軽に相手を見つけて話をしていると書かれたわけですね。ここに来るとお金も払わずに座っているだけでも良いと、こんなこと全然言ってないんですよね。でも記者は面白く記事にしなきゃいけない使命があるのかどうか知れませんけどね、とにかくまあ、ぷらっとやってきて何も注文しないで、お水だけ飲んで帰る人がでて来たんですよ、実は。まあ、これをにこにこして迎えなさい。損をして得を取れということがあるんですよね。だからってマネージャに言いながらやっているんですよね。それはいいとして、出会い系カフェと間違っている向きもあるんですよね。これ電話でここに 69 歳の独り身の橋爪章子さんがここへ来て楽しいわと言っているなんて書いてあるもんですから、私は 86 歳のおじいちゃんではありますが、ここに書いてある橋爪章子さんにお会いしたいので、何曜日に行けばお会いできますでしょうかなどね。とにかくそんな電話が１週間位続きましてね。そうかといえば、後で聞くとまち研の電話が１週間ぐらい鳴りっ放しでね、とにかくパンクしそうだったと、私の方へも苦情の電話が来ましてね。ここに書いてある電話番号は朝から晩まで電話をしていても全然かからないと、うちのほうへ苦情が来るんですよ。これはうちの電話ではありま

せんよ、まちづくり研究所の電話ですからといったんですけども、それほど反響は大きかったですね。と、いいますのは、私は考えまするにいわゆる現在 2500 万人といわれる 65 歳以上のシニアの 15%は１人暮らしなんですよ。これが大きな問題なんですね。１人暮らしの人は何をやっていいかわからない人が結構いるんです。それでこういうところができたなら１人暮らしを楽しく彩るためにここで何かいい事がないかということで、注目されているということもある。まあ、これも考えなくてはならない１つの社会問題としてですね。こればいわゆる社会貢献の１つに繋がるのではないかと私は近いうちに、このカフェは近代的な、六本木や麻布に負けないような物を作れと言ってやっておりますから、非常に垢抜けしたテーブルとイスの配置になっているんですが、おじいちゃんやおばあちゃんが来たら、出会い系に来たけれど全然出会い系のような雰囲気じゃないと、座るところがないということでね。遠慮して座れないというようなところがあるのでね。これはいけないと、そして近いうちに中華料理のように大きい円形のテーブルを作ってね、そこに座ってもらおうと、で、ぱっと座ったら、前も見える横も見えるというわけでいわゆる暇つぶしに来た人達が今日はいい天気ですねとか、何をなさっていますかなどなんでもいいですからね。そういう場に作っていかないとたまり場の使命が果たせないかなというふうなことで、これを私は「たまり場円（縁）コーナー」という名前を付けようと思っているわけです。井戸端会議になりますけれどね。これは歴史は私が作っていくわけですから、「たまり場円（縁）コーナー」というふうな事を、１つの大きいテーブルで共有した癒しの場所を作っていく予定でいるんです。そういうようなこともいろいろ考えております。

そして、社会性と商業性の狭間でどういうふうにやっていくかということを私は非常にいろいろ考えていまして、今ですね、私の作戦はいわゆるメディアに訴えるのは、社会性、しかし連続させる為には商業性という両方を考えなければならない、ところが、商業性が前面に出るとメディアは引っ込むわけですよ。ザ・ワークスの宣伝はしたくないわけですね。やっぱり社会性がないとマスコミ、メディアでは紹介してくれないわけです。ですから、私には大いにたまり場というのがいいわけです。たまり場はＮＰＯですし、聖徳がやっていますよ、福留先生という先生が理事長でやっていますよ。それの私は事務局の支部みたいなものですよと、記者とそういう話をすると、これは社会性があるなということで、書いてくれるわけですよ。

ところが、ワークスにどんどん人を集めて儲けたいんです、どんどん宣伝してくださいと言っても何にも書かないわけですよ。だから、このいわゆる社会性と商業性というものをワークスは奥へ引っ込んで、料理は確かにワークスがやるけれど会場を貸しているに過ぎないと、実際にやるのはまち研であり、東京健康倶楽部、千葉健康倶楽部であり、こういうＮＰＯがやっているんだという行事を多くしていこうというようなことで、ここにあります。たまり場創年の集い、たまり場楽修塾、これらはまち研からくれた物じゃありませんよ。私の造語ですから、私が作った造語ですから、第１号のいわゆる創年の集いシニアが集まる１つの代名詞にしてやろうと。全５回でザ・ワークスでやるんですけど、これを根強くいわゆるシニアですね。

これから 60 歳から 90 歳、100 歳まで生きる時代になってきましたからね、この間 20 年 30 年が空洞なんですよ、シニアのこれはね、行政も企業も考えておりません。具体的なことは、だから私たちが考えてやれと、シニアの過ごし方というものをそして、創年の集いということを創年のたまり場で健康倶楽部と一緒に考えて活性化していきましょう、という行事ですね。そしてこの明るく楽しく子育てと楽修塾というのは、楽しく修める塾と書いてありますからね。楽修塾というのも私の造語ですね。私たち夫婦が８人の子育てをして、平凡ながらも楽しい家庭を築いております。この経験、体験を是非、地域の皆さんにお返ししてこの楽修塾をやっていきたいということで、計画したものなんですね。これもよくやっていきたいというようなことと、後、どんな事をやっていきたいかというと、陶芸教室これは 11 月に展示即売も決まっておりますけれど、たまり場夏祭りというのを、８月 28 日にやる予定なんですね。ここで、焼き鳥を焼いたりとか、落語会をやったりとか・・・。

齊藤：蓮井さん、すみません。そろそろまとめをお願いします。

蓮井：はい、わかりました。時間がないそうですね。夏祭りをやったりですね。私は日本尊厳死協会の理事をやっておりまして、千葉県の代表をやっているんですよ。そのようなことで揺りかごから墓場までということで、いわゆる地元のお医者さん、著名なお医者さんとタッグを組んで尊厳死のセミナーをやってみたいと、これもたまり場でやっていきたいというふうに思っておりまして、そういうようなことで、たまり場の第１号として限界まで挑戦したい、してみたい、どういうことがやれるかとやっているうちに、たまり場本部から、いや、それは違うんじゃないかとか、それはやりすぎだとかいろいろ言われたら、軌道修正すればいいと、それまでは、いろんな事に挑戦し、人集めもし、我がワークスも成り立っていくようにやっていければいいなというふうに思っております。まあ、以上であります。

齊藤：ありがとうございました。とても経験豊かな方でしかも色々な活動をしてらっしゃる蓮井さんですので、20 分だととても話し足りなく３時間も４時間もお話、いろいろな話題がある方なのではないかと思います。私も初めて蓮井さんに出会ったときは一見気難しそうに見えたんですけれども、話せは話すほど面白い方で。まあ、私も自分の父を見ているようでした。

では、今、ボランティアとか、創年の生涯学習ということで最後に一言だけ、時間が迫ってきていますので、学習って事と、生涯学習という事なんですけれども、ボランタリーなものへと、だんだんと、例えばリタイアした、定年退職して、今、テレパゴという言葉がありましたけれども、まさにテレパゴのような生活を送ってらっしゃるという方も本当に多くいらっしゃるかと思います。その辺でボランティアとして継続的にやっていけるとか、そういったことで、自分の事に引き付けて最後ちょっと皆さんにお話していただけるとありがたいと思っております。

松澤：我が家でコンサートをやらせていただいた内容を、お手元の資料で配らせていただいておりますけど、これは自宅でコン

サートをやろうという話が、私の妻の方から話が出て、最初我が家じゃ狭いし、集まってくる方もどうなのかなぁと、賛同を得られるかという話があったのですが、まず１回ちょっとやってみようじゃないかということで、やらせていただきまして、今年は３回目になっています。

実際にやってみると、コンサート会場や公共施設では得られない非常に身近なところでの感動があってですね。そこで今年なんかは参加した女性の方がですね、記事にも書かせていただきましたが、こんなに感動するとは思わなかったと、還暦を過ぎた私がこんなに感動を得られるなんて思わなかったと、あとそのＣＤを買って、聞く度に涙が出ちゃうと言うんです。まあ、歌も素晴らしかった。そういう身近なところでの仲間とそういう機会があったというのが素晴らしかったんだろうなと思うんですね。何かやる時に、こういうことをやったらどうかなと、まず前向きに考えてやってみようという気持ちが大事なのかなと、こういう感動の輪が広がるのが創年のたまり場の大きなメリット、特徴になっていくのかなという気がいたします。私自身、まあ仕事と家庭生活と地域活動なんかをやっていますけれど、あまり垣根を造らずに、やっぱり色々なことに出向いていって挑戦をして、何でもプラス思考で考えられるという風な生活が自分にとってもいいですし、相手にとってもいろいろな意味でいい情報交換ができるんじゃないかと思っています。

齊藤：ありがとうございます。先程、時間がないとか、情報がないとか、きっかけがない、という批判的な言葉を使わないで活動を進めるといっていた松山さん、その辺で、仲間をドンドンと巻き込んでいくような方法について最後にちょっとお話いただけましたら、ありがたいと思います。

松山：仲間を巻き込んでいくというか、子どもと遊ぶということは、０歳の子どもが10年経てば10歳、それに関わってくれた中学生は、もうもっと大きな年齢、その時、高校生で関わってくれた人はもう社会に出て、お仕事をバリバリしているか、もしかしたらお母さんになっているかもしれない、そんなふうな事を考えるときに、ものすごく希望が湧いてきます。

それと、あと１つだけ個人的な事を言ってもいいですか。例えば今夕日を見つめ続ける時に、私が住んでいるマンションは70軒ぐらいのところなんですけれど、子ども達が朝、私は子ども達が登校する時間にはなかなか、下に下りていくことがないんですけど、ある日１階に下りていくと、子ども達が本当に沢山、時間を待って学校に行っている時間に出会ったんですね、その時に、こんなに沢山私の周りに子どもが居たんだって、すっごく希望が持てて、ねえねえ、おばちゃんの所へおいで、夏休みの宿題しない。太陽の事とかそういうことだったら聞いてとかって今会う子ども達に一生懸命囁いています。それで、夏休みに太陽を見ながら温度も測ったり、朝の温度と夕方の温度を測ったら、十分宿題をできるなと、自分の子どもの時には間に合わなかったんですけれども、何処かの誰かの為に間に合うといいなとか、なんか、ちょっと見方を変えれば、あまり大事にならないその中で楽しくささやかにやっていけることがいっぱいあるなと、今思っております。

齊藤：ありがとうございます。では、最後に１分、今、蓮井さんご自身のお話をいっぱい展開していただきましたけれども、実は蓮井さんの奥さんもとっても素敵な方なんです。きっと奥さんの存在があり、蓮井さんがあるんじゃないかと思っています。その点で家族のことも含めてちょっとお話いただけますか。

蓮井：いや、それ１分じゃ難しい。私は本当にいわゆる捨て育てが一番だと思っています。子育てはですね。で、子どもは授かったら、天が授けてくれたと思ってですね、あまり、いわゆるお金がいくらかかるんだとか、生涯育てるといくらかかるから今の月収では育てられないとか、一切考えないほうがいいと思います。子どもは貧乏でも育つ、私をみてください。もう失敗ばっかりした中で、女房はまあ苦労しておりますけれども、そういう中で育つ、８人の子どもを育てています。あと、語弊がありますが、育っております。私どもの子どもの今アメリカにいっている娘もですね、これは私は塾へも行かせないという方針でしたから、行かずにですね、中学生の時から、日曜日になると成田空港とか羽田空港へ行って、どうして行っているんだというと、塾に行かせてくれないから、外国人に会ってとにかく話を聞くんですね、いろいろ、英会話を勉強するんだと、ＴＯＥＩＣ900 点取ったんです。で、この語学を生かしてアメリカで素敵な男性を見つけてアメリカで今、羽ばたいていますけどね。非常にそういうふうなことで、私は子沢山を礼賛いたしております。

私はボランティアをなぜやっていけるかという中で、３つちょっとあります。生かされているという感謝があるからボランティアでいいんですね。私みたいな失敗経営者でもとにかく行き詰まったことがない、これは人間関係が非常によかったからだと思うんです。そういう人達に私はご恩返しできなくても、後世の人にご恩返しする意味を持っていわゆる感謝の気持ちでボランティアできる。好きな事やりたい事、やりたいことだということですね。ボランティアは好きじゃないとできない、やりたい気持ちがないとやれない。この２つ。３つはこれが自己実現の夢である、ことだとおもうんです。生きがいに繋がるで、この３つがボランティアをやって、毎日楽しい生活をするんじゃないかなと思うんですね。

最後に創年の定義の中で私は、創年のたまり場のオーナーの定義を考えてみたんです。これは何かというと、創年のたまり場のオーナーには健康でクリエイティブでアクティブでパワフルに生きる人が創年のオーナーではないかというふうな自分自身の定義をつくってみました。以上です。

齊藤：はい、最後にまとめていただきましてどうもありがとうございました。近々、みなさん創年活動支援センターとして、創年のたまり場の研究会などを開催したいと思っております。その際、またお呼びしたいと思っております。皆さんからのお電話

もかなりありますので、そういったことでご自宅を開放していただける方、あるいはそういった活動を自分たちでやって行きたい方々に、それぞれお話をこういった説明会を開催したいと思っております。このテーマについて今日終わりませんで、続けてまいりたいと思っております。

今日はまとまらない司会になりまして、申しわけありませんでした。でもまた皆さんからご意見を頂きながら進めて参りたいと思っています。今日は時間がありませんので、個々に魅力的なお３方からお話を伺って頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

第３分科会「市民が主役のまちづくりの現状と課題」

発表：　安田　いく代（我孫子市立第一小学校教頭）
事例発表：　真壁　静夫　（サン・ライフネット代表・まちづくりコーディネーター）
事例発表：　鈴木　洋子　（住みよい幕張を考える会会長）

コーディネーター　豊村　泰彦（教育新聞社編集局報道部部長）

豊村：第３分科会のテーマは、「市民が主役のまちづくりの現状と課題」という漠然としたテーマですけれども、このまちづくりを考える時には基本的に市民が主役というふうにしないとなりたたないことがあります。市民が主役というのはなんだろう、ということを常々こう考えているのですけれども、地域の各団体が中心になって行政と一緒になってまちづくりや、地域活性化をやっていこうというようないろんな取り組みではないかなと思うのです。

その中で今回は実際に事例をやっている人と、それからお二方ですね、真壁さんのほうは山梨県の韮崎市で長く行政にも関わり、そして現在フリーになってまちづくりをされています。それから鈴木さんのほうは千葉市の幕張でボランティア活動をなさっている。それから、安田さんとは全国生涯学習まちづくり研究会活動でずいぶん前からいろいろ一緒に活動させていただいています。現在は学校の、小学校の教頭先生をなさっていますが教育関係の方面では幅広く活躍されています。

このメンバーで、地域の活性化というものを市民の立場から取り組まれていることについて１時間半くらい議論するようにといわれました。で、どういうふうに進行しようか、私もあまり考えていませんし、こういうふうにやりなさいと指示されているわけではないので、事前に相談しました。

最初に、今までまちづくりに関わったことのある安田先生のほうからちょっと総論的な話を伺います。そのあと、事例として、お二人にお話していただきたいと思います。

それでは、安田さん、お願いします。

安田：みなさんこんにちは。我孫子市の小学校に勤務しております安田と申します。もともと生涯学習に関心がありまして、ボランティア活動など小学校教員時代からさまざまな形で関わらせていただいてきました。そういう関係からこの場に参加させていただいております。今回の分科会のテーマが「市民が主役のまちづくりの現状と課題」と設定されております。では「まちづくり」というのはどういうことなのかな、

はないでしょうか。４番目に「教育環境が整備されたまち」。これも、例えば特色のある学校がここにあってぜひともその学校に子どもを行かせたくなるような、そういう学校のあるまち、図書館が住まいの近くに整備されていていつでも読書にふれられるまち。住民が自主的に学習したいと思いたったときに、その思いを果たすことのできる公民館や生涯学習センターといった施設があるまち。そういうのもすてきなまちなのかもしれません。５番目は「産業とか経済が発達していて活気のあるまち」。今、大型店舗ができたために商売が成り立たないとかで、お店のシャッターを降ろしてしまって閑散としたまちが増えているという問題が社会問題になっているようですが、そういうまちよりは若者に限らずさまざまな年齢層が集まってくるまち、あのまちに行けば、あんな楽しみがある。あのまちに行けばなんだか素敵なことがあるとか、わくわくするようなことがあるというほうが、魅力あるかもしれませんね。そうすれば、まちが人を呼びよせるようになります。自然に活気が生じてきます。６番目は「健康にいいまち」です。公害に汚染されていないまち。空気が澄んできれいなまち。そういうのも魅力かな、と。７番目に「地域住民の連帯意識が高く、助け合いの気運の高いまち」です。お一人でお暮らしの年輩の方が何日も発見されないまま亡くなってしまう、というような寂しいまちではなくて、一人で暮らしていてもご近所さんとのつきあいがあり、地域になんらかの関わりをもてるまち、または、地域ぐるみで子どもたちを守っていこう、育てて行こうという地域の教育力のあるまちです。

さて、どこに住みたい？選んでいいよ、と言われたらこうした要件が満たされる、どれか１つでも満たされるまちを選ばれるのではないかなと思います。きっと先ほど「自分の住むまちが好きです」「私のまちには自慢できるところあります」と自信をもって手を挙げてくださった方は、いま私が申し上げたような、他にもあるかもしれませんけれども、きっとどれかに値するものがあるまちにお暮らしだと思います。

「まちづくり」、こういうまちだったらいいなあ、こういうまちにしたいなという理想のかたちがある。では自分たちにはどんなことができるだろうか。活動を起こすために必要なことを考えていくと、自分のまちのことをよく知らないと活動する手立てが思いつかない。だから第一段階としては自分のまち、暮らしている近辺をよく知るために歩きまわる。どこにどんなものがあるのか、どんな自然があるのか、どんな施設があるのか、どんな公共的なものがあるのか、それらがどういう状態になっているのかというようなことを調べます。その次に、いい点、長所、欠点やこんなことができたらいいという点などが見えてくる。そうすると、次はいいところをさらに伸ばしていこう、悪いところはどこをどう改善すればいいんだろうと考える。まず自分でやってみようと試みる。やってみるとわからないことがでてきたりして必ず壁にぶち当たります。一人では何もできないとなると、自分の仲間になってくれる人を探しましょう、ということになる。そうすると、今度はいかにして自分の思いを人に伝えるかを工夫する。人に賛同してもらい、一緒に活動してくれる人を探していくうちに地域に仲間ができる。仲間ができてくると、実際に方法を考えましょう、という、本当の活動が出発するわけです。そして、どういう手順をしていったらよいか、何からはじめ

たらよいかということが必要となってくる。それを考え始めると、今度はそれに関する専門家や、そういうことを得意とする人、ノウハウを教えてくれる人、力になってくれる人が必要となるから人材を探すことになる。そこで仲間の人脈が力を発揮するのです。お互いの知人を通じてさらに地域に目が向いていくわけです。

いろんな仲間が増えてくると、だんだん組織ができ、役割が出てくる。そうするといろんな活動の幅が広がってきますから今度は一人で始めた時よりもさらに大きな力となってレベルアップしてくる。活動の範囲が増えると同時に活動の成果が見えてくるようになる。「あぁ、やった」という成就感や満足感が生まれる。それでまた、面白くて楽しくて嬉しくて、また次の活動に、あるいは今やっている活動ももっと規模を広げていこうと意欲がわいてくる。これが基礎となって活動に広がりが出てくるとともに、ときにはもとに戻って活動を見直したりしフィードバックしながら発展していく。こうして活動が継続していくと、知らない間に活動している本人が地域に関する多くの情報を手に入れている。と同時に次に何かをしようとするときのノウハウも学び、身につけている。

この一連の活動が生涯学習だと私は捉えております。そういうことをやろうとしている人たちが多いまちであればあるほど生涯学習が盛んなまちであるということがいえるのではないでしょうか。その活動の成果は一体どんなものがあるのか、例えば先ほど申し上げましたように活動している本人は達成感が味わえる、成就感が味わえる、ということが１つ。それからその皆さんの活動がまちのためになっていく、人のために役立っている。３番目に仲間が増えていく。それから、自分がその活動の一員であること、社会の一員である、という認識が芽生えてくる。そうすると自分の存在感が認められるということ、そして、やがてはそういう自分のまちが好き、愛着をもてるようになる。ということで、「まちづくり」は、とにかく自分のまちも、人も地域も含めて好きになることかと考えております。

さて、ここで資料の右側にある「サタディ・コミュニティ・スクール／北小金」について説明させていただきます。松戸市では、市の今後の教育のあり方について懇談会がもたれておりました。その１つの事業として、「学校を拠点とした地域コミュニティ作り」が考えられました。そこで、松戸市教委は、学校が休業となる土曜日を利用して子どもたちの活動拠点を作ろうということで、松戸市の広報を通じて、広く市民からアイディア（企画）を募集しました。いくつかの応募があったそうですが、この「サタディ・コミュニティ・スクール／北小金」は、承認された２つの企画のうちの１つでした。

さて、この「サタディ・コミュニティー・スクール」には、校長がおります。もちろん、一般市民で教育関係者でもありませんが、自分たちの地域を愛し、よくしていこうと日常的に地域で活動する人でした。意を同じくする人たちが中心になって、お互いの知人を集めました。私は幸いにもそのうちの一人として声をかけていただき、教師としての経験から学習の仕方についてお話したり、実際に教材を提示したりするなどの協力をさせていただきました。

きっかけを作ってくれたのは、さきほど申し上げたように、市教委という教育行政でしたが、実際の活動内容はまったくスクールに任せられ、それぞれが持ち寄ったア

イディアを十分いかすことができました。学習内容は体験活動を中心としたもので、松戸の自然や文化に関するものでした。なぜ地域の学習をやろうと考えたかというと、今の子どもたちは家庭と学校、あるいは家庭と塾の行き来だけで１日を終えてしまっている、そうするとなかなか、地域や地域の人たちとの接触がないわけですね。だから、地域の子どもたちを地域に戻したい、地域で子どもたちを育ててみようよという願いからでした。まず、地域の散歩からはじめました。学校に戻ってきてから散歩で見つけたものを大きな用紙に描かれた白地図に描きこんでいきました。そうしてみると、北小金の周りには意外にお寺さんが多いことがわかりました。今度はお寺さんめぐりをして住職のお話を聞きたい、北小金の昔話を集めたい、北小金の植物について知りたいとどんどん学習が広がっていきました。しかし、子どもたちの希望に応えるためには、私たちスタッフだけでは無理がある。そこで、その道の専門家はいないかとお互いの人脈を駆使して探しました。スクールの回数が増えていくうちに、スタッフの人数も増えていきました。実際土曜日の授業をするためにはさまざまな事前の検討が必要です。ですから、そこでスタッフが集まってこのときはどんな企画をしようか、どんな授業内容にしようか、ということで話し合いをするわけです。スタッフ会議は、仕事が終わった後ですから当然夜になります。忙しくてもそれぞれ都合をつけて集まってくるのです。会議のたびに新しいメンバーが増えているのも楽しいし、会議の後のいっぱいやりながら自分の思いを語りあうのも楽しみでした。

スクールの回数を重ねていく内にどんな変化が現れたかと言いますと、スクールには異年齢の子どもたち、しかも地域の複数の学校から参加してきていますので、今まで声をかけたことのない子でも、まちの中で会うと、「やあ」というあいさつをしたりするようになります。またスクールに関わっている大人たちともあいさつができるようになりました。またスクールの子どもたち同士で遊びに出かける計画を立てたりまでするようになりました。それから、２番目にこの「スクール」は大人も学ぶ「地域学校」でもあったということです。子どもたちと一緒にそういうお寺さんを回った、伝説や農家の話を聞いた、ということによって、私たちのまちにはこんな史跡や名跡があった、そういうお話が伝わっているんだ、ということを改めて認識できた。あらためてまちを見直す機会ができた、という喜びことがありました。また、地域と子どもたちと一緒に何かできるという喜び、逆に大人がそういうことを学んだというか、大人が企画した活動が実は子どもたちをサポートするつもりが、自分たちが地域について学んだ、教えられたといういい機会だったということです。

ということで、このあとお二人の事例がありますから事例について私のほうから詳しくは申し上げませんけれども、１つ課題を申し上げるとするといくら市民が主役といっていましても結局いろんなしがらみがあるわけですね。勝手に私たちがやれない、例えば、行政の力を借りなくてはいけない、ということもある、それから、お金の問題もあるでしょうし、人的な問題もある、物的な問題もある、ということでいろんな課題がある、だけれどもその課題をクリアしていく、ということが自分たちの勉強にも関係していくということであるので、私は、課題は多ければ多いほど、壁を乗り越える

数が多ければ多いほどその私たちの活動がどしどし成長していく、ということではないかな、というふうに考えています。「市民が主役のまちづくり」、ということで、大変幅広いテーマですけれども、前から自分がこういう活動を、どういうことが自分の身になっている。要は人間って自分を必要とされることで、自分が生き生きする、ということがございますよね。誰かに必要とされている、もしかしたらここで皆さんのお役に立っている、ということが実感できるとそれが自分の生きる励みに、そういうのを見つけられるのがまちづくりの一番面白いところではないのかなあ、というふうに思います。

私たちは必ずどこかに所属をしていたい、その所属感、あるいは求められる、という安心感。そういうところを選ぶための活動であったらな、というふうに思います。あの、また後ほどお話をさせていただきたいと思いますが。(拍手)

豊村：ありがとうございました。先ほどの最後のところで自分が必要とされることで生活が生き生きとしてくるというお話がありましたが、非常に私もそう感じました。

この分科会の前のシンポジウムのところで、福留先生が創年の話をされましたが、このフォーラムは創年というのが大きなテーマなのですね。なかなか難しい定義で私もよくわからないのですが、だんだんとわかってきたのは、安田さんの言う、自分が必要とされていろいろ活動するということで自分自身を生き生きとさせていくことなのかな、それが創年なんだ、だから、われわれはそういう創年を目指して学習しなければならない、それが生涯学習なのかな、と感じました。最初の総論的な部分で、よいまちとは何かを挙げていただきましたが、みなさんそれぞれ自分のまちを思い描いたと思うのですね。

私事で恐縮なのですけれども、私が今住んでいるのは東京の新宿区です。新宿区というと皆さん思い浮かぶのはあの高層建築の都庁があり、風俗店が集中している歌舞伎町があるところではないかと思いますが、そればかりではなくて住宅街が多いところでもあります。それでもまあ、だいぶ居住人口が減って、学校がどんどん統廃合になって非常に通学区域が広いのでかなり不便な点もありますが結構下町情緒も残っています。私の住んでいるところは住宅街で、一般的な新宿というイメージとはそぐわない、比較的緑とか下町情緒がある地域です。そういうところが気に入っているわけです。気に入っている要因はいろいろありますけれどもやはり人と人とのつながりがあることです。結構お祭もあちこちで行われます。それも非常ににぎやかなお祭なんです。そういうところで自分のまちが好きになるきっかけができるのではないかな、お話を聞いてそう思いました。

それから、具体的な話として、「サタディ・コミュニティ・スクール」を紹介していただきました。まさに、コミュニティスクールというのは非常に教育の中でも重要なテーマであって、いわゆる学校を中心として地域住民のつながりをつくるものです。学校というのは子どもが集まるだけではなくて大人もネットワークをつなげていく、そういう地域のネットワークの拠点となる、そういう要素をもつ学校をコミュニティスクール、という言い方をしています。一緒に地域の大人と子どもが活動をする、そういう学校が全国に、最近ですけれども多く見られるようになっています。そういう活

動は大人にも子どもにも非常によい影響が出てくることは間違いありません。学校では安全が非常に問題になっています。不審者への対策などの問題が出ているわけです。コミュニティができることによって、学校に人が多く集まることによって、みんなの目で危険を察知し、学校を安全な場所にしていく、そういう役割もあってコミュニティスクールは非常に注目される。

次に今度は事例として、お二方に大体15分くらい話していただきたいのですけれども、最初に真壁さん、よろしくお願いします。

真壁：ただいまご指名いただきました山梨の真壁でございます。今回、大学のほうから「心の3・3方式」について報告しなさいという言葉をいただきました。限られた時間の中でどれだけお届けできるかわかりませんけれどもしばらくの間、お聞きいただきますようお願いします。

生涯学習による「まちづくり」。理念を提唱したものが「心の3・3方式」ということでございます。私も30年近く行政の中で社会教育、そしてまちづくりに関わっていた者でございます。決して政治家でもなければ評論家でもございません。ただ、実際に現場で体験してきた者として、一昨年役所の賞味期限が切れまして今、フリーとなっているわけですけれどもその内容でございますけれども、私は昭和51年社会教育主事として任命を受けた時、それからしばらくして一つの言葉と出会ったわけでございます。その言葉は、「生涯教育」という言葉でした。今は亡き岡本包治先生の本の中の小さな項目の一つです。大変それに興味を持ちより深く調べていく度に、大変感動いたしました。1965年、昭和40年、あのユネスコ、つまり国連の教育科学文化機構、当時の事務局長でありましたフランスの学者のポール・ラグランが、その重要性を提唱していたところでございます。

その内容を知ってみますと、まさにこれこそ日本が教育の中にその考え方を導入すべきだと私なりにも感動したわけでございます。けれども一介の社教主事がいくらほえたところで教育の大きな流れを変えることはできない。そうしたならば少なくとも自分が担当している社会教育の中にその考え方を導入し、そして自分たちの現場の中から生涯学習の心を発信していこうと考えたところでございます。嫌いなものも学ばされる—なぜ？学べばどうなるのか。市民の多くが教育を職業としている人々ではございません。ですから、教育言葉や専門言葉でそれを訴えたところでなかなか効率が悪い。そうしたならば、いかにわかりやすい図式で皆さんが活動すれば、学習すればどんな私たちの地域が、まちが作れるか、と言うことを訴えたかった。そして、その図式に悩み悩んでいたときに、ある夜、夢の中にその図式が浮かんだところでございます。はっとして起きて新聞紙にマジックで書いた、それが「心の3・3方式」の原型でございました。

まちづくり、私は、まちづくりは人づくりだとまず思います。そしてその人づくりでございますけれど、まず人を中心としてその図表をご覧いただきたいのですが、人を中心として考えていく、人は何によって作られていくか。育てられていくか、それはまずご家庭によって育てられる、作られていく、次は学校というところで基礎、基本を学び、人間形成を育ててくれる。そしてまた、全体を包む地域社会が、人間を育てていく、そうしたならばまず家庭、学校、

地域社会が言葉を図式に示されたように３者しっかりと手を結び共通理解をする。そして青少年の育成に共通理解をして、最近の言葉では融合という言葉で訴えているようですけれども、そうしたみんなが同じ気持ちになって子育てに地域が、関わって行われなければならないということでございます。「心の３・３方式」の「心」とは、「心がけ」と解釈いただいて結構でございます。

まず、我が子を、そして地域の子どもたちを育成していくのに、育てていくのに母として父として、そして地域の大人としてどんなことに心がけなければならないかと申しますと、そこには人間形成の３原則「知育・徳育・体育」というその３つに心がけていかなければならない、しかもそれはその図式のように等分した心がけでございます。等しく、もし知育のみを、体育のみが先行したとしたならばどうでしょうか。ある学者の言葉をお借りいたしますと「徳育なき教育はただ知恵ある悪魔をつくるのみ」言葉を残されています。現代社会を見てもそうしたことがうかがえることが一般にあるのではないでしょうか。

ふと考えてみた時にみんなが青少年育成に平等の、哲学をもった心がけをしていく必要があるということであります。そうしたならば、じゃあ子育てをする父として母として地域の大人として、自分たち自身はどんな心がけをしていかなくてはならないかと申しますと、その知育の心がけを持って育てられた自分が、今度はさらに教養を高めるような心がけをしていかなければならない。そして、体育の心をもって育てられた自分がその逞しい健康な身体を持って勤労を尊ぶような心がけをしていかなければならない。さらに徳育の心を持って育てられた自分が今度は親として地域の大人として自然を愛するような心がけをしていかなければならない。ということでございます。そしてその豊かな教養の中でこれからの人生プラン、学習プランを立てていく、それを逞しい体力でそれを行動し実践していく、「Plan. Do. See」というその矢印がございます。そして自分の歩みを良識ある判断で自分の人生の歩み、学習の歩みを見つめ、反省し、その反省の上に立ってさらにまた新たなプラン、人生学習プランを立てていく、それをまたどんどんどんどんとくり返していく、あのビルのらせん状の階段のように一人一人がそこで、遊びながらでもいい、努力して一段一段ずつでも上がっていけば、いつしか２階へ３階へと上がっていくその現実でございます。そういうものに心がける、そしてそれをやろうとする市民がたくさん住んでいる、それぞれのまちの将来はどんなまちが誕生するだろうか、そうです、限りなく眼下に広がるところの文化のまちが、そして豊かなまちが、そして美しいまちが誕生する、これを信じて、どうぞみんなで努力してみようじゃないか、心がけてみようじゃないか、というのがまず市民に訴えるこの「心の３・３方式」の図式でございます。

そして、じゃあ、一体、具体的に何をすればよいのか、ということでございます。私は「実践17項目」というものを提唱いたしました。その17項目に細かくは触れられませんけれども、ここの17項目は見ていただきますと地域の必要課題です。地域には要求課題と必要課題がございます。でも、要求課題だけに応えていて本当に地域、まちがよくなるでしょうかと、考えてみた時に私はこの生涯学習によるまちづくり、その運動として、「実践17項目」を提唱いたしました。そして、それを皆さんが選んで

実践して運動として広めてください。しかし、それはある一市民に言わせますと、「これは行政が今年はこの項目を取り上げよう、今年はこの項目を取り上げる、そういう仕向けをしてほしい」という要求がございました。それは違います。生涯学習は他から与えられるものでなくして、自らが求めていくものであるならば、それは皆さん、学校ではこの項目はどれ、あなたの自治体ではこの項目の中のどれ、あなたの会社では、あなたのグループでは、どれを選んで、みんなで考えて選んで、そしてみんなでその実践を約束し合い、そして自分たちの活動をまたみんなで反省してみるという、そういうものが生涯学習でありますよと、提唱してきたものでございます。そして、生涯学習と生涯学習によるまちづくりと申しましても、生涯学習の捉え方は、国が打ち出して 20 年間近く経ちますけれどもその考え方はまちまちです。生涯学習イコール社会教育、あるいは生涯学習とは、金のある者、知恵のある者、暇のある者がやるものと、ようするに趣味、お稽古事それが生涯学習だと答える人もまだまだ多うございます。

そこで、生涯学習とは何かとたずね聞かれた時に、生涯学習とはそんなちっぽけな、狭い範囲のものではございません。私たちの生活、全ての生活の上に打ち立てられた教育理念、その中に、私は４つの柱がある、それを市民に訴える時に教育言葉、専門言葉で、どうして市民が耳を傾けてくれるでしょうか。そのときにわかりやすい４本の柱を説明してまいりました。それは、一つは「人間らしさを高めるための生涯学習である」。人間らしさを高めるための生涯学習は、一時の経済成長により大家族制が、そして核家族化へと進展していきました。その中に、おじいちゃんが、おばあちゃんが、子どもに、孫に、「隣のおじさんと行き会ったら、『こんばんは』というんだよ、あるいは何かいただいたら『ありがとう』と言うんだよ」と、生活の中の「生き方」というものを教わる機会が極めて少なくなってきた。それを私は経済成長公害と申してきましたが、そして、その人間らしさ、また、女性の皆さんが外へお勤めに出る機会が多くなりました。職業の多様化、勤務時間の多様化、一軒の家の中ですらみんなが同時に時間を取り合うことが難しいような時代を迎えたところでございます。はれて、人間らしさを高めるための生涯学習を展開し、あるいは行政は人間らしさを高めるようなプログラムを提供していかなければならない時代を迎えてきているということであります。２つ目としては「生きるための生涯学習」というのがあると訴えてきました。まさに、どれだけ人間らしさを求めなさい、といいましても我が家の経済安定せずしてなんで人間らしさだけを求めることができるでしょうか。そうしたならば、まさに「職業学習」であります。それぞれの職業の中に時代に対応した学習がいっぱい出てきます。ＯＡ化の波、先輩方にはマニュアルを隠れて家に持ち帰って、そして勉強してこなければ自分の職責を果たすことができない、という時代を迎えて、またいかに短期間に短時間にどれだけ高額の収入を得るかを学習しなければなりませんという、生きるための生涯学習というものがあります。３つ目としては誰もが歳を取ってまいります。「福祉の対象」から「必要とされるお年寄り」になるための生活設計になるための生涯学習というものがあるんだと、訴えてきたところでございます。誰もが年金をいただきたい、そして、困ったときには子ど

もたちから支援をしてほしい、それは当然のことであり、でもそれだけで満足していたとしたらそれはまさに福祉の対象でしか過ぎないというわけでございます。そうした時に日本人は長寿国、世界一の長寿国、それは最も素晴らしいことです。しかし、長生きすることは幸せと、誰が保証してくれますか。と、考えてみた時に自らが若き日の時から、歳をとったときに必要とされる、「あのおじいちゃん、おばあちゃんは我が家にとって、地域にとって必要な人なんだ」といわれてはじめて生きてきてよかった、…という生きがいにつながっていくわけでございます。4つ目は「まちづくりのための生涯学習」であります。まちづくりのための生涯学習とは、還元活動です。自分の持っているものを還元しよう、そうです、知恵のある者は、あなたの地域のためにその知恵を出してください。職業の中で勝ち得た知恵、自らの努力によって勝ち得た知恵、その知恵をどうぞあなたの地域のために。「知恵は苦手」という方がいます。その方は、あなたには豊かな財政力があります。どうぞお金をあなたの地域のまちづくりのために出してください。財の還元活動であります。そしてそれは、素晴らしいまちづくりであります。知恵もなく、金もない人がいます。どうすればよいか、あなたには暇があるではないですか、暇をどうぞあなたの地域のために出してください。余暇の還元活動であり、それも素晴らしいまちづくりです。そうです、知恵もなく金もなく暇もない人はどうするのか、そうです、黙ってついてきてください。世の中見てください。知恵もなく金もなく暇もない人が口を出すからうまくいくものもいかなくなってしまう。そうです、黙ってついていくことが悔しかったらあなたも、知恵か金か暇が出せるような人間になるべく努力してみたらいかがでしょうか。それがまちづくりのための生涯学習です。というふうに訴えてきたところです。

しかし、いま、考えてみますと、日本の社会、毎日毎日流れるニュース、それを見たときにどうでしょうか。文部省が新しい風「生涯学習」と訴えてからもう20年近く、そして数ある公民館、カルチャーセンター、学習人口はものすごく増えてきている、にも関わらず、毎日のように流れている新聞やテレビのニュース、ご覧になってください。斬った、はった、殺した、殺された、騙した、騙された、そんな殺伐としたニュースが後を絶たないではないでしょうか。どこに、今、その生涯学習の成果がでているでしょうか。それを考えてみた時に私は今までの課題として、今までの生涯学習はみんな自分だけが自己満足すればそこで終わっているという生涯学習が展開されてきてしまっている、残念なことであります。それを還元しよう、まちづくりのためにと、学んだことを誰かのために役立てて初めて価値のあることをどこか失ってきてはいないだろうか、そして私は昨今のニュースを見て、そのキーワード、これからの生涯学習のキーワードは「命、誠、そして生きる」という、それが私はこれからの生涯学習に、行政もそして民間も一体となって取り組んでいかなければ、日本の将来はとても望めない、そして、治安のいい国はおとぎ話になってしまう、そんな事情を心配するところでございます。

最後に、いかに還元活動を地域の人々、学習者にそれを伝え、仕向けていくかが、これからの大きな課題というふうに思います。ちょうど時間となりました。ありがとうございます。(拍手)

豊村：「生きる」ということのテーマが生涯学習だけではなくて本当は教育そのもののテーマとして重要だというふうに思いました。学校の中でも「生き方」について学習のいろいろな場で、教科学習だけでなく道徳は、総合的な学習の時間、あらゆる時間で教える必要があります。やはり「生き方」は教育の中で一番重要でないかな、と思いました。私も常々新聞の編集をしながら感じていることなのですけれども教育というものをもっと広くとらえると、生涯学習というのは大きなテーマなのだということを真壁さんのお話を聞いて思いました。

次に鈴木さんのほうから、「住みよい幕張を作る会」のいろいろな活動をご紹介していただきます。よろしくお願いします。

鈴木：みなさんこんにちは。紹介いただきました、鈴木と申します。さきほどの真壁さんの立て板に水の元気なお話を聞きました後に発表するのに値するような活動かどうかと思ってどきどきしてまいりましたけれども、よろしくお願いいたします。

「住みよい幕張を考える会」の活動は、幕張といいますと、幕張メッセとか、今年は千葉ロッテマリーンズが活躍しておりますけれども、その本拠地のマリンスタジアムなど、海のほうの幕張のイメージが強いと思うのですが、私が住んでいる「住みよい幕張を考える会」が活動しているところは「旧幕張村」みたいな所なのです。松戸からですと新京成で40分、京成津田沼で乗り換えて千葉方面へ２つ目の駅です。松戸から１時間くらいですね。実は、私は平成13年から２年間、今説明しました交通手段を使って、聖徳大学に毎日のように通っていました。私のような年齢ですから、えっ、と思うかもしれませんが、大学生として、児童学科の生涯学習指導者コースで、私の子どもと同じような年齢の若い方々と一緒に福留教授のゼミで学んでおりました。

ちょうどそのころ、平成14年にこの「住みよい幕張を考える会」が誕生したのです。今、清水先生が入っていらっしゃいましたけれども、清水先生の教えも受けて一所懸命勉強しておりました。今日このように聖徳大学の生涯学習フォーラムで発表することがあろうとは夢にも思わないで、その会の活動に一ボランティアとして参加しておりました。千葉市花見川区幕張町というところですが、この地域は、千葉県が30年位前から埋め立てをする前は漁業と農業で生活をしている人がほとんどで、ほんとに自然の豊かな村だったのです。私は、この幕張町に住みましてもう 20 数年になるのですけれども、20数年経っても私はまだ新参者です。昔からの方たちは屋号で呼ばれています。

有名な、自慢するものがあるか、というと、あまりないのですけれどもＪＲ幕張駅と京成幕張駅のすぐそばに、「青木昆陽のさつまいもの試作地」というものがありまして、そこには石碑が建っております。それで、江戸時代、飢饉が来ても幕張の村の人だけは誰一人餓死した人がいなかった、とものの本に書いてありまして、そういう村

だったのですね。このところ有名なのは作家の椎名誠さんです。小学校、中学校、高校まで幕張町に住んでいまして、それでよく彼の小説の中には幕張の浜とか幕張の海で遊んだ、という描写がたくさん出てきます。

そういうところなのですけれども埋め立てがどんどん進んで、幕張駅の周辺地域は市街地再開発が計画されたのですね。市街地再開発するために駅の周りはほんとにロータリーもない狭いところだったのですけれども、道を広くしたいと考えた時に、代替地として市が少しずつ住宅地を買い求めて準備していたところがあるんですね。

しかし、その再開発が2001年に、中止しますということになりまして、準備のため、確保されていた用地が空き地になって、駅周辺に10数箇所くらいあるんです。フェンスで囲まれて草ぼうぼうのゴミの山、そういうところになってしまったんですね。で、千葉市のほうでも、市街地再開発に代わる何か新しいまちづくりを考えていかなくちゃいけない、ということで「まちづくりフォーラム」を、2001年に呼びかけて開催いたしました。そこで、いろいろまちの人たちの意見が出たんです。「子どもやお年寄りの広場がないからあるといいね」、昔からのまちですから、すぐ小路を入って行き止まりで消防自動車も救急車も入れない、入り組んだ小路がたくさんあるんですね。「防犯防災のまちづくり」とか、それからもう、やっぱり商店街ですね。「もっと元気にしていくにはどうしたらよいか」、いろいろ意見が出てきたのをまとめて考えていこうということで「住みよい幕張を考える会」が誕生したわけです。

レジュメに会の概要を書かせていただきました。「市民による手づくりのまちづくりを進めたい」ということではじめたわけなんです。けれどもどこからやっていいか、いくら道を広くしようとか、防犯防災のためのまちづくり、とかいろいろ考えましても、それはもう人の土地とか、いろいろしがらみがたくさんあるところで一概にはできませんね。再開発が相次ぐ、ということで準備していたお店の人や、道が広がる、ということで既に代替地をもらってしまった、という人もいる。幕張の4丁目、5丁目が中心なんですけれども人口は15,000人くらいです。一軒家の多い住宅地なんですけれども、そういう中でまずは住民が自分たちで活動できるところから具体的にやってみようよ、ということでまちづくり用地の活用を進めていくことになりました。

まず、放置自転車ですとか、ゴミの山、雑草の幕張駅の南口の駅の真ん前を美しい花壇にしていこう、ということではじめました。(パワーポイントで) これが現在の花壇のできているところなんですけれども、ＪＲ幕張駅前の未利用の用地を借り受けて整備しました。ここが幕張駅のホームで、ここが幕張駅。真ん前が交番です。

どんなふうなまちづくりがいいのかということを考える一方で、作業を進めていったんですね。レジュメに書かせていただいたように、平成14年度の活動のところでは２ヶ月に１回くらいずつワークショップをどんどんやっていった記録がありますけれども、それはどんなふうなまちづくりがいいのか、ということを、会員と地域の人たちで話し合いながらやっていったという記録でもあるんです。１日２日でできることではありませんし、会員はほとんど平日常勤で働いている人たちが多くて、どうなることやらと思いました。しかし少しずつ変わることに喜びを見出しながら肉体労働を

やっていったわけですね。それで、やっとがれきの山を整理して、花を植えようとみんなで相談して雑草が生い茂っていた空き地が花で埋まりました。これはできたてのころだったんですけれども（写真）、このときは真ん前にマンションが建っていなくて、このあとにマンションが建ちました。私たちは本当は花作りの会ではないんですけれども、どんなまちがいいか、ということを話し合っていくときに一番の駅のメインのところの、みんながやだなあ、と思っているところを少し変えていこうということで植えたんです。きれいになってみると嬉しいものなんですね。花を植えますとですね、花は生き物ですから、天気がよいと花がしおれていないかしらとか、通る人がごみとか捨てていかないかしらとか雑草が生えていないかしら、とかいろいろ気になります。

ここの駅を利用する人たちも声をかけてくださったり、「ここは誰がやっているんですか」と関心も出てきた、というような感じですね。で、これで少し勢いがつきまして、ここから3分も離れていないところのもう一つの市の空き地なんですけれども今度は、この辺には広場がないから子どもの遊び場がほしいということで、今度はここ120 坪くらいでしょうかね、そこもすごい荒れ放題になっていたんですけれども今度はそこを借りて、また整備してたんぽぽ広場をつくりました。

最初は雑草で、駅前花壇の雑草で閉口していたのに、また皆さん、力を振り絞って雑草を取り除いて、整備をやり始めたんです。すぐ近くに公立の保育所があるんですが、そこは本当に庭のない、狭いところにある保育所なんです。ここの回りを散歩コースにしていたものですから、ああここに公園というか広場ができるんだったら自分たちもここ利用できるわ、ということで、散歩がてら来て、それから先生たちも一緒に手伝ってくれました。これもまあ、土日の度にというような感じで…、散歩に来た近所の人がですね、今は芝生と花が植えてあるんですけれども、そこの花の手入れなどしてくれています。犬の散歩や、子どもと高齢の人の井戸端会議の場所になっていて、少しは地域のために役立っているのかな、という感じで会が管理をやっております。

会員の他に、会に協力をしてくださるという意味で会のサポーターになることができるという会則があるんですけれども、サポーターに大学生がすごく入ってきてくれました。最初にはじめたフォーラムに参加した大学生が、じゃあ僕たちにもできること、やれることはないか、ということで関心を持って入ってきてくれたんですね。大学生が入ったことで、彼らはフットワークが非常によいわけですから、自分の仲間にも声をかけて連れてきてくれたり、私たちの活動情報誌「馬加通信」というものがあるんですけれども、この通信の編集なんかも学生が中心になって記事を集めたり商店の人にインタビューしてくれたり、そういうことをやってくれています。

この「馬加通信」というタイトルがありますが、このネーミングはこの幕張の地名なんですね。頼朝が幕張に陣を張ったときに馬を増強したことから史実的に「幕を張る」、あるいは「馬を加える」、ことから「まくはり」「馬加」、というふうに読まれていた。ですから、「馬加」という地名をとって「馬加通信」というふうにしたわけなんです。こういうものを作るにあたって、中のイラストとかレイアウトとか、大学生がいろいろ知恵を出してくれて、さっさとこう

やってくれるんですね。私たちにはとてもとても一晩ではできないようなこともさっとやってくれて、非常に助かっているんです。それからこの活動をしてからですね、地域の人たちとずいぶん自然に声をかけてあげられるようになりました。

地域の中に、ずいぶんいろんな人が住んでいるんだなあ、ということが改めて見えてきました。この「馬加通信」の題字はですね、中嶋宏行さんという、書道家と書いてありますけれども、このような人が地元に住んでいるなんて知りませんでした。ヨーロッパのほうで知られていてしょっちゅう外国へ行っている方なんですけれども、題字を書いてくれました。いろんな人たちがまちの中にいるということが、こういう活動を通して見えてきたというところが、私にとってもいいことだな、というところがありますね。

先ほどから申しましたように、市のほうの再開発が中止になったというところですから、この会の活動には市から担当者がついてサポートしてくれています。定例会を開いているのですけれども、定例会の会場は市の連絡所を借りています。そこに置かれているコピー機とか、印刷機とか、それは存分に使わせていただいております。市の担当者の人たちは土曜日や日曜日に出てきて、作業をしてくれたりして、何か、こう一緒になって汗をかくと、立場とか役割とかいうものを越えて、人間的な付き合いが出てきました。そこでいろんな話をしたり、それから、ご苦労さん会じゃないけど、飲み会に発展したり、自宅にちょっとお茶でも飲んでいかない？と招いて一緒にお茶会をしたりとか、そういう付き合いが出てきました。

それから財源なんですけれども、フォーラムの時は、会の活動を地元に知らせていくことと、フリーマーケットとかバザーをやっているんですね。そこの収益が会の活動資金です。活動資金といっても、花の苗を買ったり、肥料を買ったりと、それを使っています。

まちのほうからいろいろなサポートがある、というようなことを言いましたけれども、こういう市の土地を借りるのに１年ごとに更新しなければならないんですね。そういう手続きも市の担当者の方に教えてもらったり、緑地課で「花いっぱい運動」をやっているからそこから年に３回くらい花の苗を助成してもらえるよ、というようなことを教えてもらえる。そういう活動をしているところに助成金が出るから団体として申請してみたらどうか、とかそういう情報や申請の仕方それの文書の書き方など、いろいろ教えてもらいながら、活動しています。

（パワーポイントを見ながら）この５月の 11 日にイベントとフリーマーケットをやりました。ここで活動の展示をしたり。これは学生のサポーターの方たちですが、若い人も地域の人もいっしょにやりました。課題もたくさんあるんですけれども時間が足りなくなりました。すみません。（拍手）

豊村：再開発でいろいろ状況が変わるときはまさにまちづくりのチャンスでもあるわけですね。安田さんのまちづくりの話も含めて質問をお聞きしたいと思います。

何か質問のある人。

参加者：あのう、安田先生に質問したいのですけれども、地域で引きこもったり、障がいを持っている方も、サタディ・コミュニティ・スクールに受け入れはどんなふう

にされていらっしゃいますか。

安田：それは、もちろんウェルカムです。実際に私が関わった時は「サタディ・コミュニティ・スクール」の第１期でした。そのときに学校に行けないというお子さんが一人いらっしゃいました。そのお母さんが市の広報を見てこのスクールのことを知り、「土曜日の２時間くらいだから行ってみない？」とお子さんにもちかけたそうです。そうしたら「じゃあ、行ってみようか」という気になって来てくれたということでした。ちょっと消極的な感じのお子さんでしたが、なんとかみんなに交じって活動していました。それを見てお母さんがすごく喜んでくださったということがあります。

豊村：その他に質問はありますか。

参加者：安田先生に。実は私・・・関わり始めたところなんですね。というのは学校をですね、市立の小学校や中学校を中心にしまして、学校の空き教室を使って、学校を中心にしたまちづくりを、そういう題目で考えました時にですね、２つの方面から苦情が来まして、１つはですね、学校側から、「空き教室」ではなく「余裕教室」だ、こういうふうに言われたんですね。

もう１つはですね、地域と住民の方から「学校を中心とする、ということは一体どういうことなのか。他にも公民館とか市の施設とかあるから学校にこだわる必要はないだろう」と、いうことで、学校に対するアレルギーが強いんですね。アレルギー、という言葉は適切ではないかもわからないんですけれども、ようするに私は小学校に入ったのは我が子が何かしでかして説教を聞きに行った時だけだ、というふうなわけなんですね。

それも、そこの裏門を入ったところに体育館があって、それ以上は立ち入っていない、だから、学校を中心にという考えがなく、彼らにとっては一番近くて一番遠いところにある、というところなんですね。

で、学校に対しては「空き教室」ではなく「余裕教室」ということで。

それから住民の方には「学校を中心に」ではなく、「学校を利用させてもらいましょう」という話で詰めているのですけれども、これはですね、松戸市教育委員会という事例を見ますと、教育委員会が中心となってやっているだろうと思うんですけれども、行政が中心になってやっている場合、学校はどういった関わり方になっているのか、具体的に。それをちょっとお聞きしたいのと、それからまあ、それに関連するかわからないのですけれども、毎週土曜日午前中というふうに載っていまして、学校を使うとですね、結局、学校の施設を使うということですよね。そうしますと、校長先生は毎週出て来ているのか、あるいは鍵は誰が預っているのか、かならずぶちあたることですよね。それで学校を利用するといった場合に、学校の放課後とかですね、それから週末はどうしているのか、そのへんをちょっと参考にお伺いしたいと思います。

安田：学校の教室を市民が借りたいという場合、許可が得られるかどうかそれは難しいというのが実際のところです。もし、「学校の施設を貸してほしい」と申請してきた場合、私の学校ではできるだけ許可するようにしています。土曜・日曜に関わらず。鍵の管理は教頭の私のほうでしておりますので、時間のある時は私が出向いたり、都

合がつかない場合は、事前に鍵の貸し出しをしております。

「サタディ・コミュニティ・スクール」の場合は、たまたま、市が教育改革を考えている背景もありまして、それでこういうことをやってみないかということで、予算も取ってくださったんですね。その代わり運営は市民であるあなたたちでやりなさいよ、という立場だったので学校からは協力を得られやすかったということがあります。ただし、校舎のどこでも使用していいというのではなく、範囲を限定されたということはあります。ただ、さきほど話題にも上がったように不審者の問題とかがあって勝手に出入りされるとどこに入られてしまうかわからない、ということもあるので安全管理としては非常にナーバスになるところであります。だからまあこの範囲でどうぞ、ということで自由に使わせていただいています。

参加者：今のお答えを聞いてもう少したくさん聞きたいと思ったんですけれども、学校を使う、という話なんですが、私の息子が松戸第四中の卒業生なんですけれども、同級生と結婚をするときにそこの講堂を借りて、結婚式をやりたい、どうしてもそこで、ということでですね、1年近くかかってやっとできた、というのがありまして。というのはとりあえず校長先生にお願いして、市の教育委員にお願いしたり、それから担任の先生といろいろお願いしたんですがなかなかOKがもらえなかった。で最終的には市教委も市長にもお願いしましたが市長も横を向いた、というようなことでですね、最終的には教育委員の方々にお骨折りをいただいたり、市会議員が松戸市議会で声を出してくださったり、やっとできたんですけれども、そのことからしても学校を借りるということをおっしゃった方の気持ちもよくわかるんですけれども、いろいろな情報を聞きますと、立場上の問題もあったり不審者の問題等々の問題、それから飲酒の問題、そういう問題もいろいろ絡んできたからだと。最終的にはみんながたくさん集まって、それこそ130人くらいが来てくれてですね、同窓会をして、結婚式ができたんですけれども。でも、思い出に残る、本当にいい結婚式ができました。

まあ考えようだとは思いますけれども、立場立場、というものがありますんで。私たちはこういうところで結婚式という話なのですが、教育の問題だとかレクリエーションとか、等々いろいろあると思うのですが、まあ、突き詰めてものの判断はしていかないとこれからいろんなことが起きてくる問題だと思いますので。学校開放というのはせっかく空いている教室をうまく利用するという必要を考えていかなければならない問題だと思います。

安田：「開かれた学校」と言われて久しいですけれども、「開かれた学校」というものがどんなものか、もちろん、学校の施設を貸し出すことも一つ、その他に学校から皆さんへの情報発信など、いろんな「開く」があるので、まあ、一概にそれだけ、というわけには言えないのですけれども、やはり、管理職の意見がかなり大きく影響すると言っていいと思います。「空き教室」じゃなくて「余裕教室」だよと言われても、市民の方から見れば同じことですよね。空いているのなら、私なんかは、いいじゃない、貸し出しても・・・という気持ちになりますが、ここ数年の児童をとりまく悲惨な事件が逆に学校をより閉ざす原因になっている

ことは確かです。安全管理の課題をクリアできれば皆様の悩みも解決すると思うのですが。とにかく、それも学校と地域が連携して解決できるのことだと思いますので、やはり管理職の意識を耕していくしかないのでしょうか。

参加者：あの関連して。東北の片田舎なんですけれども。50年代、私が現役だったんですけれども、こういう意見がありましてですね。体育館を貸してほしい。スポーツ教室か何かですね。なかなか借りることができない。

そこで学校施設開放事業部というものを立ち上げまして、そして、各学校に、学校の人口規模、使用状況などをみて50日間～200日間の鍵管理職委託利用というものをお願いして、その鍵をお借りして、学校を開放してきておりますし、そのために学校開放運営委員会というものを作ってその地区の方々の、いちおう名士ですね、校長さんやその地区の長の方や利用する方の団体の方々が、大体10人くらいの方々の運営委員会を作っていただいて、自分たちでどういうふうに問題があるのか、ここが壊れたからといっていちいち教育委員会に言っていたり、市のほうに言うのではなくて、運営委員会でこれは直せるとか、できるものとできないものがありましたが、営繕費の一部については利用者負担というところまでみんなの意見で。

これは行政のやることと感じておりましたので、お金は出すんですけれども、100日間の鍵開放というものを条例で位置付けて、利用する側にも責任を持ってもらって、学校の運営にもある程度理解してもらう、ということです。地区の人たちが学校に協力することによって変わってくる、ということもあります。一事例として、もし、解決の方法となれば。

安田：本校でも、児童数が最も多いときは1,500人とか1,800人くらいの時もあったと聞いていますが、現在は600人弱になってしまいました。それだけ「空き教室」があるということなんですが、その部屋を「児童会室」、「研修室」、「ランチルーム」とか、愛鳥の研究モデル校だったこともあり「空の仲間たち」とかいうふうに名付けて活用しております。本校の場合、校舎が２棟あって、その１棟の１階の２部屋を校舎外からも鍵をかけられるように独立させて地域に貸し出しています。「地域交流教室」と呼んでいます。鍵の管理は学校があいている平日、月から金曜日は私が管理しています。午前、午後にそれぞれ毎日のように違うグループが借りに来ています。そのときに学校利用者だとわかる私が名札をつけてもらっております。土・日はどうしているかといいますと、市教委の社会教育課の方で管理してもらって、もし土日に使いたい場合は借りたい人が市教委に借りに行くことになっております。そういう教室の貸し出しの仕方もあるという一例です。それから体育館は、子どもたちが帰ってしまう５時以降から９時くらいまで毎日一般の団体が利用しています。土・日・祝日も８時から夜９時まで利用していただいています。この場合は団体を登録制にしてありますので、鍵もその団体に貸し出してあるので、私は一切関係なく、自由に使っていただいています。

皆さんにとっては自分たちの活動のための拠点をどこに置くかということが第一の問題であり、学校にあいているところがあるなら借りたいよ、というお気持ちなんで

すよね。根気よく学校に相談したりするのもいいかもしれません。

参加者：そうですね。本当は、学校を使う、ということは非常にメリットがあって、今盛んにやっている多世代の交流は学校が１番いいんですよ。子どももいるし、そこにお年寄りを連れて来ればいろんな生涯学習ができますよね。だから学校を使いたいんですよね。

安田：先ほど申し上げた本校の「地域交流教室」をご利用になっているグループの中にも多くの年輩の方がおられます。その中の書道のお勉強をしているグループのみなさんが毎年１月の書初め大会の折に、先生となって児童を指導してくださっています。教師も自分たちより専門的に指導してくださる方がいてくださると助かりますし、なにより子どもたちも手をとって丁寧に教えてもらえるので大変喜んでおります。それに伴い、「○○さんのおばあちゃん」だとか、「あのおじいちゃん見たことある」といったふうに地域のお年寄りの方々と知り合いになれる。また地域に戻ったときにあいさつなどの声をかけたりしあえるようになったというわけです。

あと、俳句や茶道、それから、いま音楽では日本の楽器、お琴とか太鼓とか笛とかを学習するというカリキュラムが入りましたけれども、「よかったら、そういう分野のお得意の人がいるから、声をかけてくだされば協力しますよ」と言ってくださるといった具合に交流がなされております。

豊村：もっとたくさん聞きたいことがあると思いますけれども、時間があまりありませんので、もうひと方だけ、今の学校開放とは別の質問があるとすれば、どなたかお願いします。

もしないようでしたら、私が鈴木さんに質問させていただきます。先ほどの空き教室の話と共通するところがあると思うんですけれども、空き地を使う場合にですね、花壇とかそういうものにしましたけれど、なにか制約というものはあったんですか。たとえば、別に花壇じゃなくてもっといろいろな多様な使い方があると思うのですけれども、花壇でなくてはならない、というものはあったのですか。

鈴木：それは別に。いろんな意見が出た中でできそうなことからやってみました。あとはですね、貸し農地ですか。一坪農園みたいな、そういうのをしてみたい人たちも多いから空いているところをまた会が借りてやったらどうかと、話は出てきています。いろんなやり方はあると思いますが「１年単位」が制約といえると思います。市からいつ「他の用途ができたから返してくれ」といわれるかもしれませんので。

豊村：ようするに空き教室にしても、および空き地というのはこれからもどんどん出る可能性があるんですね。それを管理していたのは元々は行政だったり、学校側だったりして、それを市民が全部に活用できるかどうかということは非常に大きな問題だと思うんですね。それをうまく活用できるのであれば、それこそまちづくり、まちの活性化につながる可能性もありますし、子どもたちの教育、それから安全の問題、いろいろと活用の範囲が広がる、ということになります。ではどうしたらよいか。先ほども気仙沼の方からもご提案をしていただいたのですけれども、ネットワークという

ものがかなり波及してきて、市民の方たちが人的ネットワークを使って協力し合いそれが団体になるかＮＰＯになるかして、活動範囲が非常に広がってきたということです。ただ、団体が行政とどういう形で関わりを持っていくか、あるいは行政が管理する体制のなかにどういうふうに団体が入り込んでいくか、まだまだこれからの問題のような気がするのです。その中でネットワークと違ってパートナーシップという考え方があるのですが、ではパートナーシップとは何かといいますと、団体間、団体と企業、あるいは行政と団体、そういった形で結びつくときに、管理や協力の関係ということではなくて、事業を委嘱する場合には責任が必ず付きまとうんですね。だからよく協定とかそういう言葉で言うのですが、そのときにやはり責任の所在というものは非常に重要で、行政がどのように任せるか、任せられた側はそれをきちんと責任を持って運用できるか、しっかりと運用ができなければなりませんから、そしてその団体自体が自立しないと、任せることはできないですね。

そういうときにパートナーシップの関係というのはこれからどういうふうに結びついていくのか、契約とか約束とか、というのはそれぞれによって違ってきていますし、いろいろな話し合いの中で作っていかなければならない。その協議の仕方も、今までそんな事例がたくさんあるわけではないのでこれから作っていかなければならないと思います。パートナーシップのあり方というのはまだ確立されたわけではないですね。そういうような感じがしました。

さっき安田さんに出していただいた空き教室の話はまさに大きな問題提起ではないかというふうに思います。

いろいろと今日は３者の方に事例を出していただきましたけれども、根底にはそういった共通点があるのではないかと思います。そこをこれから皆さんと考えて、それぞれの地域での解決策を聞かせていただきたいと思います。

どうも本日はありがとうございました。(拍手)

第４分科会「高校生と教師が考える地域参加」

聖徳大学附属高等学校
聖徳大学附属聖徳高等学校
コーディネーター　西村　美東士（聖徳大学人文学部児童学科教授）
　　花輪　茂道　（聖徳大学短期大学部総合文化学科教授）

西村：聖徳大学の西村美東士です。よろしくお願いいたします。今日は生涯学習フォーラムを開催していますが、その趣旨はこのセンターができた理由とも関係しています。わが国の少子高齢化のなかで、生涯学習の観点が非常に重要であるということから、国から多額の補助をいただき研究を進めていくため、本センターをオープンしました。その研究テーマは、「生涯学習の観点に沿って、少子社会・高齢社会で皆が生き生き暮らせるようにするにはどうしたらよいか」ということです。今日のフォーラムもその研究の一環として開きました。

特にこの第４分科会は「高校生と教師が考える社会参加」ということであり、とても重要な一環であります。大学生の皆さんも参加しています。まだ地域活動に参加していない人も来ています。これから紹介していきますが、しかし、そういう人たちが集まって、高校教師も含めてどのように地域参加とか、社会貢献とかをしていくかを検討します。

皆さんどう思われますか。地域参加とか社会参加とか社会貢献とかといわれると、「ちょっと待ってくれよ」という気がしますか。うなずいた人もいますね。そうだと思います。しかし、こう考えたらどうでしょうか。将来、周りの人たちに喜んでもらえるような自分になりたい。自分がリーダーになって皆を指導するというよりも、地域の人々に役に立ちたい。みなさんのそういう自然な気持ちを大切にしたいと思います。周りの人たちに喜んでもらえるような力を身につけてほしい。私たちはこういうつもりでおります。これならちょっとうなずいてもらえるのではないでしょうか。

では、講師と発表者のご紹介をします。先生は、花輪先生です。後で詳しくお話をしてくださいます。では、進行表をご覧いただきながら進めていきましょう。テーマは「ホタルを守る取り組み」です。

次は、聖徳大学附属高校からいらっしゃってくださった前迫先生です。後でお話をしてくださいます。

さらに、聖徳大学附属聖徳高校のボランティア部顧問の照沼先生です。サークルの取り組みについてお話をしてくださいます。そして聖徳大学附属聖徳高校の皆さん、お立ちく

ださい。後で手話ソングを披露してくれます。

次は、聖徳大学児童学科生涯学習コースの１年から４年全員です。この聖徳大学生涯学習フォーラムを支えてくれました。このあと５分程度の時間をお借りし、このフォーラムの取り組みについて、生涯学習指導者コース４年生の小池さんがお話をしてくださいます。それから、私のほうから、来年４月に新設される生涯教育文化学科が、青少年の地域参加といかに関係が深いかを説明させていただきます。

最後の 30 分くらいは、ここでたまたま出会った皆さん同士の「交流タイム」を設けようと思います。ただし、見比べあうような視線の自己紹介ではなく、この人おもしろいなと思えるような自己紹介の方法で、ぼくが進めさせていただきたいと思います。楽しくやりましょう。交流タイムまでに、自分の好きな季節と色を考えておいてください。それと関係して「私は地域の人たちとこのように関わっていきたい」ということがありましたら発表していただきます。

ちょっと例を示してみます。「私の好きな色は？」という問いかけに、他の人が「赤」「黒」と第一印象で答えます。そして、「答えは、ピンクです。そして、人々が地域を、暖かいピンクのように感じられるようにしていきたいです」と、できれば若者自身の地域への率直なイメージと結びつけて、このように答えていただきたいのです。人と人とがたがいに比べ合うような堅苦しい自己紹介ではなく、その人の良さやその人らしさがじわじわと表れるような交流にしたいと思います。

さらに、このセンターにはいろいろな年齢層の人たちが関わっていて、みな一緒になってこのセンターをよりよく運営していこうとしています。この方たちも交流ゲームに参加してもらいます。心優しい人たちばかりですから、ご安心ください。失敗してもよいのです。「変だと思われたら、もうおしまい」という世界とは違います。ぜひ、自由奔放に過ごしてください。それでは、花輪先生、お願いします。

花輪：聖徳大学総合文化学科の花輪でございます。今日はよろしくお願いいたします。この胸のゼッケンは、「メイク松戸ビューティフル」と申します。私たちは、松戸をきれいにするボランティア活動をしている団体のもので、今朝もＪＲ松戸駅の東口と西口の清掃をしてまいりました。

私の紹介は、パンフレットをご覧ください。昭和 14 年東京の日暮里生まれで、東京大空襲を２回体験しました。「メイク松戸ビューティフル」の他「(財) 松戸みどりと花の基金」、「江戸川松戸フラワーライン会員」、「国分川を守る会」会長をしております。今日は「江戸川松戸フラワーライン」の代表の榎本孝芳さんが来ておりますので、ここでご紹介いたします。

聖徳大学附属中学校と小学校の隣にある秋山の湧水池の近くで、油野文雄さんと言う方がゲンジボタルを育ててくれています。ホタルは日本のシンボルだと思います。これが滅びたら日本は絶滅するのではないかと思っています。癒しの光、神秘の光。秋山の湧水池で、６月の中旬にゲンジボタルが見られます。７月には、21 世紀の森の湧水池で、ヘイケボタルが孵りますので見に来てください。それからもう１つ、新松戸幼稚園の先生がたが、ビオトープを作り、ヘイケボタルを育てています。松戸でのほたる鑑賞はこのわずか３ヵ所ですね。自然環境が劣悪化していることの象徴だと思います。私は「国分川を守る会」に所属しています。国分川は奈良

時代に聖武天皇が国分寺を置かれた下総国分寺跡の脇を流れる川です。奈良時代の昔の県庁所在地は市川だったと推定されます。川の近くに“国分”というバス停がありまして、そこに昔の政庁の中心となる“官衙”、今の役所があったと考えられます。その隣の秋山を清掃するのが、われわれの活動の一つです。学校側で清掃活動の実務を担当してくださっている前迫先生をご紹介します。では、前迫先生から清掃活動についてお話をしていただきます。

前迫：私のほうからは、かいつまんでお話をさせていただきます。秋山にあります附属高校・中学校では、生徒が地域の皆さんと活動する団体が学校の中に３つあります。それは美化委員会、福祉委員会、そして生活委員会の３つです。中心になって活動を行なっているのは美化委員会です。国分川の愛称は春木川といいます。そこの清掃活動を中学生高校生の生徒全員で、土曜日などに１日がかりできれいにしております。ホタルのこともありまして、附属中・高校の廻りの水辺をきちんときれいにしていこうということで、みな、非常にもえています。わたしも期待しておりますが、皆さんも期待していただき、応援してください。よろしくお願いします。

花輪：ありがとうございました。このことは新聞にも取り上げられて、コアラテレビでも活動の様子がすでに放送しております。もう１つ、聖徳大学には取手市に附属中学・高校があります。取手の附属高校は、秋山の附属高校よりも早く、いろいろなボランティア活動をしておりまして、その１つに小貝川の清掃活動があります。小貝川は、昭和61年９月５日に大型の台風が来まして、川の堤防が決壊してしまいました。自然の力は強いですね。その台風後の清掃が活動の始まりです。それでは取手の附属高校から来ました照沼先生にお話をしていただきます。

照沼：皆さんこんにちは。聖徳大学附属聖徳中学・高校から参りました照沼です。今回は「高校生と教師が考える地域参加」ということなので、私はその辺に焦点をあてて、本校のボランティア活動を紹介したいと思います。現在は取手市になっていますが、合併前は北相馬郡藤代町というところにありました。総合学習の時間が創設されてから少しずつですが、中学生・高校生が以前よりも多く地域の人たちと関わりを持つようになってきたと思います。

これまでは、国語は国語、数学は数学ということで、教室の中だけの本当に小さな空間だけで生徒は学ぶということをしてきました。しかし、これからはそれだけでは不十分だということで、総合的学習の時間ができ、そのことによってお互いの交流が深まり、学び会う環境ができたような気がします。

それまでは、地域の人たちにとって学校は敷居が高い、なかなか入りづらいというイメージがあったと思いますが、これではいけないとわれわれ教員も思っていました。生徒の人間関係も、ごくごく小さな範囲の友だちとか教員との間の本当に小さな交流しかありませんでした。朝早く学校に来てから部活動を終えて家に帰ると午後10時過ぎになる子もいます。10時過ぎて食事をしてお風呂に入ったら疲れて寝てしまう。家庭のお父さん、お母さん、そして兄弟と話をするよりも、教員との関係や友だちとの関係の方が、何倍も何十倍も濃いという関係がずっと続くということです。これからの子どもたちは主権者となって、日本を支えていく存在なわけですから、はたしてそんな形で良いのだろうかと

疑問に感じていました。私は社会科の教員で、政治経済を教えていますが、いつも疑問に思っています。これからはできる限り、そういった視点を持って「自分たちのまちを作っていくんだ」という考えを持った子どもたちを育てていく必要があり、そういう教育が大事だと思っています。それにはやはり、ボランティア活動は非常に重要なポイントになってきていると思います。

私は平成８年当時の校長先生に、教員によるボランティア委員会を設置したいと提案しました。生徒の方も、生徒会の中にボランティア部、福祉委員会というように、互いにばらばらに活動をしていました。そこで、教師のボランティア委員会と生徒の活動を統合して、全校あげてボランティア活動を広めていくようにしました。この委員会は、現在は研修部に引き継がれています。

これからご説明するものは、私どもの学校が、茨城県のボランティア推進校に選ばれた際に活動状況をまとめたもの（パワーポイント）です。これを軸に話をします。

図のように、本校では様々な活動をしています。講演会の開催や、先に話をした小貝川クリーン作戦を中心とした聖徳クリーンプロジェクト21があり、老人ホームの訪問があります。私どもの学校には中学校と高校があり、高校３年生を６年生と呼んでいます。６年生を中心として老人ホーム訪問や車椅子体験などをしております。生徒側としても組織はボランティア部と福祉委員会があり、地域交流や国際交流をしています。国際交流は韓国を中心に行っており、現地の高校生との交流をしています。活動の目的や目標は、豊かな心の育成と自立の心です。それに、ボランティアに通じるもので、感謝の心を持とうというものです。自分たちが何かをしてあげたというのではなく、ボランティアを通じて何か得るものがこちら側にあるということに気づかせたいのです。

全校の活動としてその他に、まずボランティア講演会があり、今年で10回目になります。今年はスリランカの話が聞きたいという生徒側からの要望があったので、スリランカの元日本大使の奥様に来ていただき、スマトラ沖地震の惨状と現在の状況を話していただく予定です。講演会の後、ボランティア部が全校生徒に声をかけて集めた学用品と衣類を贈呈します。そして、スリランカ側から是非ぬいぐるみを送ってほしいという要望があり、集めたものを贈りました。「なぜ、ぬいぐるみか」と聞くと、スマトラ沖地震で両親を亡くした子どもたちがかなりいて、その子どもたちが夜になると寝られない。気持ちがとても不安定になって、何か心のよりどころになるものがほしいと訴えているので、いらなくなったものでもかまわないので、ぬいぐるみを送ってほしいといわれたのです。ボランティア部の生徒たちが、全校生徒にぬいぐるみを持ってきてほしいと声をかけると、約300個くらい集まり、それを講演のあと贈ることにしました。

それから、車椅子体験、アイマスク体験も年に１度行なっています。社会福祉協議会の協力を得て、毎年、学校から歩いて30分の老人ホームに行き、おじいちゃんおばあちゃんと楽しくお話をしています。初めての老人ホームでは「何をしていただけるのですか？」と必ず聞かれます。おしめをたたむことや清掃作業をお願いしたいという施設が多いようです。しかし、私は、申し訳ないですけれどもということであえてお断りをして、「生徒たちに、高齢者の人たちとふれあいをさせたいので、なるべく作業ではないお話し相手のボランティアをめざしています」と説明させていただいています。すると、

「それも嬉しいことで、いろいろ話を聞いてほしいご老人も多いので、それでお願いします」と、施設の方も理解を示してくださっています。このようにして、極力、ご老人と生徒とのふれあいを心がけています。

次に、これも毎年ですが、町から頼まれて赤い羽根募金の時は、スーパーの前で皆で立って募金活動をしています。そのほか、歳末たすけあいやユニセフなどいろいろな募金を、ボランティア部と福祉委員会が協力して行なっています。

次に藤代駅での活動です。大きな駅ではないのですが、よく見ますとかなり汚くて、タバコの吸殻のポイ捨ても多いのです。生徒たちは学期ごとに1回から2回、駅の清掃活動をしています。

これからみなさんにお見せしますのは手話ソングです。手話ソングに対しては賛否両論があります。高校生ボランティア全国大会に参加した時のことですが、講評のときに「何が面白くて手話ソングをやるのか」という質問をされました。そして、「あなた方は面白いかもしれないが、聞こえない人にとっては、何をやっているのかさっぱりわからない。自分たちだけが楽しんでいるようで、見ていてあまり良い気持ちがしない」と、はっきり言われました。私も確かにそうだと思いましたが、私たちにとっては“手話”を覚えるのはとても難しいのです。こういうふうに歌を歌いながらだと、比較的簡単に覚えることができ、楽しんでできます。健常者の人たちが「手話ってわりと身近にあるものなんだね。」と思うことによって、手話を覚えてみようかという気持ちになり、それを通じて聴覚障がい者の人たちと仲良くなれる。それを私たちは広めていくことが、結果としてお手伝いになることと思ったのです。私たちだけが楽しんで、聴覚障がい者にとってはこれ見よがしで、何をやっているのかと怒られてしまうかもしれませんが、私たちは手話の楽しさを周りに理解してもらい、そして障がい者の方とも気軽に話せる人が増えて欲しいという意味で、この活動を行っているということを理解してもらえたらありがたいと思っています。

この写真はとても楽しい交流で、障がい者の人たちと餅つきやゲームを一緒にやります。毎年町の人たちと協力して行なっています。

次の写真は、アジアの小学校へ学用品を贈るために、夜遅くまで仕分け作業をしている様子です。今まではフィリピンやラオスでしたが、今年は先にお話したように、スリランカに贈ることになっています。

次の写真は、小貝川クリーン作戦の様子です。小貝川は利根川の支流で、学校からは徒歩45分位かかります。生徒は川に着くまでの間も、道のゴミを拾いながら行き、到着をして再び流域の清掃作業をします。なぜこのような活動をするようになったかということというと、地域の人たちが随分前から小貝川の流域にフラワーカナルを作っています。なぜこれを作ったかというと、花輪先生のお話にもあったように、小貝川は暴れ川で台風などで上流から汚いゴミが流れてきます。これを綺麗にしようと思い地域の人たちが花畑を作ったのが始まりです。しかし近年高齢化が進み、世代交代をしたいと申し出があり、聖徳の全校生徒の活動として引き受けることになったのです。秋にはポピーの種を蒔き、春に花が咲きます。その後、コスモスの種を蒔き、それが秋に花を咲かせます。現在、小貝川は地域の人たちのいこいの場になっているのです。

次の写真は、小貝川の水質検査を行なっているところです。小貝川の水質は全国ワース

ト10に入るので、少しずつでもきれいにしたいと思い、このようにして毎回統計をとり、その結果を文化祭で発表します。以上が聖徳附属高校のボランティア活動です。

それでは、先ほど紹介しました手話ソングをご覧ください。

（聖徳附属高校生による手話ソングの披露）

西村：聖徳附属高校の皆さんありがとうございました。次のプログラムに入る前に、このフォーラムを手伝ってくれています、聖徳大学児童学科生涯学習指導者養成コースの皆さんをご紹介いたします。みなさん、お立ちください。次は、聖徳大学に入ったばかりの小学校教員をめざすコースの1年生が参加しています。お立ちください。それでは、このフォーラムの手伝いをしてくれている学生を代表して、小池美和子さんからお話をしていただきます。

小池：皆さんこんにちは。私は生涯学習指導者養成コース4年の小池美和子です。よろしくお願いいたします。今回このフォーラムの総括をしています。簡単に自己紹介をさせていただきます。趣味はフラダンスです。今皆さんが手話ソングをしてくれたように、フラダンスの動作にも一つ一つ意味があります。フラダンスと手話を組み合わせたようなダンスもあります。何か似たような所があるなと、みなさんの手話ソングを楽しく見させていただきました。

そして、今回のフォーラムの取り組みについてですが、生涯学習指導者養成コースの全員でスタッフをしています。今日までの準備をどのようにしてきたか話をします。組織をつくり、その総括が私で、その下に3つの「長」がおります。まず初めに会場設営の運営長に話を聞いてみましょう。

会場運営長：先生とセンターの事務局と念入りな打ち合わせをして、すべての会場の机や椅子の準備、セッティングをしました。

小池：準備から最後のごみ1つ落ちていないようにするのがこの運営グループの仕事です。次は案内警備長です。

案内警備長：当日は、駅から会場までの安全な誘導と、会場の受付と館内誘導がスムーズにいくようにしています。さわやかな笑顔に心がけています。

小池：最後に、接待案内長がいます。

接待案内長：講師の先生方にお茶を出したり、各会場までの案内をします。

小池：この3人の長の下に、1年から3年までの大勢のスタッフがいます。そして今日のフォーラムを迎えるまでに、私と3人の長が何回も集まり、先生や事務局と打ち合わせをして、決まったことを仲間の学生スタッフに伝える作業をしました。また、このフォーラムでは、「創年くらぶ」というボランティアグループが、私たち学生と一緒に手伝いをしてくださっています。「創年」というのは、40歳位からの方たちのことです。今回このフォーラムを手伝って良かったことは、学生は若いので活気があってあたりまえだけど、創年のスタッフの皆さんも学生に負けないくらい元気だったということです。大人の人は人生経験を積んでいるので、私たちも将来このようになりたいと思い、勉強させていただきました。

最後に、ボランティアについての私の考えを述べます。「何かをしてあげる」という意識でボランティアをするのではなく、今回のフォーラムのように、生涯学習指導者養成コースの学生みんなで盛り上げていこう、自分たち自身が関わっていくということは楽し

いことだという気持ちで取り組んでいます。フォーラムに自分が参加するのも勉強になるけれども、裏方として参加して自分が楽しんで、いろいろな人と交流して、自分の良い経験になっているので、これからの私たちの人生にきっと役に立つと思っています。
簡単ですがこれで私の発表を終わります。

西村：ありがとうございました。高校生の皆さん、小池さんの顔を覚えていてくださいね。質問があったら、あとでどんどん聞いてください。いま発表された小池さんの姿、かっこいいとか素敵だとか思ったのではないでしょうか。どうして素敵なのか。1年生のうちから生涯学習やボランティアの活動をしていると、3年、4年になると、人間はとても輝いてくるようです。私たち生涯学習指導者コースの教員は、単に承り型の授業を静かに聞かせるのではなく、学生が主人公となっていっしょに授業をつくりあげていこうと考えています。一般の若者たちは、ややもすると「仲間以外はみな風景」と指摘されるような閉鎖的な状況にあります。しかし、ここでの学生は、社会や地域とみずから交流し、結びつくことによっていきいきと学生生活を送っています。

来年度から、新しく生涯教育文化学科ができます。社会がいま求めている若者、そして大人や現実社会で自己を発揮できる若者に責任をもって仕上げて卒業させる学科ですので、ぜひみなさんもわれわれの仲間に加わることをご検討ください。

それでは、交流タイムを始めましょう。
（好きな季節や色を当て合う「第一印象ゲーム」をとおした参加者の自己紹介による交流タイム）

全体会「女性のチャレンジ支援をめぐって」

● 名取　はにわ（内閣府男女共同参画局長）

名取：今ご紹介を頂きました、内閣府男女共同参画局長の名取はにわと申します。どうぞよろしくお願い致します。

前々から松戸に素敵なビルが建って、ビルごと生涯学習センターになっているというお話を伺っておりまして、一度来たいと思っておりました。今日このようなすばらしい会場で講演させて頂くことを大変光栄に思っています。

資料がお手元にあると思いますが、一つは「女性のチャレンジ支援について」と、もう一つはでございます。こちらで用意していただいた聖徳大学生涯学習フォーラムの資料がございますが、その一番後ろに「女性のチャレンジ支援をめぐって」という私のレジュメがございます。皆様には机のないところで誠に恐縮ではありますが、資料を使いながらお話をさせていただきたいと思います。

〈女性が力を発揮していない日本〉

まずは「男女共同参画社会の実現を目指して」を使いながら、わが国における男女共同参画の現状をご説明いたします。

４ページをご覧下さい。「（２）政策・方針決定過程への女性の参画」とあり、「人間開発に関する指標の国際比較」というのがあります。

表 6-1　人間開発に関する指標の国際比較

(1) HDI(人間開発指数) (2) GEM（ジェンダー・エンパワーメント指数）

順位	国　名	HDI値	順位	国　名	GEM値
1	ノルウェー	0.956	1	ノルウェー	0.908
2	スウェーデン	0.946	2	スウェーデン	0.854
3	オーストラリア	0.946	3	デンマーク	0.847
4	カナダ	0.943	4	フィンランド	0.820
5	オランダ	0.942	5	オランダ	0.817
6	ベルギー	0.942	6	アイスランド	0.816
7	アイスランド	0.941	7	ベルギー	0.808
8	米国	0.939	8	オーストラリア	0.806
9	日本	0.938	9	ドイツ	0.804
10	アイルランド	0.936	10	カナダ	0.787
11	スイス	0.936	11	ニュージーランド	0.772
12	英国	0.936	12	スイス	0.771
13	フィンランド	0.935	13	オーストリア	0.770
14	オーストリア	0.934	14	米国	0.769
15	ルクセンブルク	0.933	15	スペイン	0.716
16	フランス	0.932	16	アイルランド	0.710
17	デンマーク	0.932	17	バハマ	0.699
18	ニュージーランド	0.926	18	英国	0.698
19	ドイツ	0.925	19	コスタリカ	0.664
20	スペイン	0.922	20	シンガポール	0.648
21	イタリア	0.920	21	アルゼンチン	0.645
22	イスラエル	0.908	22	トリニダード・トバゴ	0.644
23	香港（中国）	0.903	23	ポルトガル	0.644
24	ギリシャ	0.902	24	バルバドス	0.634
25	シンガポール	0.902	25	イスラエル	0.614
26	ポルトガル	0.897	26	スロバキア	0.607
27	スロベニア	0.895	27	ポーランド	0.606
28	韓国	0.888	28	エストニア	0.592
29	バルバドス	0.888	29	ラトビア	0.591
30	キプロス	0.883	30	チェコ共和国	0.586
31	マルタ	0.875	31	スロベニア	0.584
32	チェコ共和国	0.868	32	イタリア	0.583
33	ブルネイ	0.867	33	ナミビア	0.572
34	アルゼンチン	0.853	34	メキシコ	0.563
35	セイシェル	0.853	35	ボツワナ	0.562
36	エストニア	0.853	36	クロアチア	0.560
37	ポーランド	0.850	37	フィリピン	0.542
38	ハンガリー	0.848	38	日本	0.531
39	セントクリストファー・ネイビス	0.844	39	ハンガリー	0.529
40	バーレーン	0.843	40	ドミニカ共和国	0.527
41	リトアニア	0.842	41	ボリビア	0.524
42	スロバキア	0.842	42	ペルー	0.524
43	チリ	0.839	43	ギリシャ	0.523
44	クウェート	0.838	44	マレーシア	0.519
45	コスタリカ	0.834	45	マケドニア	0.517

出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

ＨＤＩ（人間開発指数）では、日本は第９位です。ＨＤＩ（人間開発指数）をみていた

だきますと、１位からノルウェー、スウェーデン、オーストラリア、カナダ、オランダ、ベルギー、アイルランド、米国と来て、９位日本と、先進国が軒並み並んでおります。日本は 177 か国中９位です。この指数は、「長寿をまっとうできる健康的な生活」「教育」および「人間らしい生活」という人間開発の３つの側面を簡略化した指数です。具体的には、平均寿命、教育水準（成人識字率および就学率）、調整済み１人当たり国民所得を用いて算出しています。

次にＧＥＭ（ジェンダーエンパワーメント指数）では、日本は、78 か国中第 38 位と、ＨＤＩから大きく順位を下げております。先進国でこんなに低い所に留まっているのは、日本をおいて他にありません。ＧＥＭは、女性が政治経済活動に参画できるかどうかを図る指数であり、日本の 38 位は、女性があまり活用されていないことを表しております。具体的には、国会議員に占める女性の割

合、専門職・技術職に占める女性の割合、管理職に占める女性の割合および男女の推定所得を用いて計算しています。

わが国の順位が低い訳は、まず、国会議員が占める女性の比率が少ないからです。このところ小選挙区の導入等で、最近２回は、選挙するたびに女性の国会議員が少なくなっております。

次に所得ですが、５ページの「給与階級別給与所得者の構成割合」をご覧下さい。

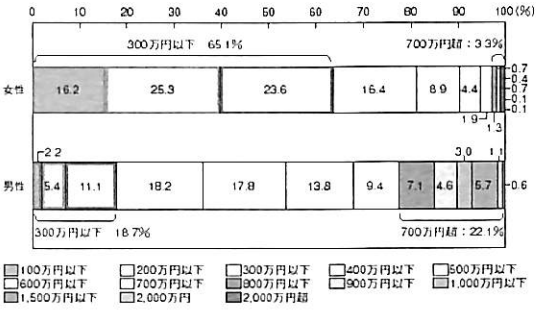


図 6-1　給与階級別給与所得者の構成割合

出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

１年間を通して勤務と給与所得をみてみると、女性では、300 万円以下は 63.8%と３分の２を占めますが、」男性の 300 万円以下は 17.8%です。一方、700 万円を超える女性は 3.1%ですが、男性は 22.5%もいます。これだけ顕著な差があります。特に女性は 100 万円以下が 15.6%です。こちらには、恐らく配偶者手当や年金問題等による、働き控えの人が入っていると思いますが、いずれにしても、男女間にかなりの所得格差があります。

同じ５ページに「管理職に占める女性の割合」があります。

表 6-2　管理職に占める女性の割合

	管理的職業従事者	
		国家公務員管理職
アメリカ	45.9%	23.1%
フランス	——	19.3
ドイツ	34.5	9.5
スウェーデン	30.5	——
日本	10.1	1.5

（注）国により測定方法は異なる。

出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

管理的職業従事者に占める女性の割合は、アメリカは 45.9%と半分近くに達しておりま

す。ドイツ・スウェーデンも３割を越しています。日本はまだ１割にも達していません。国家公務員管理職に占める女性の割合は、わが国では1.3%に留まっております。

日本も少しずつですが女性の社会参画は進んでいるのですが、世界の国々のスピードに付いていけないというのが実情です。

日本はＨＤＩでは９位なのだからいいではないか、なぜＧＥＭの低さを問題にするのか、というお考えがあるかもしれませんが、これから少子化が進み、人口減少社会に突入するに当たって、もはや男性だけに頼るわけにはいきません。女性ももっと社会参画して、男性と共に社会を支えなくては、日本の将来はないと思います。

〈女性の学歴も先進国最低レベル〉

さて、教育分野はどうでしょうか。５ページに「学校種類別進学率の推移」をご覧下さい。

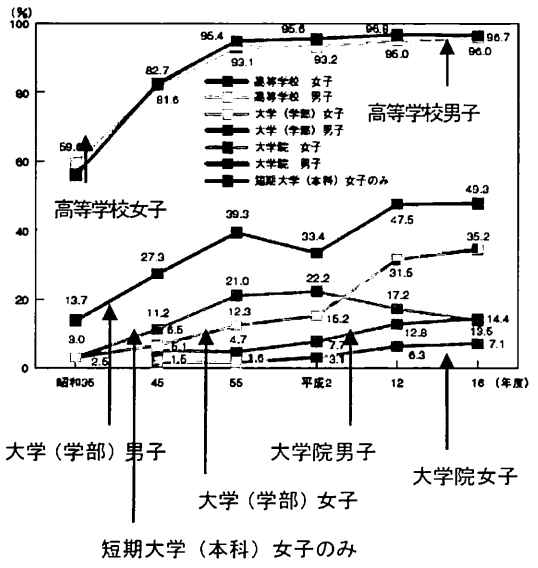


図 6-2　学校種類別進学率の推移
出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

高校の進学率は男女ともほぼ同じです。短大は女性がほとんどですが、最近企業があまり採用しないこともあり減少しております。４年生大学進学を見ると、男性が 47.8%、女性が 34.4%でまだ格差があります。大学院になると男性13.9%女性が6.8%。まだダブルスコア以上の差があります。確かに女性の高学歴化は徐々に進んでいます。しかしながら、ＯＥＣＤ諸国における学士、修士、それ以上に占める女性比率が最下位であるのはご存知でしょうか。すでにＯＥＣＤの平均は、学士の 55%が女性なのです。修士課程も51%が平均値です。どうして先進諸国の女性の学歴が高いのかというと、どこの国でも女性の社会進出は厳しいからだと言われています。せめて女性たちは、学歴をつけて世の中に乗り出さないと実力を発揮しにくいと、一生懸命なのだと伺っております。

〈就業分野における課題〉

次に６ページ「女性の年齢階級別潜在的労働力率」をご覧ください。

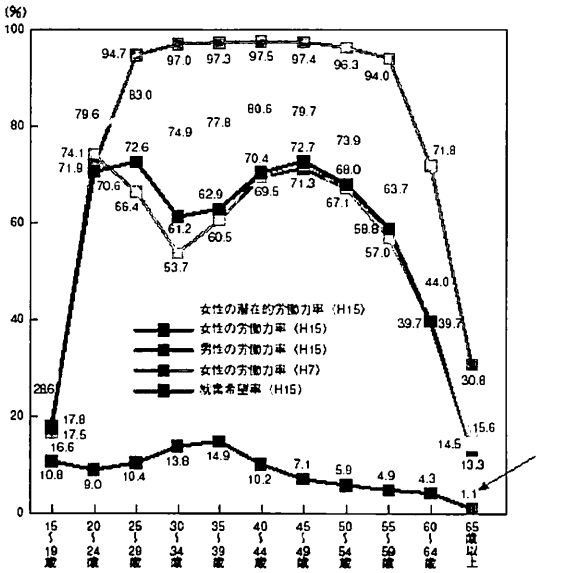


図 6-3　女性の年齢階級別潜在的労働力率
出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

１番上にあるU字を逆さにした線が、日本の男性の労働力率です。日本の男性は学校を出ますとそのほとんどが定年まで働き続けて

います。日本の男性は先進国のどの国よりも働いています。

次は下から２番目のM字の線を見てください。日本の女性に労働力率です。日本の女性は学校を出て働きはじめますけれども、日本の女性たちは、子どもが生まれますと７割の人が職を去るので、30 代前半でガクっと落ち込みます。それから 40 代の後半まで少しずつ上昇します。この形から、日本の女性労働力率はM字型カーブである、と言います。

１番下のベージュ色の低い山をご覧ください。これは就業希望者で、就業の希望がありながら実現していない女性の比率です。ここには、専業主婦も多く入っており、全部で 400 万人になります。特に問題なのは、日本では高学歴の女性ほど再就職をしていないのです。かなりの国費を投入して大学や大学院教育を行なっていますが、高学歴の女性達がいざ再就職しようとしたとき、スーパーのレジ打ちなど賃金の安いパートしか就職口がなければ、無理して仕事をすることはない、と引いてしまいます。これは大変もったいないことです。ご本人にとりましても、日本にとりましても。

ちなみに専業主婦に満足している女性は、この 400 万人の中に入っておりません。

この 400 万人が、仮に職に就いたとすると、女性の労働力率が上から２つ目の助成の潜在的労働力率の線まで上昇します。これから少子化が進み、労働力不足になるでしょうから、その時にうまく、400 万人の女性たちが再就職できるように支援していきたいと考えています。

同じ６ページの「国際比較」を見ますと、

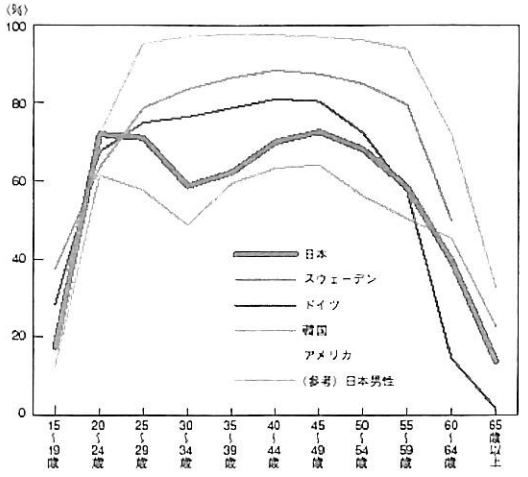


図 6-4　国際比較

出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

先進諸国、例えば、ドイツ、アメリカ、スウェーデンの女性の労働力率は日本の男性のように逆U字型です。日本は女性があまり働いていない国であることがお分かりいただけると思います。日本よりもM字が強いのは韓国になっております。

〈固定的分担意識が強い日本〉

働く女性は増えていますし、仕事を希望する女性も 400 万人いますが、家事育児を誰がやっているかということが次の課題です。

３ページの上の「固定的性別役割分担意識（夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである）」を見ていただきますと、日本は、この考えに賛成、反対の割合がほぼ半々です。

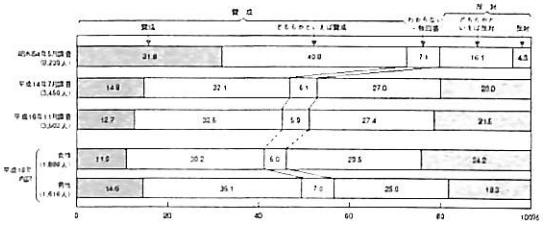


図 6-5　固定的性別役割分担意識

出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

韓国、アメリカ、スウェーデン、ドイツは「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであ

る」という考えに反対の人々が多数を占めています。韓国は儒教の国だから性別固定的役割分担意識が強いという印象があるのですが、実際は日本よりはるかに賛成者が少ないのです。韓国の男性は21.2%、女性は13.2%しか賛成者がいないのです。

次に「一般的に女性が職業を持つことに対する意識変化」をご覧下さい。

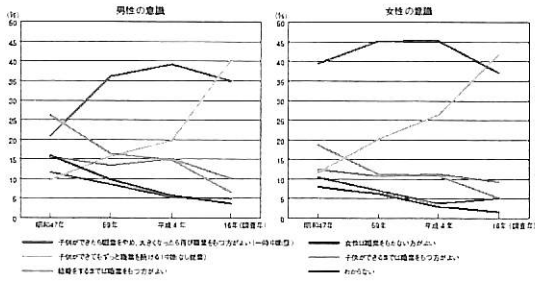


図 6-6　一般的に女性が職業を持つことに対する意識変化
出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

前回の意識調査から日本の男性は、「女性は子どもができてもずっと仕事を続ける」が、「女性は子どもができたら職業をやめ、大きくなったら再び職業を持つほうがよい」を上回り、平成16年調査では、さらに上昇しています。

これに対して、女性は、平成16年調査で男性同様、「女性は子どもができてもずっと仕事を続ける」が最も多くなりました。

つまり、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」けれど、「女性は子供ができてもずっと仕事を続ける」のが良いというように国民の意識が変わってきました。その結果、女性は仕事をしても、家庭を守るべきということになります。

9ページを見て頂きますと、「夫婦の生活時間」というのがあります。

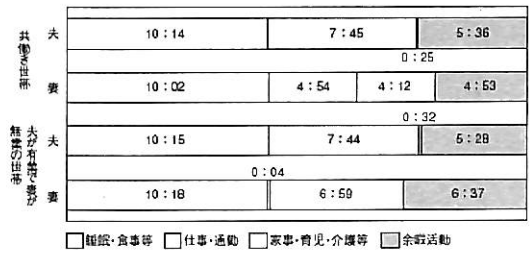


図 6-7　夫婦の生活時間
出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

上は共働きの世帯、下は夫が有業で妻が無業の世帯です。男性（夫）は妻が働いていても25分、働いていなくても32分しか、家事・育児・介護をしていないのです。共働きの妻は、家事も育児も介護も引き受け、その上仕事をしていることがわかります。

「育児期にある夫婦の育児等の時間の各国比較」をみますと、小さい子どものいる家庭で、日本の夫は、先進諸国に比べて家事・育児を非常に少ない時間しかやっていないことがわかります。

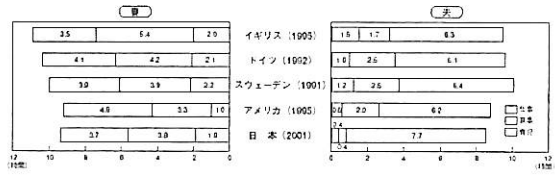
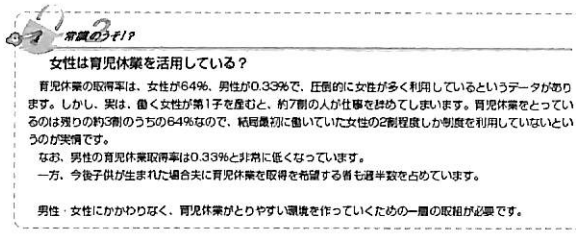


図 6-8　育児期にある夫婦の育児等の時間の各国比較
出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

最近の結婚難と言われていますが、コラム「家事・育児への協力は結婚相手の重要な条件」をご覧下さい。



女性たちは何を結婚相手に求めているかについて、平成９年と平成 14 年に調査したところ、人柄は No. 1 ですが、平成 14 年で大きく上回っているのは「家事・育児に対する能力や姿勢」です。次いで妻が仕事をする事についての理解が続いています。男性の家事・育児への協力は、男女共同参画です。世の中の男性たちがその辺がまだ追いついていないことも、非婚化の原因の一つではないかといわれています。

〈少子化と男女共同参画〉

日本では、女性が高学歴になって社会に出たのが少子化の原因だといわれることがあります。８ページの「女性の労働力率と出生率の国際比較」をご覧下さい。

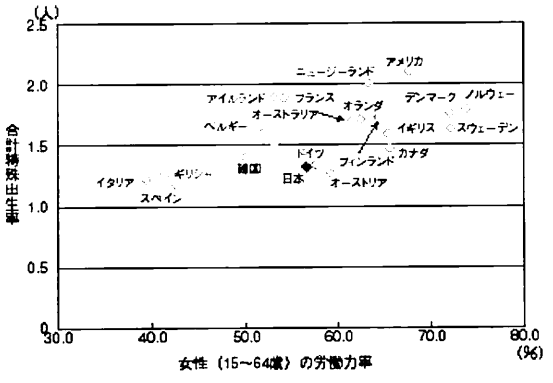


図 6-10　女性の労働力率と出生率の国際比較

出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

女性の労働力率が高いほど子どもが生まれているという傾向がみられます。日本は女性の労働力率は高くなく、子供も生まれていないとわかります。

ノルウェー、スウェーデン、フィンランド等は女性の労働力率は高く、男性も家庭に参画しています。父親の育児休業も盛んです。仕事と家庭とのバランスが取れているのです。これは小さな子どもを持っている家庭だけではなく、人々の仕事と人生のバランスがとれ、多様な生き方が認められるような社会では子供が生まれると言われています。

８ページの１番下「母の第１子出産１年前の就業状況別にみた現在の就業状況」をご覧いただきますと、

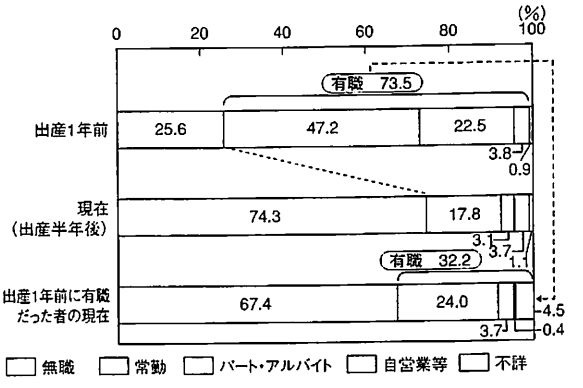


図 6-11　母の第１子出産１年前の就業状況別にみた現在の就業状況

出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

第１子出産の１年前に仕事を持っている女性の７割近くの人が出産半年後には仕事を辞めていることが分ります。ですから女性の育児休業取得率が７割になったと言っても、小数の勤め続けている女性の中の７割ということになります。出産１年前に仕事を持っていた女性の２割程度が育児休業を取得しているということになります。このように、女性が子どもを産みますと、子どもか仕事かと迫られてしまうようなところがあります。また、女性は、一度仕事を離れますと、なかなか正社員にはなれません。

もう一つ申し上げたいのは、日本の男女間賃金格差です。日本の男性一般労働者の１時間当たり平均所定内給与水準を 100 としますと、女性の一般労働者は平成 16 年で 68.8 と７割に達していません。先進諸国の中でも非常に大きな賃金格差があります。さらに女性パート労働者となりますと、男性一般労働者の 45.2 と５割に達していません。このように、男女の一般労働者間とパート労働者と

二重の賃金格差があります。パート労働者の時間当たりの賃金の格差について、昨年ノルウェーにおいて、あきれられました。パートは時間が少ないので賃金が少ないから問題なのにその上時間単位の格差まであるの？と。日本では、再就職するとパートが多くなり、大きく生涯賃金が減ってしまうのです。年金に影響もします。

最近、家庭に関わりたいと思う若い男性は増えておりますが、30 代前半の男性の 4 人に 1 人は週 60 時間以上働いています。

私たちは、男女共同参画こそ、まさに少子化対策に必するのではないかと考えております。7 ページの上「出生数及び合計特殊出生率の推移」をご覧下さい。

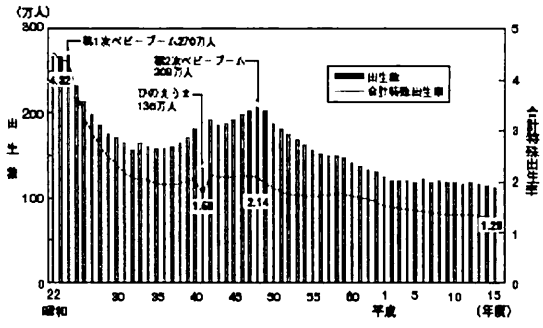


図 6-12　出生数及び合計特殊出生率の推移
出所：内閣府男女共同参画局（2005.1）

年々、出生率が低下し、子どもの数が少なくなってきています。昭和 22 年の第 1 次ベビーブームには 270 万人ほども生まれていたのに、平成 15 年には、その半分以下というような状況になっています。ベビーブームの世代がちょうど社会に出る時は、最も専業主婦が 1 番多かった時代です。労働市場は男性だけを受け入れ、女性はせいぜい補助職でした。しかしながら平成 15 年生まれが世の中に出る頃に、男性だけに期待するのは無理と言うものです。ベビーブーム時代の男性の半分もいないのですから。人口的には、否が応でも女性も人材開発し、社会を支えるしかないのです。そして、男性もっと家庭参画をしてもらい、女性が働きながら。子どもを産み育てやすいような環境整備をしようというわけです。

〈男女共同参画社会基本法〉

日本は平成 11 年に、男女共同参画社会基本法が成立しましたが、これにより、少子高齢化社会に向けて、男性と女性が知恵と力を合わせて、より良い社会と家庭を作っていこうとしております。

10 ページをご覧ください。男女共同参画社会基本法のごく簡単な説明があります。5 つの基本理念を挙げています。①男女の人権の尊重、男女差別をなくし、男性も女性もひとりの人間としての能力を発揮できる機会を確保する必要があります。②社会における制度・慣行について、固定的な性別役割分担にとらわれず、男女が様々に活動できるように配慮していこうというものです。③政策方針決定過程にもっと女性が参画していこうとするものです。④家庭生活において、男女が対等な家族の構成員として互いに協力し、社会の支援も受けて、家族の役割を果たしながら、仕事や学習や地域活動などができるようにしようとします。⑤国際的にも協調しながら男女共同参画を進めて行きます。

国、地方公共団体は、積極的階段措置（ポジティブ・アクション）を、男女共同参画基本計画等に盛り込むなど、計画的に施策を進めることとしています。

〈女性のチャレンジ支援策〉

ピンクのパンフレット「女性のチャレンジ支援策について」をご覧下さい。1 ページを開けていただきますと、「1 女性が活躍できるようポジティブ・アクションを推進」とあります。国連は非常に女性の参画については進

んでおりまして、既に1990年に30%を目標としており、今ではあらゆるレベルで50%を目標にしておりますが。ようやく日本も2020年までにはあらゆる分野で指導的地位を占める割合を30%にしようと提案しています。そのためにも活躍する女性の層を厚くしていかないといけません。このことは少子高齢化の日本において人材の層を厚くするために是非とも必要なことです。

２ページにあるように「基本的な考え方」として「３つのチャレンジ」を掲げています。上へのチャレンジは今お話したとおりです。横のチャレンジは、女性たちがなかなか参画しなかった科学技術などにどんどんチャレンジしていこうというものです。再チャレンジは、400万人の女性が仕事に就きたいと希望しながらかなわない現実があります。中には、起業したい方、ＮＰＯをやりたい女性もいます。様々な再チャレンジを支援していきたいと思います。

３ページに「ポジティブ・アクションの推進」というのがあります。日本の場合、女性たちがなかなか社会に参画しにくい。これは別に国会議員だけではありません。県議会議員の女性の数がゼロのところが２つあります。まして市町村になりますと半分近くの市町村に女性議員がいないのです。村議会議員に一人女性を出すことは、国会議員に１人女性を出すよりよっぽど難しいといわれています。自治会長さんも老人会長も男性が大多数でありますし、ＰＴＡ会長の８割が男性と聞いております。

これから多様な知恵を集め、社会を活性化しようとするとき、男性ばかりでは新しい発想が出にくいと言われております。多様化といいましても日本の場合は、移民国家ではありませんから、高齢者・障がい者・若者・男性・女性さまざまな方々の知恵と力を結集しようというのが一つの目指す方向として見えてくるわけです。その中でも日本の女性は様々な潜在的力を秘めています。

５ページに「いつでも、どこでも、誰でもチャレンジできるチャレンジ・ネットワーク形成の促進」とあります。今まで内閣府はともすると、中央で旗振りばかりしていたのですけれども、最近は、もうちょっと皆様の身近なところに届くような旗振りをしたいなと考えております。最近、女性センター、男女共同参画センターが、すべての県にありますし、市等にも作っていただいております。そこが様々な女性のネットワークの拠点になっていただきたいということです。起業したい、再チャレンジしたい、働きたい、育児介護で困っている、実力をつけたい、まちづくりに参加したい、社会貢献したい、国際貢献したい、そういうような女性達を支援することに一役買っていただきたいと思っています。

〈女性のチャレンジ・ネットワーク作り〉

７ページに16年度実施したものについて紹介しております。埼玉県の男女共同参画センターでは、女性のチャレンジのためのネットワークづくりをやっていただきました。再就職したいと思う女性も、しばらく育児で家に居ますとなかなか外で働く自信もつかないし、いったい自分が何に向いているのかちょっと戸惑ってしまうんですね。そのような女性が相談するＮＰＯができまして、一方では企業にどんな人材が欲しいか聞いて、その橋渡しをするのだそうです。企業からＩＴ技術をもう少し身につけた方が欲しいという話になるとＩＴ講習もしてくれて、知識が身についたところで斡旋もしてくれる。このＮＰＯが女性の再就職の実績を上げたと伺いました。

京都府では、ジョブカフェと京都府男女共

同参画センターが連携しまして、どちらに相談に来た女性も参画センターが行っている講座に斡旋し、就職斡旋もやっております。

熊本ネットワークパレア、ここはワンストップサービスをしております。ここは大きな一流デパートの上に開設しており、ＮＰＯをやりたい、パートをやりたいというさまざまなニーズを抱えた女性が相談をしますと、それに合わせたコーディネートしているということをしているということで、利用者も多いと聞いております。

それぞれの所で、こんなふうにして再チャレンジしましたというよう、女性のモデル、女性の事例集を掲げたサイトを開設していただいております。今年も神奈川県、静岡県、等とタイアップしてやっております。

９ページに「チャレンジ・サイト」がでておりますが、内閣府においてサイトを掲げております。見ていただけますと情報が提供されることになっております。

〈チャレンジ賞〉

10 ページにありますように、内閣府はチャレンジ賞を授与しております。ここには昨年受けられた方が載っております。例えばチャレンジ大賞をお取りになった惣万（そうまん）さんは、“「富山型」デイサービス”というものをなさいました。惣万さんは看護師だったのですけれども、仲間の女性達と退職金を使って家を建てて、そこに高齢者の方と、障がい者の方と、幼い子どもたちが自由に来て、過ごせるようにしました。それまでは高齢者は高齢者、障がい者は障がい者、子どもは子どもという、別々の施設はありましたが。これを一緒にしたというのが「富山型」なんです。そしてやってみましたところ、子どもが「ギャーッ」と泣くと、認知症のお年寄りがふっとそちらのほうを見られて、心配そうな顔をされる。そして子どもが居ることでお年寄りが元気になれる。障がい者の方々と子どもが接することによって本当に仲良くなれるということで、非常に居心地が良い所を作っておられました。富山からこのようなデイサービスを特区ということで申請しましたところ、厚生労働省がこれは特区ではなく、全国区にしようというようなことで、制度を変えるきっかけにもなったと聞きました。

高橋さん、タバコを粋がって吸ってしまう、特に子どもの方が依存症になりやすいそうでして、それを断ち切るための、禁煙外来の取組みをしておられます。また、インターネットで禁煙マラソンをやっておられます。タバコをやめて苦しい時にパソコンに打ち込むと、皆が励ましてくれるんですね。それでタバコをやめられる。

今年の受賞者の中にも大変ユニークな方々がおりまして、その中でも島根県萩の会は、表彰を受けたのは 81 歳のおばあちゃんでした。確か 70 歳以上の高齢者が、わがままばあちゃんの民宿を作って、孫が東京から遊びに来ているその間は民宿はお休みです。民宿をやる側のわがままを通しながら、都会の方々をもてなして、それで千客万来になって、今や地域づくりの要となっています。

〈女子学生・生徒のキャリア形成支援キャンペーン〉

今年度は何をやっているかというと「女子学生・生徒のキャリア形成支援キャンペーン」です。先ほど日本の女性学士は先進諸国で少ない率であると申しましたけれど、とりわけ理工系に進む方々が少ないのです。こちらに私たちが昨年度作りましたビデオ「広がる未来！私が選ぶ」があります。女子高校生が自分たちのＨＰを作る時に、生物物理化学者の黒田玲子さん、それから宮板金職人の大熊貴子さん、コンピューターグラフィックス・クリエーターの南真紀子さん、医学の高

橋裕子さん、弁護士の林陽子さんを尋ねて行きます。事実に基づいたビデオで、各地の女性センターにお送りしております。こちらにも寄付しておきますのでご覧になっていただきたいと思います。

今年度、科学技術に進む女性たちの支援をしております。

それから、若者自立挑戦プランの一環としてジョブカフェと連携しております。

また、今年は、女性が輝く地域づくりを始めました。これは、これから女性が中心となってまちづくりをする所を応援しようということで、まちづくりをする過程をビデオに撮ろうとするものです。現在、滋賀県・京都府・熊本県の３つの地域を選んで実施予定をしております。

それから、チャレンジ・ネットワークを作る時には、コーディネーターが大切な業務になりますので、コーディネーターやアドバイザーを養成するため講座を独立行政法人国立教育婦人会館に委嘱することとしております。

このように女性たちがさまざまな所にチャレンジできるように、そしてこのことによって地域が活気づき男性たちも元気になっていただき、そして社会が活気づくように努力して参りますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。ちょうど時間となりましたのでこれで終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

清水：ありがとうございました。先生におかれましては、女性のチャレンジ支援を男女共同参画の社会づくりについての題目でお話をいただきましたが、その中で我が国に於ける現状・世界の現状に対して、どのような課題があるのかにつきまして、非常にわかりやすい事例をまじえたお話をいただきました。せっかくの機会なので先生に質問がございましたら、よろしくお願いします。

質問者：２つ質問させていただき、１つはお願いですが、今年の４月から、次世代支援法が施行されまして、各都道府県それぞれ企業の方々がいろいろな試作を出していると思いますが、名取さんの方で、これはおもしろいという事例がありましたら、例えば男性育児休業 10%取らせるとか、数値目標を出して企業とかがありましたら教えて欲しいです。もう１つはジェンダーエンパワーメントで 2004 年という形で数字が出ていまして、日本は 38 位。男女雇用均等法が出来まして 20 年経ちましたが、均等法が果たして実行性があるのか、特に企業において実効性があるのか、極端な言い方をすると、絵に描いた餅にまだ過ぎないかという印象が私自身にあります。最後にお願いですが、埼玉県がうまくフォーラムが出来たということは、昭和女子大の坂東真理子先生がおられたのかなと思うんですが。千葉県はまだまだ保守的な地盤であり、知事は女性ですが、女性参画が遅れていますので、是非千葉に来ていただき、男女共同の推進をして頂きたいと思います。よろしくお願いします。

名取：次世代の育成法は厚生労働省でございますので、申し込みは内閣府にきておりませんが、当局は男性の育児休業 100%を目指しております。現在３人目が取っております。いずれも数ヶ月ではございますが、うち２人は２人目のお子さんが生まれる時に育児休業を取ってくださいました。ご存知のとおり２人目のお子さんが生まれる時に、最初のお子さんはすごく動揺します。お母さんが病院に行ったりするときに、お父さんがガチッと受け止めてくれるので、お母さんがものすご

く安心して子どもが産めますし、良いお兄ちゃん・お姉ちゃんになると聞いています。私どもは、代替要員とかいろいろ大変ですけれども、やり続けたいと思っています。男性の若い優秀な方々は、頭で考えるんですね。それが赤ちゃんという自分の儘にならないもの、まったく合理性のないものを数ヶ月扱いますと、物凄く人間の幅が広がり、相手の立場に立てるようになります。それに、職場に帰って来たときの笑顔と、彼の家庭が今後すばらしい家庭になられるんだろうと思うとやはり100%目指したいと思っています。

雇用機会均等法についてですが、ＧＥＭで日本は38位ですが、これは各国の相対評価なんです。日本も以前より頑張っているんですが、他の国の方がもっと頑張っているんです。もし雇用機会均等法がなかったら、日本は38位には絶対入っていなかったと思います。非常に効果があったが日本の場合、他の国より進み方が非常に遅いということが分かります。

千葉県のことですが、私が何か出来ることがありましたらお申し付けくださいませ。できる限り応援したいと思います。堂本知事も男女共同参画を推進しようと思っていると思いますので、是非千葉県民の皆様も応援していただきたいと思います。ありがとうございました。

資　　料

学術フロンティア推進事業研究大会

第7回 聖徳大学 生涯学習フォーラム

生涯学習の観点から 地域の活性化を考える

日　　時	平成17年6月26日（日）　10：20 ～ 16：30
場　　所	聖徳大学生涯学習社会貢献センター（10号館）
主　　催	聖徳大学　生涯学習研究所
後　　援	全国生涯学習市町村協議会　全国生涯学習まちづくり研究会 特定非営利活動法人全国生涯学習まちづくり協会 千葉県教育委員会　松戸市教育委員会　教育新聞社
参加対象	一般市民　教育行政担当者　自治体生涯学習推進担当者 社会教育関係団体関係者　学校教育関係者　PTA関係者 まちづくりボランティア　学生　など

日程・内容

9:30……受　付

10:20……開会式（会場14階）
- ・開会の挨拶　　鬼島　康宏（聖徳大学　学長特別補佐）
- ・開会の挨拶　　清水　英男（聖徳大学　児童学科教授）

10:40……シンポジウム「地域にチャレンジする女性」（会場14階）
- ・谷口　郁子（イムノエイト株式会社　代表取締役社長）
- ・杉本　由子（株式会社芳翠園・株式会社老松園　代表取締役社長）
- ・長江　曜子（聖徳大学短期大学部教授・松戸商工会議所女性会副会長）
- ・小川　誠子（國學院大學 非常勤講師）
- ・コーディネーター　福留　強（聖徳大学生涯学習研究所所長・児童学科教授）

12:00……昼　食

13:30～15:00……課題研究「子ども・女性・創年と地域ネットワーク形成」（分科会）

第1分科会　「子どもの環境と地域の課題」（会場7階）
- 研究発表　塩　美佐枝（聖徳大学　児童学科教授）
- 研究発表　西　智子（聖徳大学　社会福祉学科助教授）
- 研究発表　森川　文子（聖徳大学　短期大学部保育科助教授）
- コーディネーター　村田　光子（聖徳大学　児童学科助教授）

第2分科会　「創年の学習課題と地域への貢献」（会場14階）
- 発　表　松澤　利行（財団法人やしお生涯学習まちづくり財団　常任理事）
- 事　例　蓮井　昌雄（NPO全日本健康倶楽部　会長（CEO））
- 事　例　松山　明子（新居浜おもちゃ図書館きしゃポッポ代表）
- コーディネーター　齊藤　ゆか（聖徳大学　生涯学習研究所講師）

第3分科会　「市民が主役のまちづくりの現状と課題」（会場7階）
- 発　表　安田いく代（我孫子市立第一小学校　教頭）
- 事　例　真壁　静夫（まちづくりコーディネーター）
- 事　例　鈴木　洋子（住みよい幕張を考える会・会長）
- コーディネーター　豊村　泰彦（教育新聞社編集局報道部部長 NPO法人全国生涯学習まちづくり協会理事）

第4分科会　「高校生と教師が考える地域参加」（会場12階）
- ①高校生ボランティア活動部
  聖徳大学付属聖徳高校（取手）・聖徳大学附属高校（秋山）・埼玉県松伏高校　ほか
- ②大学の地域活動
  コーディネーター　西村美東士（聖徳大学　児童学科教授）
  花輪　茂道（聖徳大学　短期大学部総合文化学科教授）

15:15～16:00……全体会「女性のチャレンジ支援をめぐって」（会場14階）
名取はにわ（内閣府男女共同参画局長）

16:10～16:30……特別公演（会場14階）
- ◇オペラ歌曲から　　小泉　恵子（声楽家・聖徳大学　音楽文化学科助教授）
- ◇踊り　よさこいソーラン　　生涯学習研究同好会　リリーズ

16:30……閉会

※なお、一部変更になる場合がございます。ご了承ください。

シンポジウム「地域にチャレンジする女性」

谷口　郁子
（イムノエイト株式会社　代表取締役社長）

共立薬科大学卒業。89年、調剤薬局と介護支援事業所を展開するイムノエイト(株)を設立。93年イムノコーポレーションUSAを設立。02年「世界優秀女性起業家賞」を受賞。04年にMSJ（株）（メディスショップ・ジャパン）出資設立。また、文部科学省の科学技術・学術審議会基本計画特別委員に就任。著書に「あなたはどんな「老い」を生きたいですか?」（アートデイズ社）

杉本　由子
（株式会社　芳翠園・株式会社　老松園　代表取締役　社長）

54年、三重県松坂市出身。青山学院大学卒業。現在、RI第2752地区広報委員会副委員長。内閣府男女共同参画連携推進会議委員、東京商工会議所目黒支部・商業副分科会会長、国連支援協会やNPO関連理事などを務める。

長江　曜子
（聖徳大学短期大学部教授・松戸商工会議所女性会副会長）

昭和28年生まれ、松戸育ち。明治大学大学院博後期課程修了。都立八柱霊園の石材業三代目社長。日本近代文学専攻、墓地行政比較研究。地元、松戸商工会議所女性会副会長。松戸、鎌ヶ谷市男女共同参画プラン議長等歴任。

小川　誠子
（國學院大學非常勤講師）

89年日本航空（国際線客室乗務員）へ入社。98年東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。東洋大学文学部教育学科助手、ブリティッシュ・コロンビア大学教育学部客員研究員を経て04年帰国。主な研究テーマは職業生活と生涯学習、ボランティア活動における自己形成、少子問題と子育て支援。著書「生涯学習をとりまく社会環境」（共編著:学文社）など。

コーディネーター

福留　強（聖徳大学人文学部児童学科教授・聖徳大学生涯学習研究所所長）

NPO法人全国生涯学習まちづくり協会理事長。全国生涯学習市町村協議会世話人。
全国で生涯学習まちづくり・「創年のたまり場」などを提唱・実践している。著書に「生涯学習まちづくりの方法」（日常出版）など。

課題研究「子ども・女性・創年と地域ネットワーク形成」（分科会）

＜第1分科会＞

◎研究発表

塩　美佐枝（聖徳大学人文学部児童学科教授）
元東京都教育委員会指導主事。その後、公立幼稚園園長を経て、現在、聖徳大学人文学部児童学科教授、全国幼稚園教育研究協議会会長を務める。

西　智子（聖徳大学人文学部社会福祉学科助教授）
東京都世田谷区内の公立保育園に勤務。世田谷区立乳幼児育成相談所（現総合福祉センター児童部門）勤務後、世田谷区立保育園園長（三園歴任）。担当科目　家族援助論・乳児保育・保育実習。

森川　文子（聖徳大学短期大学部保育科助教授）
聖徳大学短期大学部保育科助教授。乳児保育・家族援助論を担当。

◎コーディネーター

村田　光子（聖徳大学人文学部児童学科助教授）
埼玉県狭山市内の公立幼稚園に勤務。埼玉大学教育学部附属幼稚園副園長、狭山市教育委員会学校教育課指導主事、狭山市立幼稚園園長を歴任し、2003年から現職に。

＜第2分科会＞

◎発　表

松澤　利行（財団法人やしお生涯学習まちづくり財団常任理事）
現在、全国生涯学習市町村協議会世話人、NPO法人全国生涯学習まちづくり協会理事、文部科学省地域づくり支援アドバイザー、全国体験活動ボランティア活動総合推進センターアドバイザー。

◎事　例

蓮井　昌雄（NPO全日本健康倶楽部会長（CEO））
1938年香川県生まれ。二男六女孫15人の大家族。千葉県内にて「養老の瀧」チェーン店経営。現在、白井市にてカフェ「ザ・ワークス」営業中。「創年のたまり場」第1号。

松山　明子（新居浜市おもちゃ図書館きしゃポッポ代表）
障害児のために手作りおもちゃを作り続けて10年。また、写真家だった父の足跡を辿るうち写真の道へ。その流れで自宅を開放。夕陽の館をスタート。

◎コーディネーター

齊藤　ゆか（聖徳大学生涯学習研究所専任講師）
1999年横浜国立大学大学院修了（「教育学」修士）、都内中学校教員、昭和女子大学助手を経て、2004年博士（学術）取得。専門は、ボランティア・NPO論、生活経営学、福祉教育・ボランティア学習。全国のボランタリー活動育成に奔走する。

＜第3分科会＞

◎発　表

安田いく代（我孫子第一小学校教頭）
小・中学校教諭、独立行政法人国立女性教育会館専門職員、柏市教育委員会指導主事、千葉県教育委員会社会教育主事を経て現職。

◎事　例

真壁　静夫（サン・ライフネット代表・まちづくりコーディネーター）
28年間社会教育、生涯学習推進に取り組む。現在サン・ライフネット代表として「生涯学習は梅の一生に学べ」を旗頭に地域づくりと講演活動を展開。

鈴木　洋子（住みよい暮張を考える会会長）
聖徳大学人文学部児童学科生涯学習指導者コース卒業。（旧）労働省外郭財団の両立支援相談員、千葉県保育専門学院勤務後、03年より千葉県生涯大学校講師。

◎コーディネーター

豊村　泰彦（教育新聞社編集局報道部部長）
1982年教育新聞社入社。新聞制作のほか、生涯学習、環境・エネルギー、文化・芸術、健康・食育、グリーン・エコツーリズム、まちづくり、ユニバーサルデザインなどの分野で普及宣伝活動やイベント事業企画などに取り組んでいる。NPO法人全国生涯学習まちづくり協会理事。

＜第4分科会＞

◎コーディネーター

西村美東士（聖徳大学人文学部児童学科教授）
現在、原案作成を担当した「連鎖的参画子育てまちづくり研究」が採択されて大張り切り。
科研費で「社会化をめぐる青少年問題文献分析」も始まりつつある。

花輪　茂道（聖徳大学短期大学部総合文化学科教授）
昭和14年、日暮里生まれ。出雲大社町ご縁特使、関東支部長。メイク松戸ビューティフル、(財)松戸みどりと花の基金、江戸川松戸フラワーライン会員。国分川を守る会会長。

＜特別公演＞

小泉　恵子（聖徳大学人文学部音楽文化学科助教授）
東京芸術大学卒業。同大学院修士課程修了。
第1回奏楽堂日本歌曲コンクール第1位。
山田耕筰賞・木下記念金メダル受賞。

曲目：山田 耕筰 作曲　「からたちの花」
　　ドリーブス 作曲　「カディクスの娘」

伴奏（ピアノ）　井桁　和美（聖徳大学音楽文化学科非常勤講師）

全体会「女性のチャレンジ支援をめぐって」

名取　はにわ

プロフィール

東京大学法学部卒業後、1973年法務省入省。
人権擁護局を始め、内閣総理大臣官房審議室を経て、
1995年　内閣総理大臣官房男女共同参画室長・内閣審議官。
1999年　日本学術会議事務局学術部長。
2001年　文部科学省生涯学習政策局主任社会教育官。
2003年　内閣府大臣官房審議官。
同年8月　内閣府男女共同参画局長に就任し、現在に至る。

生涯学習フォーラムの開催にあたって

聖徳大学生涯学習研究所　所長　福留　強

第7回聖徳大学生涯学習フォーラムにご参加いただき、心から感謝いたします。

地域に開かれた大学の研究拠点として、聖徳大学生涯学習研究所では、これまでいくつかの研究や実践を重ね、今年で7回目の聖徳大学生涯学習フォーラムを迎えることができました。

本研究所では「生涯学習の観点から『少子高齢社会の活性化』に関する総合的研究の経過と展望」をテーマに、文部科学省の採択を受け、その研究プロジェクトを組織し5ヵ年にわたる研究を実施しています。そして、松戸駅前にこの研究活動の本拠点として、この「聖徳大学生涯学習社会貢献センター」がオープンしました。

今回は学術フロンティア推進事業に関する研究発表・討議を主要な内容として開催することになりました。このフォーラムは、これからの研究に直接、関わっている研究者などの発表・討議はもちろんのこと、多くの皆さんの積極的な参加で、より充実したフォーラムを創りだすものと期待しております。

また、このフォーラムの成果は市民が、このセンターを拠点として、自己をいかに社会貢献できるかを考える契機にもなるものと思います。さらにボランティア活動などの実践の拠点となると思います。今後も大学との連携、および地域の活動団体同士の交流が図られるように努めたいと思います。皆様のご指導・ご協力をお願いいたします。

SEITOKU 聖徳大学　生涯学習研究所

〒271-0092　松戸市松戸1169　聖徳大学生涯学習社会貢献センター（10号館）6階
TEL.047-365-5691　FAX.047-365-5692
学術フロンティア　URL.http://lll-studies.ddo.jp

日本経済新聞
夕刊
3月8日
月曜日

【第三種郵便物認可】

良くも悪くも拡大志向があまりないのが女性創業者の特徴とよくいわれる。そんな社会の固定観念をひっくり返すかのような積極経営を進めてきた。

十五年前、一人で横浜市内に調剤薬局店を開いた。ちょうど医薬分業の流れが本格的に始まったころ。ほどなく、「当時まゆつばと見られていた」病院経営コンサルティング事業に乗り出す。店舗網も、神奈川県内各地、東京都、群馬県へと広げた。米国にも会社を設立。介護保険制度の導入が決まると、素早く介護支援事業所を立ち上げた。

二〇〇二年、米IBMなどが後援する「世界優秀女性起業家賞」を受賞。〇三年一月、小泉純一郎首相の施政方針演説の中でも、世界で業績が高く評価された日本人として、ノーベル化学賞の田中耕一さんらとともに谷口さんの名前があがった。

キャリアの軌跡

イムノエイト社長
谷口　郁子さん

父の「手に職を」胸に飛躍

（たにぐち　ふみこ）東京都出身。共立薬科大卒。民間の研究所勤務を経て1989年、イムノエイト設立。2003年から内閣府男女共同参画局チャレンジ支援ネットワーク検討会委員。44歳。

キャリアの方向性を決めるうえで、「父の一言が大きかった」。サラリーマンだった父親は谷口さんに「二十一世紀を生きる女性として、手に職をもって自立するように」と薬剤師の道を勧めた。言に従って薬剤師になり、民間企業の研究所に就職。四年後、出産を機に退職した。社会的な子育て支援策が今ほどなく、育児と研究職の両立は困難と思った。事務職に移るのは、手にした「職」を放棄するようで嫌だった。

形はどうであれ薬剤師を続けようと、近所の調剤薬局に再就職。そこで「生の現場のおもしろさを発見した」。二年後、懇意にしていた医師の後押しもあり、調剤薬局を運営する株式会社を設立。「経営知識はゼロだったが不安はなかった。でも今思うと無謀でした」と笑う。

これまでの事業は「行き当たりばったりだった」と謙そんするが、成功したのは決断の速さと行動力があったからこそ。事実、最初の会社設立からわずか四年後、「医療もこれからはサービスの時代。先進事例を学びたい」と渡米した。大学で病院経営を学びつつ、米国では簡単に起業できると知ると、米国の最新医療関係情報を日本に発信する会社を現地でつくった。日本で介護保険制度の導入が決まると、勉強を途中で切り上げ帰国。自らケアマネジャーの資格を取り、介護事業所を立ち上げ、制度開始に間に合わせた。

今、各地の古い商店街にクリニックや薬局、介護事業所、託児所などを集める「タウンヘルスケアステーション」事業に乗り出している。事業名の商標登録を済ませ、すでに横浜市内で試運転を始めた。「高齢者は安心して楽しく暮らせ、母親は仕事と育児の両立が楽になり、女性の雇用や起業も増える。そんな街をつくりたい」と意欲を燃やす。

ほっと一息

ゴルフ歴十五年。もともとは取引先を接待するために始めたが、やっているうちにだんだんおもしろくなり、のめり込んでいった。いまは週一、二回、仕事の関係者や友人、経営者仲間らとグリーンを回る。

「ハンディは内証」と教えてくれないが、年季が入っているだけにかなりの腕前のようだ。「飛ばしますよ。ティーも男性と同じ位置から打ちます」。飛ぶ秘密をたずねると、「道具がいいから」と冗談っぽく笑う。

実は、日本企業の駐在員も多く住むニューヨーク市郊外にゴルフショップを持っている。その関係で、最新のゴルフクラブが労せず手に入るとか。海外出張の際も、「もちろん、クラブは離せません」。

Saturday

輝く

日本の女性起業家

イムノエイト社長
谷口　郁子さん

「幼老ケア」核に商店街活性化

薬科大学を卒業後、民間企薬の研究所で働いた。しかし放射線を扱う職場で、妊娠を機に退職した。

育児中は薬剤師の資格を生かして薬局でアルバイト。その経験をもとに、「商店街の中にある地域に根付いた薬局を」と調剤薬局を開業したが、それだけでは飽き足らない。渡米してニューヨーク大学で病院経営を学んで現地法人「イムノコーポレーションUSA」を設立するなど起業家精神を思う存分発揮した。

さらに、介護保険制度が導入される前に自らホームヘルパーの資格を取得。一九九九年からは介護支援事業も立ち上げた。

経営者となって十六年。いま最も注目しているのが商店街でのビジネスだ。

「商店街には魚屋、肉屋、八百屋、洋服店などが軒を連ね、裏側にはたいてい歓楽街があります。商店街を縦にすれば立派な高層商業ビル。しかも、商店街は昇降のないバリアフリーで行き来できる」

全国には、銀座と名がつく古くからの商店街がたくさんある。そんな商店街が谷口さんのターゲット。衰退した商店街に競合する店舗を出店するのではなく、病院や薬局、介護事業所、託児所が集積する「タウンヘルスケアステーション」と名付けた新たな街づくりを提唱する。

「育児は、おばあちゃんの知恵で若いママを助ける。さらに高齢者ケアもできるような〝幼老ケアセンター〟ができれば相乗効果を発揮できる」と谷口さん。子供と高齢者と女性、医療と福祉を結びつけ、さらに商店街の活性化にもつながればと願う。

タウンヘルスケアステーションの第一号は、民間と行政、NPO(民間非営利団体)が一体となってつくる。それぞれの特性を生かした拠点になる見込みで今秋、横浜に完成する予定だ。

◇

次回は、国内外で食の文化を通じたビジネスを手がけるテーブル・ファクトリーの川淵智子さんが登場します。

(写真・文　田畑則子)

≪たにぐち・ふみこ≫ 共立薬科大卒。89年調剤薬局を開業し、イムノエイト設立、93年イムノコーポレーションUSA設立、99年介護支援事業所を発足。02年世界優秀女性起業家賞を受賞。著書に『あなたはどんな「老い」を生きたいですか？』(アートデイズ社)など。45歳。東京都出身。

▷所在地＝東京都港区西新橋1の4の12ルート西新橋ビル2階

☎03・3507・8611

資料 2-2

杉本　由子
株式会社　芳翠園

ロータリー活動において

発足時より女性が入会できるロータリークラブ（東京神宮ロータリークラブ）設立に尽力し、1994 年には東京神宮ロータリークラブを設立し、チャーターメンバーには男性 26 名、女性 8 名で発足した。1997 年～8 年に東京で初の女性会長となり、ヨルダンとインドの同額補助金プロジェクトに着手、年二回の明治神宮清掃奉仕活動、フォスターチャイルド活動その他、交換留学生受け入れ等を行った。

2000 年～2001 年　第 2750 地区初のロータリー女性委員会を発足し、初代委員長となる。RI 理事会「女性のニーズとその向上に関する 7 項目の声明」より女性のロータリアンが女性のニーズに応じるプロジェクトを増やすために女性会員の増強や女性会員の地位向上に努めた。活動としては「ロータリー女性委員会リポート」の発行や、「女性ロータリアンと応援団との集い」等を開催した。現在女性委員長としては 3 期目を向かえ女性メンバーの職業分類に着手し、また、RI100 周年記念として「日韓女性ロータリーアン親善交流会議」を韓国と日本において開催し「女性のロータリアン研究会」を行った。

<国際ロータリーにおける女性会員の現状>

現在世界には 529 のロータリー地区があり、34 のゾーンに分けられています。会員数は約 121 万人で、そのうち女性会員は約 15 万人で、全体の１２％を占めています。女性のクラブ会長は 4000 人を超え、2004-5 年度の女性ガバナーは 47 人で、2005-6 年度の女性ガバナーは 65 人です。日本の女性会員は約 3100 人で、全体の３％です。

日本国内には 34 の地区があり、その中に２３３７ロータリークラブ、会員数は１０３４９０人中３２６３人が女性会員です。（２００５年３月現在）

国際ロータリー　第 2750 地区は国内８３クラブと PB（パシフィックベイスン）８クラブで形成されており、その女性会員比率は下記の通りです。（２００５年４月末現在）

国内　83 クラブ　253 人女性会員比率　５パーセント
　　91 クラブ　313 人女性会員比率　６パーセント

地域にチャレンジする女性－私のキャリアアップ－

聖徳大学短期大学部教
石匠　あづま屋取締役
長　江　曜　子

(1) ○ “リボンの騎士”の少女時代（ピンクとブルーのハート）
↓
体の大きな女の子、母親タイプ、強いイメージ

○ 石匠あづま家　㈱加藤組　三代目への道、刷り込み現象。姉妹のみの長女。
○ 父方祖母の影響　　5才からの預金　→　自立教育
働く女性は、あたりまえ。
母方祖父母の影響　→　グローバル、インターナショナルな視点。

(2) 思春期　→　女性「性」へのとまどい。
↓　　↓
＜NOを言う子＞　「第二の性」的な存在の認識と拒否(シモーヌ・ド・ボーヴォワール)
↓
優等生から劣等性へ（中２～高３登校拒否）自己発見の旅「生きている意味」の解明へ
不登校

(3) チャレンジ期　→　他人の価値観「～らしさ」からの脱出、「自分らしさへ」
↓
聖徳学園短大　→　共立女子大編入　→　明治大大学院（マスター、ドクターコース）
（日本近代文学研究者へ）　|　2003年、共立女子大大学院(ドクターコース)
↓　墓地研究で博士号取得をめざす。

無　S５４年２月　結婚〈学生と妻〉悪妻宣言
器　S５６年　父の病気（右足切断・左目失明）
用　会社経営スタート
な　S５８年　短大非常勤講師（S５９年から専任助教授）
人　H３年より明大商学部非常勤講師
生　H ７年　会社社長へ

(4) 現在　→　ビジネス、大学、地域社会の少数派の女性として
“女としてこびずに”“人間”として生きる。
（商人の娘）　与謝野晶子「女らしくない　→　人間らしくないが怖い」
① ジェンダーからの開放　→　内なるジェンダー規制をいかにとるか。
青年会議所活動・JC石材部会長
自分らしさ“ゴジラの卵”
② 「チャンスの神様」　→　恐怖との戦い。チャンスを与えて下さった男性にも女性にも感謝している。
③ 「人生百年時代」　→　素敵なニューフィフティを目指す。

第７回聖徳大学生涯学習フォーラム資料

2005/6/26

カナダ社会におけるボランティア活動の具体的諸相
―セカンダリー・スクールでのボランティア体験から―

國學院大學非常勤講師　小川誠子

Ⅰ．ロード・ビング（Lord Byng High School)校でのボランティア

1．ボランティア活動の内容

ミュージック・ソサエティー（music society）で、生徒の音楽学習をサポートする。

①月一回のミーティング

②学校で実施されるコンサートの補助

2．ミーティングの内容

①資金調達（fund-raising）

②７つのバンド(Beginner Band, Junior Band, Intermediate Band, Senior Band/Wind Ensemble, Junior Stage Band, Senior Stage Band, Symphony Orchestra)

③年約 12 回のコンサート〔一人５カナダドル（1 ドル約 88 円，2005/6/22）のチケット収入は貴重な財源〕

Ⅱ．ジャズ・コンサート‘Swyng with Byng’

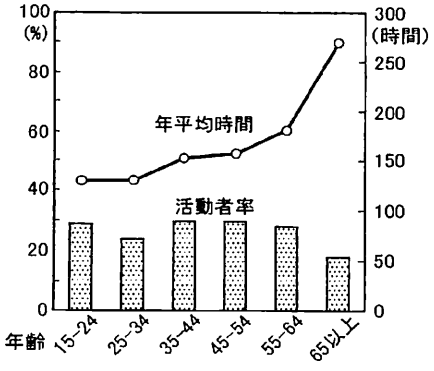
①教師のリサーチ・デイ（research day）を利用

②サイレント・オークション（silent auction）

③リカー・ライセンス（liquor license）と音楽教師

Ⅲ．カナダ社会におけるボランティア活動の状況

15 歳以上を対象とした 2000 年の調査によると、カナダ社会では、年間約 650 万人(26.7%)の人々がボランティア活動に参加している（Statistics Canada 2001)。



〔図１〕カナダ社会におけるボランティア活動の状況
＜Statistics Canada, *Caring Canadians, Involved Canadians: Highlights from the 2000 National Survey of Giving, Volunteering and Participating,* 2001, p.34 より作成＞

Ⅳ．高校生にとってのボランティアの意味

ボランティア活動の入り口は、「進学した高等教育機関で奨学金を得るため」

→　自発性と無償性の問題

ボランティアと職業観の形成（キャリア形成）

青年期の認知地域の実態

聖徳大学人文学部教授　塩　美佐枝

作田啓一氏は「価値の社会学」（１）の中で「人間は、さまざまな対象と自分が連続的につながっていると感じ、即ち連続観をもつと、心理的な緊張に陥らず、調和して生きていかれる。」と述べている。最近、ネット社会で浮遊している若者や繁華街にたむろする若者などは、地域社会や学校、家庭との断絶即ち非連続観をもち、心理的な緊張に陥っているように思える。

特に、子育てに悩み、子供に自分のストレスをぶつける親の増加など、育児不安の原因の一つに子育ての孤立化が指摘されている。地域のなかで、地域の一員として青少年が安心感をもって生活し、健全な成長を成し遂げるためには、地域社会による支え合いが重要である。幼児期から、子供たちが地域でさまざまな生活経験を積み上げ、かかわりを深めていくことが今、求められている。

そこで、青年期にある学生が地域社会にどのようなイメージをもっているかをとらえ、子供たちと地域とのかかわりの在り方の見直しの一助としたい。

１．青年期の学生の地域に対する認知

高橋伸夫氏は人々が地域をどのようにとらえるかについて「どのような人々も外界の対象物、特にある地域内で行動し、さまざまなことを観察する。種々のことを経験することによって、知識、情報として自分のものとし、自らの頭の中に認知地域という広がりを有するのである。このように人々が個々の事象について知識を有する行為によって、人の頭の中に存在する広がりが認知地域である。」とし、「人々の認知は、環境を認知し、生活や自分自身の行動に生かそうとするが、自分が住んでいる地域を地図として認知するばかりでなく、生活区域全体を総合的に認知しているのではないかと思われる。」とし、認知地域は人の頭の中に存在する地域ととらえることができるとしている。

そこで、本学の学生２２１名に青年期の学生に自分と家庭、学校、地域とのかかわりについて、１から１０までの大きさの○で表す調査や子供の頃の地域とのかかわりの思い出の絵を描いたり、現在の地域の生活の絵を描くなどの調査を行った。以下はその結果の一部である。

（１）子供のころの地域とのかかわりについて

全員が各時期の家族との関係を数値で表している。

家庭生活の母親の数値が幼児期は８．６、中学校は７．０、現在は７．０であり、父親は幼児期は６．６、中学校は５．１、現在は５．５である。同じ調査で地域とのかかわりをどのように認識しているかを見てみると、地域とのかかわりを記入しなかった人が被験者２２１名中、幼児期は８５名、中学校期は９２名、現在は１１２名であった。被験者が成長するにつれて地域とのかかわりが希薄になっていくようすが読み取れる。

記述した人の内容を見てみると、地域のかかわりとして「地域の子供」を挙げているのは幼児期では６７名で大きさは６．３である。中学校期は４８名で、大きさは５．８である。　次に記入しているのは、「近所の大人」である。「近所の大人」の幼児期は

７７名で大きさは4．3、中学校期は７４名、大きさは3．2である。現在の欄に記入した人は６１名で、大きさは2．9である。

（2）子供の頃の地域とのかかわりの思い出の絵

子供の頃の地域とのかかわりの思い出の絵を描く調査では、２１名が白紙であったが２００名の絵を分析すると次のようであった。絵がかけない場合は言葉で補っている。

○場所に関するもの　道（３５）　公園（１６）　自然（１３）　遊び場（7）
○遊び　遊びそのもの（５４）
○行事　イベント（２３）　ラジオ体操（8）　廃品回収（6）
○人間関係　人（9）　お店の人（6）　子供会（2）

（3）現在の地域の生活の絵

子供の頃の地域とのかかわりの思い出を絵に描くことで認知地域の具体像をとらえたが、現在の地域の生活をどのように認知しているかを探るため、現在の地域の生活の絵に描いたものを分析した。

現在の絵を描く時は戸惑ってざわめきが起き、なかなか描き始めなかった。「何を描けばよいのか分からない。」「地域の生活などない」という声があがる。

○場所に関するもの　道（１２）　自然（3）　近所の風景（3）散歩（5）
乗り物で通過（１４）
○行事　イベント（　5）　ラジオ体操（1）　廃品回収（4）
○人間関係　近所の人（１０）　商店（１３）　子供会（2）

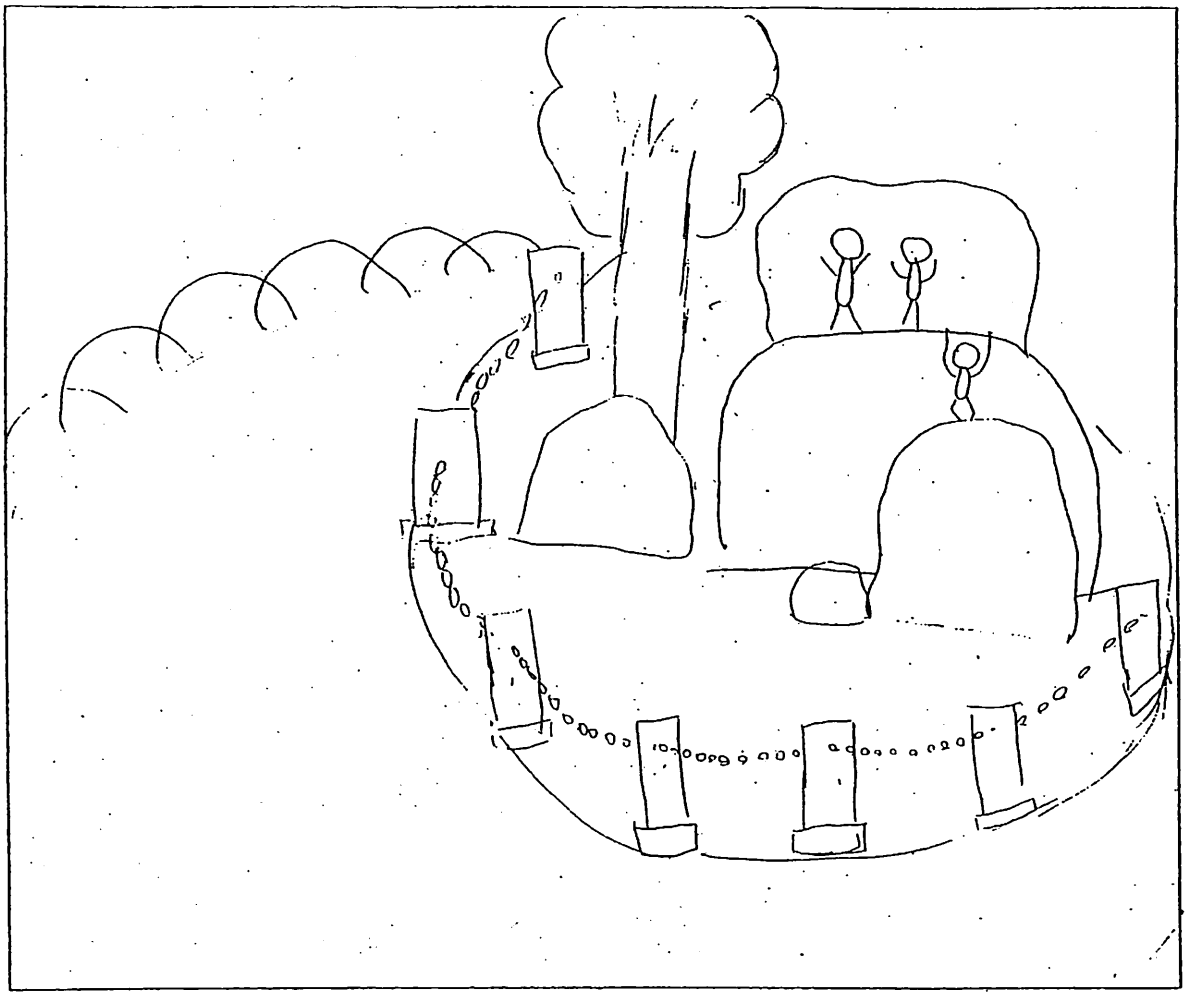
殆どの絵に自分が描かれていない。特に乗り物で通過の（１４）は、地域を自転車や電車で通過するだけととらえている。商店（１３）もスーパーが描かれていたり、弁当が登場しているが、いずれも人とのかかわりは描かれていない。

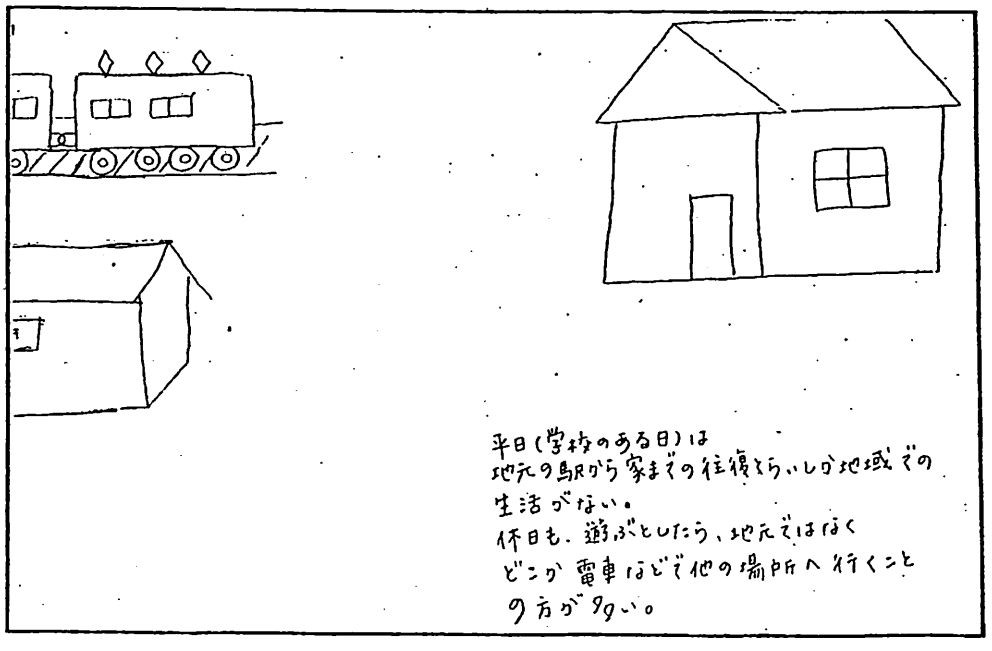
2．考察

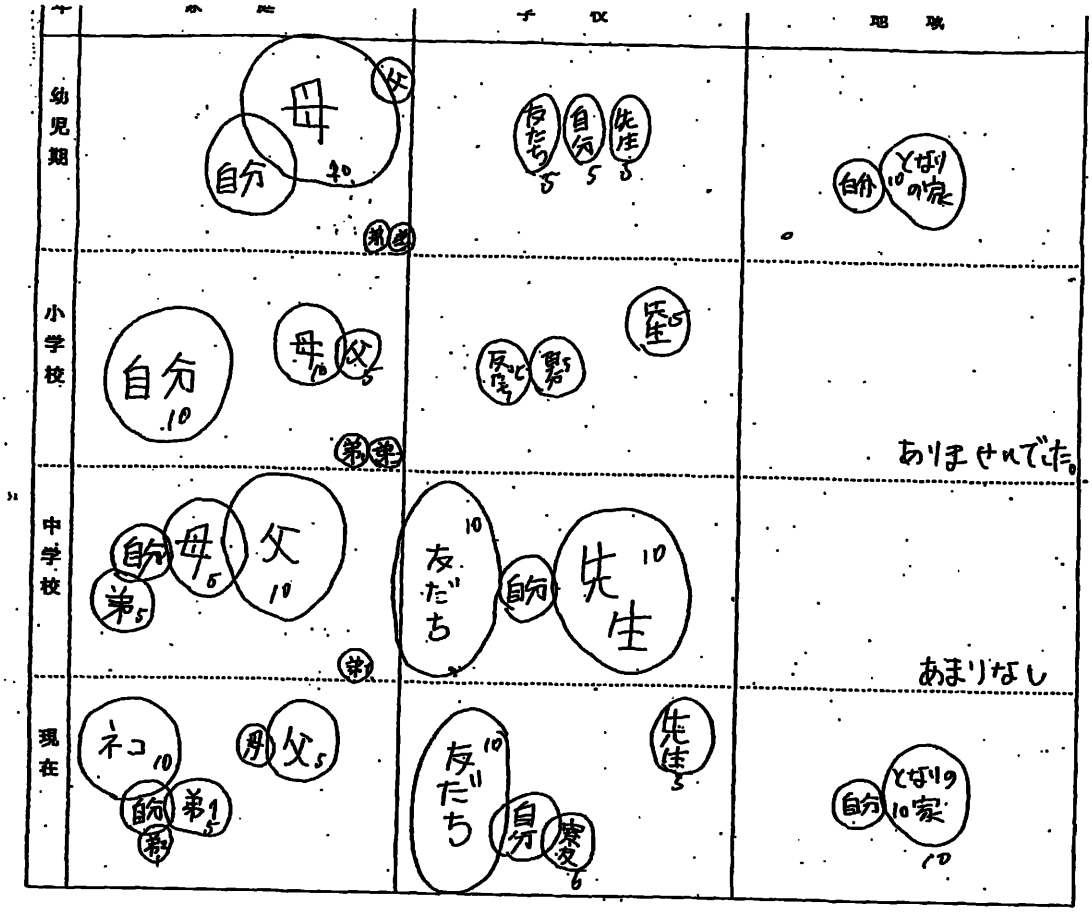
問題と思われるのは、被験者が地域の生活がどの時期でもかかわりが薄いと感じていることである。地域での生活は、子供のころから非連続で、自分と地域社会とのかかわりを模索したり、その中で学びを取り込んだり、価値の評価を行って批判したりすることを経ずに形成した非連続観であり、言わば孤立した存在といえる。地域社会の形成者としての基盤となる連続観の形成の経験もなく、地域の一員としての自分が認知されないまま成長している。地域に愛着が形成されず、地域社会の生活のイメージも形成されない現代の若者は、やがて成人し、歳を重ね、やがて職業生活を終えて地域に戻ってくる年齢になるまで、地域の生活をもたない地域社会の形成者ということになる。

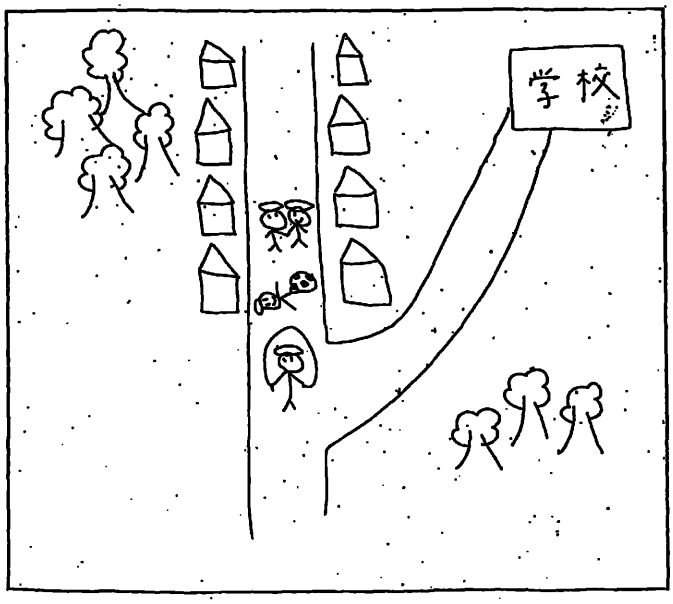
家庭が地域から孤立して、家族が閉じこもったなかで育ち、やがて成人して結婚し、出産して子供を育てようとしたとき、地域にかかわり、自分を地域の一員として位置づけることが難しく、地域の人々との連続間も形成することができず、子育てが孤立していくというスパイラルな状況が成立する。

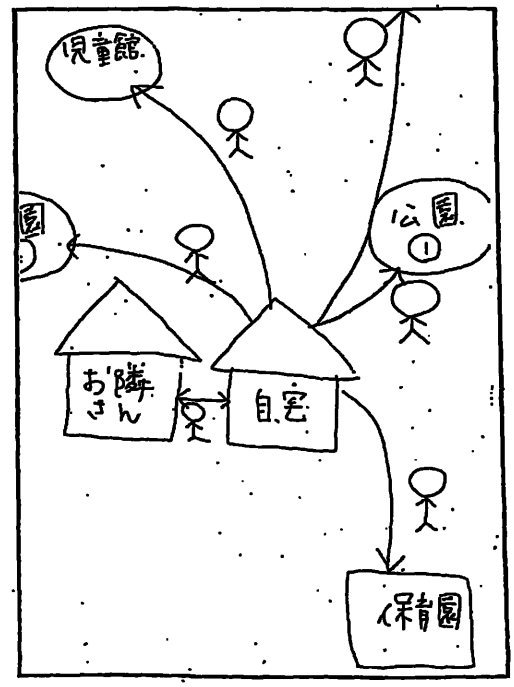
5．貴方の子供のころの地域の生活を思い出して　絵で表してください。






幼児期
小学校
中学校
現在
母
父
自分
友だち
先生
となりの家
ありませんでした。
あまりなし
ネコ
弟


学校


児童館
公園
お隣さん
自宅
保育園

平成17年6月26日(日)

第7回　聖徳大学生涯学習フォーラム
第1分科会「子どもの環境と地域の課題」

「“顔”の見える地域作りをめざして」

～トライアングル・フェスタの取り組みから～

聖徳大学　社会福祉学科
西　智子

地域における子ども育成活動は、全国的に見ても盛んに行われるようになってきており、その社会的意義は大きい。児童厚生施設等の公的機関、児童委員等の公的ボランティア、地域子ども会やPTA・母親クラブなどの地域組織、住民主体型の地域・町会自主活動、企業、ボランティアなどにより様々な形で展開されてきている。子ども育成活動に今求められているのは各々の機関や住民組織が自分たちの枠を超えどのように手を携え、協力し連携しあえるかであり、大きな課題となってきている。

子どもの育ちや子育ての問題は、様々な要因が重なり合って生じることが多い。地域が連携して子どもの育成に関わることは地域住民の子どもに対する関心を高め、住民の問題解決能力の促進につながっているとも考えられる。

今回は、世田谷区の一地域でのイベントを通じて地域住民と行政、児童福祉施設、小中学校、さらに地域の留学生会館(国際交流会館)を巻き込んで連携し乳幼児から青少年の健全育成に取り組んできた実践例を基に今後の課題を考えていきたい。

1、トライアングル・フェスタの誕生と歩み

① フィールドフェスティバル　(青少年の健全育成)
　出張所のまちつくりにおける取り組み

② ぱるランド　(子育て・子育ち・親育て)
　児童館と保育園の取り組み

③ 祖師谷芸術祭　(地域に於ける国際交流)
　留学生会館を中心とした取り組み

2、フェスタの取り組みから見えてきた　成果

① 子どもの視点から

② 親の視点から

③ 地域の各施設の視点から

3、今後の課題

２００５年6月２６日

第７回聖徳大学生涯大学フォーラム

第一分科会「子ども環境と地域の課題」

―地域とのネットワーク―

聖徳大学短期部大学　森川　文子

〈世田谷区の事例から〉

少子化に歯止めがかからない近年、様々な子育て支援の試みが、多くの現場で取り組まれている。地域での人間関係が希薄となり、子育てについての不安を持つ家庭が増えている現状のなか、地域の子育て力が求められてきている。

１９８９年、世田谷区の公立保育園においても、電話による子育て相談がはじまり、保育園に通う子どもの家庭だけではなく、地域の子育て支援の重要性の理解が広がってきた。それまで、個別の保育園ごとに行われてきた、子育て相談・地域交流事業を他の施設や機関と連携して、全ての子育てに関わる組織が、ネットワークを組み、〈地域情報の共有化〉〈総合的子育て情報の発信〉〈子育て実践の提供〉などの実現を目指し、活動が始められた。

Ⅰ．世田谷区における公立保育園子育て支援のあゆみと取組み

Ⅱ．公立保育園と地域の連携具体例

Ⅲ．公立保育園と小・中学校との交流事例（ビデオ）

Ⅳ．今後の課題

第７回聖徳大学生涯学習フォーラム・第２分科会

「創年の学習課題と地域への貢献」

（財）やしお生涯学習まちづくり財団　常任理事　松澤利行

創年の定義

「『創年』とは、地域のために自らの力を発揮し、創造的に生きる大人（中高年）を呼ぶ。少子高齢社会における『創年』は、老人や高齢者とは呼ばず、地域の青少年とともに、生涯にわたって自分が輝き続けるよう主張するものである」

日本２１世紀ビジョン

「日本２１世紀ビジョン」２００５年４月・経済財政諮問会議（議長・小泉首相）
目指すべき将来像（２０３０年の目指すべき姿）
「時持ちが楽しむ健康寿命８０歳」

- 人が躍動する社会：楽しく働き、よく学び、よく遊ぶ
- 多様で良質のサービスに囲まれた暮らし
- 地域を超えて広がる交流

注目される活動事例（平成１６年度版「国民生活白書」より）

- 「おたがいさま事業」・・・生活協同組合ちばコープ

子どもの送迎や犬の散歩など、暮らしのなかのちょっとした困りごとを気軽に応援したり、または助けてもらう活動を行っている。ちばコープ組合員及びその家族なら誰でも利用でき、困ったことがあればおたがいさまの事務所に電話をかけ、事務所にはコーディネーターがいて、登録されている応援者の中から適任者を探し、利用者と応援者を引き合わせる。

- 「花いっぱいのまちづくり」・・・恵み野花づくり愛好会

北海道恵庭市の振興住宅地では、主婦が立ち上げたフラワーガーデニングコンテストをきっかけに、花のまちづくりが進んでいる。一人の主婦がガーデニングコンテストを立ち上げ、精力的に賛同者を募っていき、今では地域の多くの住民が花のまちづくりに参加している。

- 「子どもを見守る地域の目」・・・内閣府「生活達人」初鹿野聡氏

地域の人々がまちの同じ場所に立ち、子どもたちへのあいさつを毎日続けている。初鹿野氏が PTA の役員に呼びかけて始まり、現在は NPO 法人を設立。子どもたちを守るには、まず地域コミュニティの再生や地域活性化が必要であるとし、最近では、警察署と連携して不審者や窃盗などの防犯情報メールを地域の人々の携帯電話やパソコンに一斉配信するネットワーク「わがまちポリス」を行っている。

学習と活動のヒント（「生き方の基本―論語と聖書に学ぶ―」永池榮吉氏より）

- 「人には自分がしてほしいことをする」
- 「学ぶときは素直になろう」
- 「心の富を蓄える」
- 「目指すものは必ず達成できる」
- 「すべては実践にかかっている」

第７回　聖徳大学生涯学習フォーラム

第②分科会「創年の学習課題と地域への貢献」　レジュメ

ＮＰＯ　全日本健康倶楽部　会長　蓮井　昌雄

１、健康倶楽部　設立の経緯と地域活動の接点

① テレ・パ・ゴ・生活からの脱却

イ、　６０歳でリタイア

ロ、　父親と同じ道を歩む危うさ

② 生きがいと健康の大切さ

イ、　健康で　（身体の健康）

ロ、　明るく　（家庭の健康）

ハ、　楽しく　（生活、経済の健康）

ニ、　心豊かに（心の健康）

③夢は全国展開会員３万人

２、目指すは社会起業家

① 手作りの店「ザ・ワークス」設立

② 健康と生きがいの店の理想と現実

③ 地域密着による地域貢献とイベントの大切さ

④ マスコミ活用により上昇気流に乗る

イ、　ミニコミ誌

ロ、　雑誌

ハ、　新聞

⑤ 社会性と商業性のはざまで

３、３月開設以来行ったたまり場行事

イ）サルサ、タンゴ、各種ダンス　ロ）フルートコンサート

ハ）料理教室　ニ）子育て教室　ホ）シニア講座　ヘ）親子クッキー作り

ト）各種手芸教室　チ）たまり場夏祭り（予定）リ）夕涼み映画会（予定）

ヌ）陶芸教室（予定）　ル）陶器展示即売会（予定）オ）フリーマー

３、「創年のたまり場」第一号認定の使命感と今後の展開について

以上

2005/6/26

第７回 聖徳大学生涯学習フォーラム

課題研究「子ども・女性・創年と地域ネットワーク形成」（分科会）
第２分科会『創年の学習課題と地域への貢献』

事例発表　松山明子　新居浜市おもちゃ図書館きしゃポッポ

１　社会に対してできること

☆ボランティアとしての私…おもちゃ図書館活動との出会い

・1995 年 11 月１日
　ボランティアグループ発足・手作りおもちゃ製作開始
・1996 年　４月６日
　おもちゃ図書館「きしゃポッポ」オープン
　コツコツ自分たちに出来る活動を継続
・2005 年　６月７日～12 日
　手作りおもちゃがいっぱい！　～きしゃポッポ１０年の歩み展～開催

☆おもちゃ図書館の利用

第２・第４土曜日　午後２時　～4 時まで障害児親子･ボランティア
地域の子どもが参加し開館（親子同伴で毎日利用できます）

☆活動内容

・定例会　　毎月第１火曜日、部会に分かれていますがみんなで協力する
・手作り部会　毎週火曜日　手作りおもちゃ製作　１０時～16 時
・和太鼓部会　大人の練習＝毎週火曜日　１０時～12 時
　　親子の練習＝第１・第３土曜日　１０時～12 時
・整理部会
・広報部会
・貸出部会

☆活動の広がり…通常の開館と活動を積み重ねていくうちに各方面へ

①移動おもちゃ図書館を開催し地域との交流
②市の出前講座で手作り・和太鼓・環境体験学習など開催
③市や社会福祉協議会などの行事に参加
④国際会議に参加など

２　自分がつながりの中で受け継いできたことを後世に語り継ぐ役割

☆父の写真

３　創年のたまり場

☆人との出会い　心のふれあいを大切にエコミュージアム（街角の博物館）

7．これからの社会教育

7－（1）地域の連帯意識を高め住みやすい地域づくりを進めていくために，社会教育はどのように関わればよいでしょうか？

「住みやすいまち」とは，どんなイメージでしょう。

①犯罪がなく安全なまち，②美しく魅力的で個性的な景観のあるまち，③芸術・文化に触れる機会が豊富にあるまち，④教育環境が整備されたまち，⑤産業・経済が発達し活気のあるまち，⑥健康によいまち，⑦地域住民の連帯意識が高く助け合いの気運の高いまちでしょうか。こうしたまちは，「住民が自慢できるまち」，「みんなが行きたがるまち」でもあります。

「住みやすいまち」づくりには，一人一人が自分のまちに強い愛着を持つことが重要です。しかし，都市化，核家族化，少子化等が進むにつれて，地域の人々がお互いにかかわることが少なくなり，コミュニティーとしての形が崩れてきています。一人暮らしの高齢者の孤立，モラルの低下，青少年犯罪の低年齢化等，様々な社会問題も生じてきています。

中央教育審議会「今後の地方教育行政の在り方について」（平成10年9月）報告で『地域住民の学習活動，芸術文化活動，スポーツ活動を活性化し，住民の地域社会への参加を促していくことは，地域の豊かな人間関係の形成，地域意識の向上に役立ち，生き生きとした地域コミュニティの基盤形成を促進するものである。』と述べられているように，社会教育として，地域住民の学習活動，芸術文化活動，スポーツ活動等の活性化をしていくことは，「まちづくり」の推進に大きな意味を持ちます。

このように，「まちづくり」の一つに，生涯学習活動を盛んにすることにより住みやすいまちを作ろうという試みがあります。学習しようとする人は，目的意識を持ち活気にあふれています。学習により知識を深め新しい技能を身につけるだけでなく，新しい学習仲間もできます。学習が進むにつれて，成果をいかすために，ボランティア活動やＮＰＯ活動へと発展することもあります。各自がもつ力を結集することによって，地域を動かすような大きな力となることもあります。活動を通して連帯感が生まれる一方，一人一人は生きがいを見出し，より生き生きとした生活を送ることができます。生涯学習を進めることは，地域づくりそのものにつながり，地域の活性化に結びつきます。

社会教育においては，「まちづくり」は「人づくり」の観点にたち、学習意欲がわくような魅力的な企画と学習の場を充実させ提供することが最も重要です。

【実践例】

サタデイ・コミュニティ・スクール/北小金

《概　要》

1　開設の経緯

松戸市教育委員会は，これまで「学校を拠点とした地域コミュニティづくり」を推進してきました。「サタデイ・コミュニティ・スクール」は，子どもたちの育成に地域の”教育力”を積極的に取り入れようとする試みとして計画されたものです。「サタデイ・コミュニティ・スクール/北小金」はその一つです。

2　運　営

市内在住の小・中学生を対象に，毎週土曜日の午前中２時間程度の授業を行っています。スクール長（民間公募）及びスクール長が委嘱した経営スタッフ，ボランティア，アドバイザー（すべて地域在住）によって運営されています。

3　学習内容

体験活動を中心とした自然・歴史・文化などの地域学習，会話などの国際理解学習，スポーツ体験，ボランティア活動を行っています。

4　事前検討会

スクールは基本的にスタッフが行いますが，内容によっては，専門家や地域に詳しい人を講師として依頼します。事前に必ず検討会を設け，講師，地域の教育関係者等も交えて授業の手法や流れ等について検討しています。

《「サタデー・コミュニティ・スクール/北小金」を通して》

①　異年齢交流と地域とのかかわり
- 子どもたち（小中学生）は，複数の学校から参加するため，学校も年齢も違ういろんな友達ができました。
- 体験学習を通して，自分の住むまちに関心を持ち始めました。
- スタッフだけでなく，多くの地域の人とのかかわりが増えました。

②　大人も学ぶ「地域学校」
- 事前検討会，子どもとの学習活動を通して，スクールに関わる大人も地域に知り合いが増えました。
- 地元の子どもたちの様子も知ることができました。今ではまちで出会うと、声を掛けることが増えました。
- 地域のことについて語りあったり、地域の情報交換をすることが増えました。

生涯学習ハンドブック　より
（千葉県社会教育協会　編集）

「住みよい幕張を考える会」の活動

「住みよい幕張を考える会」鈴木　洋子

１．会の結成

埋め立てと幕張新都心の開発が進み幕張は大きく変貌。
幕張駅周辺地区は市街地再開発が計画されていたが、事業実施が難航し中止。２００１年９月に「まちづくりフォーラム」（千葉市主催）開催。　フォーラムで、幕張４、５丁目を中心として市街地再開発にかわる新しいまちづくりについて意見交換。「子供やお年寄りのための広場を」、「地震や火災の備えを」、「商店街をもっと元気に」など、市民手作りのまちづくりを進めたいという願いの中で、２００２年４月「住みよい幕張を考える会」誕生。

２．会の概要

・目的
開かれた市民組織として、市民手作りのまちづくりをすすめたいという願いを育て、これからの幕張のまちづくりをともに熱く語り合い、実践していく。
・会員
幕張町及び隣接地に在住、在勤で、会則の目的に賛同し、入会の手続きがあった人を会員とする。会の活動に協力できる人はサポーターとなれる。
・定例会　　毎月第３金曜日　千葉市幕張相談所にて１９：００～
・環境整備　毎月第４土曜日　駅前花壇９：００～
　環境整備は現在会が管理している駅前花壇とたんぽぽ広場の管理作業
・活動情報誌「馬加通信」発行　（年　4～５回程度）, ホームページ開設.
・大学生などの参加（千葉大学、千葉大大学院、神田外語大学、法政大学など）
・千葉市都市再開発課からのサポート
・千葉市まちづくりアドバイザーの派遣（年間１２回、主に定例会時）
・千葉市より「花のあふれるまちづくり花苗配布」年３回

３．会の活動　（定例会・環境整備以外の）

平成 14 年度（2002 年 4 月～2003 年 3 月）
・ワークショップ（会場・幕張公民館など）
　2002 年 6 月　駅前三角地と市所有地の活用について
　2002 年 8 月　駅前三角地とたんぽぽ広場の備品、管理など
　2002 年 10 月　イベント（フリマ・バザー）とたんぽぽ広場の開放
　2002 年 12 月　空き家巡りと防災について
　2003 年　1 月　各活動取り組み内容と役割分担など検討

2003年　3月　駅前三角地環境整備報告

平成15年度（2003年4月～2004年3月）

・ ワークショップ

2003年4月　　駅前花壇のお披露目、会の活動の展示、フリマ

2003年8月　　商店街との連携について、防犯について

・ 2003年10月　昆陽大学（公民館生涯学習講座）での講演（幕張公民館）
・ 2003年10月　千葉市NPOショー参加（千葉市中央公園）
・ 2003年10月　花の勉強会
・ 2003年11月　幕張・検見川健康まつりでの展示
・ 2003年12月　公民館文化祭参加
・ 2004年　1月　花の美術館で勉強会
・ 2004年　2月　幕張駅前アンケート調査
・ 財団法人都市緑化基金より「花と緑のスポットガーデン助成」助成金

平成16年度（2004年4月～2005年3月）

・ イベント

2004年10月　「まちづくり出前講座」開催
千葉市都市計画課・都市再開発課

2004年11月　会の活動展示、フリマ、紙芝居、健康チエックなど

2005年　3月　「千葉大生幕張プロジェクト」提案発表
千葉大学都市環境システム学科の演習課題の発表

・ 「馬加通信」で「まちの人・お店紹介」
・ たんぽぽ広場の活用・・保育所の散歩コース。育児グループスイカ割り大会。納涼会。花づくり交流など
・ NHK「ご近所の底力」出演の話－ハト問題（幕張5丁目のマンション）

平成17年度（2005年4月～　　）

・ イベント

2005年5月　会の活動展示、バザー・フリマ、健康チエックなど
行徳まちづくりの会との交流、放送大学生に情報提供など

4．課題

行政との協働がいつまで続くか未定。町内会、商店会とのつながり。

会員の拡大とまちづくりの目標など

2005年　初春　第13号

馬加通信

幕張市民による
身近なまちづくり活動情報紙
住みよい幕張を考える会　発行
編集：今村久美子　渋谷泰孝
イラスト：西村磨智子
問い合わせ先：鈴木まで
Tel.043-274-0943
e-mail　makuhari@kgk-net.co.jp

題字：中嶋宏行（書道家・住みよい幕張を考える会メンバー）

新年あけましておめでとうございます。

新年、おめでとうございます。2005年のスタートです。皆さんはどんな一年をお過ごしになられますか？
昨年はオリンピックに沸いた前半に反して、後半は台風被害、新潟地震、プロ野球問題など少し暗い話題も多かったように思います。
ですが、年もかわり、今年は05年です。GO!GO!元気ハツラツ〇ロナミンで行きましょう！
今年も皆様のご支援をいただきますよう、考える会一同、心からお願い申し上げます。

また、今年も素晴らしい幕張生活が送れますように、そしてマリーンズが優勝しますように、心からお祈りいたします。

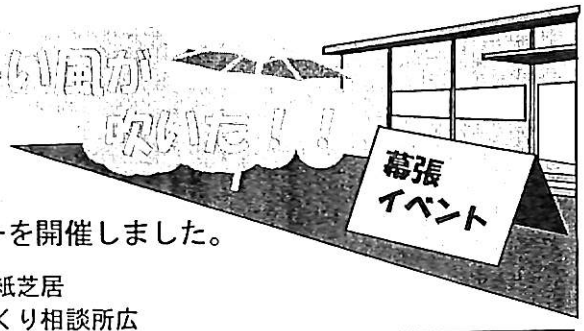
まちづくり出前講座を開催しました。

去る10月17日（日）、幕張公民館にて千葉市の「やってみようまちづくり」支援制度を活用して都市計画についての出前講座を開催しました。
当日は、千葉市都市局の都市計画課、再開発課の方々に都市計画について、マスタープランとは何かなどをお話しいただきました。
4丁目町会長さんもご出席頂き、町会の立場からのご意見も聞かれるなど、有意義なお話を伺うことができました。
出前講座で勉強した内容も今後の活動に活かし、追々ご紹介して行きたいと思います。

出前講座の様子

出前講座後の意見交換会

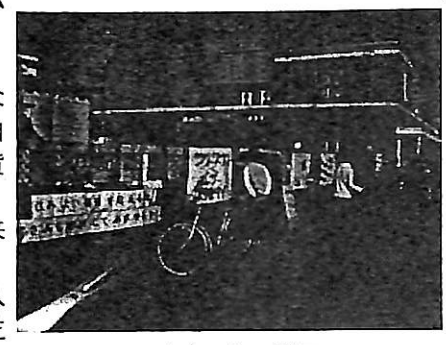
千葉市、やってみようまちづくりのＨＰ
http://www.city.chiba.jp/tosisaikaihatsu/machi/index.html



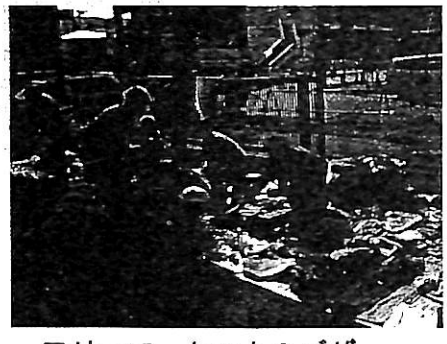
春風に人と人との新しい風が吹いた！！

昨年11月23日に
まちづくりフリーマーケット＆バザーを開催しました。

フリーマーケット・バザー・健康チェック・紙芝居
雲ひとつない青空の中、フレック横のまちづくり相談所広場にて様々な催しが開かれました。
まずフリ―マーケットでは珍しい掘り出し物がいっぱい。ジャワ島のタペストリーやスターバックスのピンバッチなど普段はお目にかかれ無いものが目を引きました。また自分でお店を持っている方が素敵な手作りのクリスマス雑貨を出品してくださり楽しいモノがたくさんありました。
健康チェックは日頃気にしていない体脂肪を測る事が出来ました。意外と脂肪は多いみたい？
紙芝居は懐かしい昔風スタイル。アンパンマンの絵に見入った子どもたち、おじさんも手慣れた様子で朗読する紙芝居は今では本当に貴重な体験となりました。ボランティアで紙芝居をやって頂いた松崎さんありがとうございました。



イベントの様子



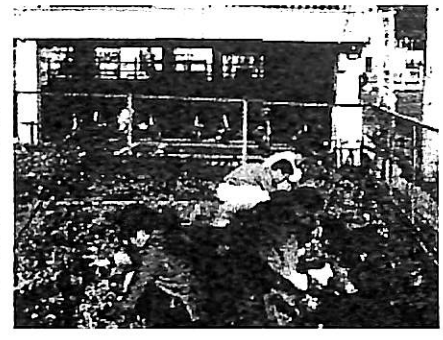
フリーマーケット＆バザー

会計報告＆新潟支援金

収入	バザー売上	16，565
	フリーマーケット出店料	3，000
	花売上	450
	カンパ	6，000
	（収入計）	26，015
支出	スタッフ昼食代他	5，465
収益		20，550

収益のうち1万円を新潟県中越地震ボランティア活動基金に寄付しました。バザーへ品物を寄付いただいたみなさま、ありがとうございました。

駅前花壇の植え替え
みなさんご存知、駅前花壇のお花が更にリニューアル。「考える会」の大人も子どももみんなでせっせとお花を植えました。朝の通勤ラッシュにもまれる前に色とりどりの綺麗なお花に目をやってみて下さいね。
＊お花の好きな方、一緒に花壇の管理や植え替えに参加しませんか？種も出来始めているのでこれからはもっと工夫をこらして花壇を綺麗にしていくつもりです！みなさんのご意見をお待ちしています。



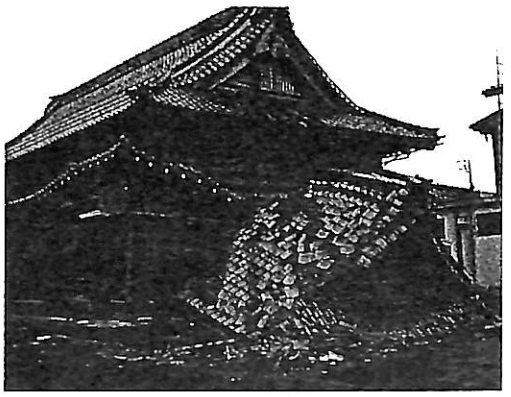
花の植え替えの様子

天災について

昨年は台風が１０回も日本に中陸し各地が風水害に見舞われました。また上越地震など大変な災害に見舞われ、多くの方が被災され本当にお気の毒な事です。しかし地震災害はこの所続発して居り私の記憶している最初の大地震は新潟地震です。

それ以来で私の記憶しているものを列記します。

年	月日	名称	強さ
1964	6月16日	新潟地震	M7．6
1983	5月26日	日本海中部地震(秋田)	M7．7
1993	7月12日	北海道南西沖(奥尻島)地震	M7．8
1995	1月17日	兵庫県南部(関西、淡路)地震	M7．3
2003	5月26日	宮城沖地震	M7．0
2003	9月26日	十勝沖地震	M8．0
2004	10月23日	中越地震	M6．8



引用：吉嶺充俊，地震被害写真集，
http://geot.civil.metro-u.ac.jp
/archives/eq/index-j.html，
東京都立大学工学部土質研究室，2001-2004.

秋田沖地震や奥尻島の津波、十勝沖地震での石油タンクの火災など記憶に生生しいです。
この様に最近日本では頻繁に大きな地震が起こる活動期に入ったと考えられて居ります。
Mは地震の規模を表す数字で、揺れの大きさは震度で表します。

今回の中越地震の規模はＭ６．８ですが、直下型で震源地が浅かった為震度７という最高の震度の所がありました。Ｍ８でも震源地が遠方ならだいたい震度は小さくなります。
大正１２年９月１日の関東大震災は震源地が藤沢の一寸沖合の海中でＭ７．９です。
日本が載って居る２枚の岩盤には、常に東南と南方から２枚の岩盤が押して来てぶつかって居り、世界一地震の多い地域です。岩盤が常に動いているので、今まで大丈夫だった地域は地震の空白域と云って、今後大地震の起こる確率は高くなります。

８月に政府機関が発表した東京地区で今後３０年以内にＭ７クラスの地震が起きる確立は７０パーセントだそうです。人事ではありません。
皆さんのお宅は倒壊しない様になって居りますか、家具は大丈夫ですか、今まで地震の有った地域では家や家具の下敷きになった犠牲者も多いそうです。これらも専門家に見て頂いて早めに対策しては如何でしょう。水や食料も他地域から援助が来るまで３日分は確保して置く必要があるそうです。逃げ道は確保できますか？特にお年寄りには援助が必要です。
やはり向こう三軒両隣、普段から助け合っている事が大切ではないでしょうか。

千葉市の防災情報もしっかりチェックしておきましょう。
備えあれば憂いなし⇒⇒⇒http://chiba-bosai.wni.co.jp/index.html

日頃から避難時に必要なもの(食料、飲料水、懐中電灯、ラジオ、貴重品、医薬品等)を非常持ち出し袋に入れておくなど、いざという時の準備をしておきましょう。特に、洪水、浸水、山崩れなどの予想される地区に住んでいつ方は、過去の災害の教訓を生かして、避難場所や避難する道順をあらかじめ確認しておきましょう。

New Face　杉並区役所でのインターンシップから幕張を考える会へ

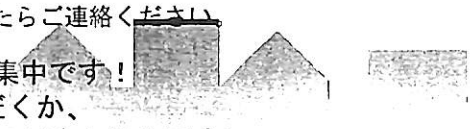
はじめまして。法政大学2年の今村久美子です。専攻はキャリアデザインとういう新しい学部です。このキャリアとはキャリア設計とかキャリアプランという意味で、職業に対して積極的な学部です。
そして私は学部の授業の一環で今年の夏、杉並区役所にインターンシップに行って来まして、まちづくりについて勉強しました。しかし区役所での仕事は私の想像とはギャップがあり、そんな時にこの考える会のファシリテーターをしている石田さんと会う機会がありました。市民と役所を結ぶ石田さんの仕事にとても興味が沸き、今勉強中です。それと偶然ですが幕張は私の母校である幕張総合高校があり、私にとっても身近な町です。ですので、親しみをもって今後も参加してまいりますので今後ともどうぞ、よろしくお願いします！

お知らせ

○定例会
と　き：1月21日（金）19：00～　　毎月第3金曜日は定例会です。
ところ：千葉市相談所（フレック隣）
内　容：住みよい幕張について皆で考えます
参　加：参加条件はありません。お気軽にどうぞ。

○環境整備
現在，会が管理している花壇と広場の管理作業を毎月第４土曜日に行っています。
参加は自由ですので、関心のあられる方はどうぞ下記までお問い合わせください。

○馬加通信の取材
この通信に載せたい地域の情報がありましたらご連絡ください。



住みよい幕張を考える会では、会員を募集中です！
043-274-0943　鈴木宛にＦＡＸしていただくか、
makuhari@kgk-net.co.jp　までメールにてお申し込み下さい。
たくさんの御参加をお待ちしています。

○詳しい情報は　http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Kikyo/3773/ を見てください

「馬加通信」そのネーミングの由来

この地域の地名は、源頼朝が幕張に陣を張ったとき、馬を増強したことから歴史的に「幕張」あるいは「馬加（まくわり・・・まかとも読まれた）」が使われていました。最後に「馬加」が地名から消えたのは幕張が千葉市に合併された昭和29年とのことです。この名前は、この地区で育んできた歴史を大切にし、21世紀の新たな幕張の歴史を刻んでいくための象徴でもあります。この通信も、その精神を大切に発行していきたいと思い、名付けました。

申　込　書

名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

電話＿＿＿＿＿＿＿＿　メールアドレス＿＿＿＿＿＿＿＿

第３分科会「市民が主役のまちづくりの現状と課題」レジメ

事例発表テーマ　「人生心の３（サンサン）・３方式」

サン・ライフネット代表

まちづくりコーディネーター　真壁　静夫

１、　生涯教育との出会い・なぜ嫌いな者まで学ばされるのか

２、　生涯学習によるまちづくりの理念「心の３（サンサン）・3方式」

３、　市民が主役の実践17項目の運動を提唱

４、　生涯学習４本の柱「生涯学習は私たち生活の全て」

①「人間らしさを高めるための生涯学習」

②「生きるための生涯学習」

③「生活設計のための生涯学習」

④「地域づくりのための生涯学習」（地域づくりの哲学）

５、　まちづくり三学「生産学・商い学・生きがい学」

６、　今後の課題

① どこかが違う生涯学習の視点

今後のキーワード「いのち・まこと・いきる」

② 学んだことの還元活動への意識改革

（2005・6・26、第７回聖徳大学生涯学習フォーラム資料）

生涯学習「心の３・３方式」の理念
―― 生涯学習体系への移行の条件 ――

真壁　静夫

はじめに

今や、「生涯学習」はけっして珍しい言葉でなく日常どこでも耳にすることの出来る言葉である。また、特別限られた都道府県や市町村のアイディア事業でもなく、国を挙げての重要施策なのである。それだけ私たちのおかれている社会環境が激変し、過去の経験や体験による価値観だけではどうにも対応できず、又これからの社会を予測することが極めて困難な時代なのである。よって人びとが時代の変化に対応しながら人生に生きがいを感じ、さらに人間として充実した幸せを得るために、自らの意思で生涯学習を求め実践していく必要がある。そこで、一日も早く時代に即応した生涯学習社会を目指し、情操豊かな人づくりと調和の取れた教育力ある地域社会にするため「生涯学習心の３・３方式」を提唱するものである。そして運動として実践項目をかかげ、行政主導の新たな組織を作らず、まずは既設の公民館を拠点に、住民が自らのものとして推進することへの意識改革をすることが生涯学習体系への基本的な道である。人も、家庭も、学校も、社会も、企業も一体となって・・・。

心の３・３方式の理念

生涯教育とは、その言葉どおり教育を生涯にわたって続けて行くことであるが、学校教育のような計画的、組織的教育を一生切れ目なく続けることは現実的には不可能なことである。生涯教育と言った場合の教育は単に計画的、組織的な教育だけを意味するものでなく、社会教育や企業内教育や自己教育などあらゆる形態や方法の教育を含んだ巾広い学習から成り立つものであるので、生涯教育と言うより生涯学習と呼ぶことが適切である。つまり生涯学習とは私たちの生活の全てである。

今日までの社会教育は教養活動を中心にしたせまい視野で進めて来たが、学びはけっして他から与えられるものでなく自らの意思で巾広く求めて行くものであるので、生涯学習としてその活動の展開と高揚を図っていくのである。

そして、自然を愛し美しいまちをつくり、勤労を尊び豊かなまちをつくり、教養を高め文化のまちをつくる、そんな市民の大勢住んでいる地域を目標として別表のような生涯学習「心の３・３方式」の理念を提唱する

「心」とは心掛けである。

①. 人は家庭・学校・地域社会によってつくられ育てられていくと同じように、人が家庭をつくり、学校をつくり、また地域社会をつくる。家庭・学校・地域社会は常に共通した理解のもとに連携を密にしなければならない。

②. 人は子育てにおいて常に心掛けなければならないことがある。それは人間形成の３原則、知育・徳育・体育の３つのバランスを保つように心掛けなければならない。いずれも幼児期における人間形成の上で欠かすことの出来ない重要なことである。

〔例〕たとえば知育のみに力を入れ徳育・体育の心掛けが欠けたとしたなら、知識のみが先ばしり極めて協調性を欠いた非常識的な人間となる。ある学者は「徳育なき教育は、ただ知恵ある悪魔を作るのみ」との言葉をのこしている。

③. ②のような子育てを実践するには、まず自らは子供たちの前に親として、地域の大人として、人間として恥ずかしくない生き方を示すべく心掛けなければならない。それは、自然を愛する心、勤労を尊ぶ心、教養を高める心を持つよう心掛けなければならないのである。しかもそれは等分した心掛けである。

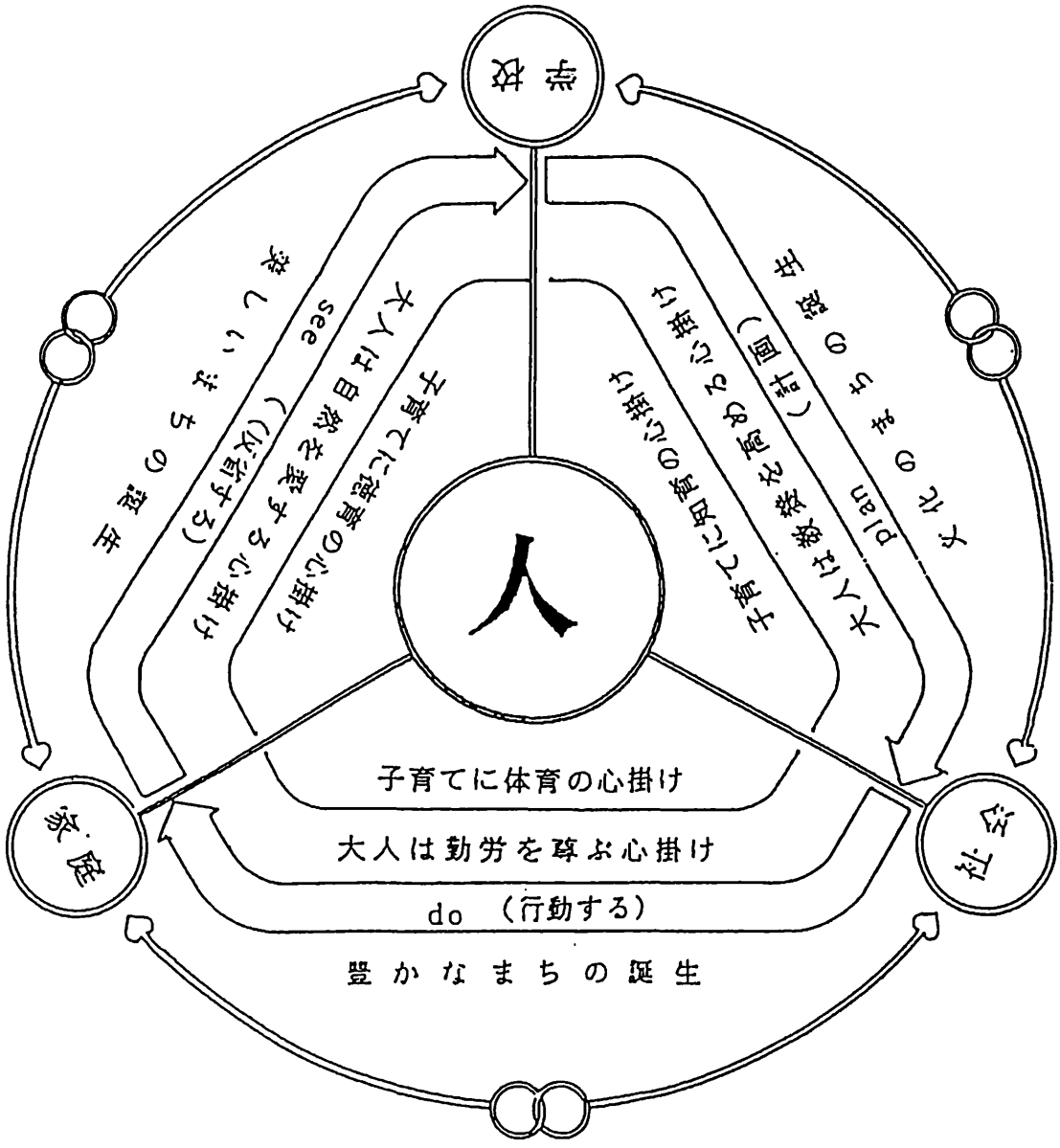
④. ③のような心掛けをもつ生活に、人は常に知育の心掛けによって育てられた知識と教養をもって学習プランや人生プランを立てていく。次にその計画は体育の心掛けによって育てられたたくましい体力と行動力で実践していく。さらにその実践は徳育の心掛けによって育てられた冷静な常識判断によって評価し反省される。さらにその反省の上に立って新たな学習プラン・人生プランが生まれる。それは矢印のように常に繰り返されていくよう心掛けなければならない。そして、その内容はあのビルのらせん状階段のようにいつしか高度化していく。

⑤　前項のような生き方を心掛ける、そんな市民が大勢住んでいる街の前途には、３方に

無限に広がる「美しいまち」が「豊かなまち」が、そして「文化のまち」が誕生するのである。
それを人々は信じて実践する、自らのために・・・。ただ市民に「勉強しなさい」では市民は動かない、何をすればどうなるかをやさしく平易な言葉で解くこと、それが行政の大切な役割第一歩である。

別表 生涯学習「心の３・３方式」

自然を愛し美しいまちをつくり、勤労を尊び豊かなまちをつくり、教養を高め
文化のまちをつくり、そんな市民が大勢住んでいる地域を目標として・・・。



「ふるさと」づくりは、まず人づくりから」

生涯学習まちづくり基本事項　（第三分科会資料）

○生涯学習推進テーマ

水と緑と心のまち・・・

○実践目標

1、　自然を愛し、美しいまちをつくりましょう。
1、　勤労を尊び、豊かなまちをつくりましょう
1、　教養を高め、文化のまちをつくりましょう。

○実践17項目

社会の必要課題を１７の運動として示し、それぞれの公民館、分館、学校、企業、団体、グループ等が項目の中よりみんなで選び、計画、実践、反省、それを繰り返していくものであります。

１、　子育ては親の責任と言う自覚に立って実践しよう。
２、　親の生き方を子どもたちの前に閉めそう。
３、　家庭･学校･社会の連携を密にしよう。
４、　地域の学習会や会合には進んで参加しよう。
５、　「物より心」「量より質」の教育を大切にしよう。
６、　教養としての読書活動を推進しよう。
７、　一人一芸、一趣味、一研究をしよう。
８、　親自身の学習を進めよう。
９、　ふるさとを語れる人になろう。
１０、仕事の中にアイディアを持ち自身と誇りと意欲を持とう。
１１、家庭内の仕事は家族全員で分担しよう。
１２、家族ぐるみで健康づくりやスポーツを勧めよう。
１３、河川に物を捨てず川を汚さないようにしよう。
１４、ゴミの持ち帰り運動を進めよう。
１５、花を愛する心を育て市内を花園にしよう。
１６、家庭生活の中に自然に親しむための機会や場をつくろう。
１７、ボランティアの心を持って郷土の発展につくす人になろう。

以上17項目を私たちの毎日の生活の中に実践していこう。ｐｌａｎ（計画）ｄｏ（実践）ｓｅｅ（反省）の原則にのって、家庭も、学校も、地域社会も一体となって・・・。

生涯学習４本の柱

生涯学習とは私たちの生活全てである

１、 人間らしさを高める生涯学習

２、生きるための生涯学習

３、生活設計のための生涯学習

４、地域づくりのための生涯学習

さあ

みんなで知ろう　　生涯学習「心の３：３方式」の理念を

みんなで考えよう　次代をになう青少年の育成を

みんなで見つめよう　大人たちの生き様を

みんなで語ろう　　地域社会に学習の輪を広げるために

家庭も学校も社会も一体となって

生涯学習社会を実現しよう

炎は自ら燃えて点火する・・・。

（2005･6･26　第三分科会　事例発表資料　提供　真壁静夫）

平成17年6月26日

聖徳大学生涯学習フォーラム

女性のチャレンジ支援をめぐって

内閣府男女共同参画局長

名取はにわ

1　わが国の現状

（1）　国際的に見た女性の現状

・ 政策決定過程

・ 所得

（2）　女性の学歴は上がったか？

・ 学士、修士、博士課程における女性比率―ＯＥＣＤ最下位

（3）高学歴の女性ほど再就職していない

女性は社会に出たがっている

2　少子化と男女共同参画

（1）　先進諸国において、女性の労働力率が高い国において日本より出生率が高い。

（2）　男性の家事育児時間が少ない

3　男女共同参画社会基本法の意義

（1）　男女共同参画社会とは？

（2）　5つの基本理念

（3）　積極的改善措置（ポジティブ・アクション）

（4）　固定的性別役割分担の見直し

（5）　多様な生き方を認める

4　女性のチャレンジ支援策

上へ

横へ

再チャレンジへ

5　地域におけるチャレンジネットワークの形成（平成16年度から）

6　「女性が輝く地域づくり」支援策（平成17年度）

7　女性若年層自立・挑戦対策

〔発表者紹介（登場順）〕

谷口　郁子（イムノエイト株式会社　代表取締役社長）

共立薬科大学卒業。89 年、調剤薬局と介護支援事業所を展開するイムノエイト（株）を設立。93 年イムノコーポレーションＵＳＡを設立。02 年「世界優秀女性起業家対象」を受賞。04 年にＭＳＪ（株）（メディスショップジャパン）出資設立。また、文部科学省の科学技術・学術審議会基本計画特別委員に就任。著書に「あなたはどんな老いを生きたいですか？」（アートディズ社）

杉本　由子（株式会社芳翠園・株式会社老松園　代表取締役社長）

54 年、三重県松阪市出身。青山学院大学卒業。現在、ＲＩ２７５２地区広報委員会副委員長。内閣府男女共同参画連携推進会議委員、東京商工会議所目黒支部・商業副分科会会長、国連支援協会やＮＰＯ関連理事などを務める。

長江　曜子（聖徳大学短期大学部総合文化学科教授・松戸商工会議所女性会副会長）

53 年生まれ。松戸育ち。明治大学大学院博後期課程終了。都立八柱霊園の石材業三代目社長。日本近代文学専攻、墓地行政比較研究、地元、松戸小会議所女性会副会長。松戸、鎌ヶ谷市男女共同参画プラン議長等歴任。

小川　誠子（國學院大學非常勤講師）

89 年日本航空（国際線客室乗務員）へ入社。98 年東京大学大学院教育学研究科博士課程終了。東洋大学文学部教育学科助手、ブリティッシュ・コロンビア大学教育学部客員研究員を経て 04 年帰国。主な研究テーマは職業生活と生涯学習、ボランティア活動における自己形成、少子問題と子育てと支援。著書『生涯学習をとりまく社会環境』（共編著：学文社）など。

塩　美佐枝（聖徳大学人文学部児童学科教授）

元東京都教育委員会指導主事。その後、公立幼稚園園長を経て、現在、聖徳大学人文学部児童学科教授、全国幼稚園研究協議会会長を務める。

西　智子　（聖徳大学人文学部社会福祉学科助教授）

東京都世田谷区内の公立保育園に勤務。世田谷区立乳幼児育成相談所（現総合福祉センター児童部門）勤務後、世田谷区立保育園園長（三園歴任）。担当科目　家族援助論・乳児保育・保育実習。

森川　文子（聖徳大学人文学部短期大学部保育科助教授）

聖徳大学短期大学部保育科助教授。乳児保育・家族援助論を担当。

村田　光子（聖徳大学人文学部児童学科助教授）

埼玉県狭山市内の公立幼稚園に勤務。埼玉大学教育学部付属幼稚園副園長、狭山市教育委員会学校教育科指導主事、狭山市立幼稚園園長を歴任し、03 年から現職。

松澤　利行（財団法人やしお生涯学習まちづくり財団常務理事）

現在、全国生涯学習市町村協議会世話人、ＮＰＯ法人全国生涯学習まちづくり協会理事、文部科学省地域づくり支援アドバイザー、全国体験活動ボランティア活動総合推進センターアドバイザー。

蓮井　昌雄（ＮＰＯ全日本健康倶楽部会長（ＣＥＯ））

38 年香川県生まれ。二男六女孫 15 人の大家族。千葉県内にて「養老の瀧」チェーン店経営。現在、白井市のカフェ「ザ・ワークス」営業中。「創年のたまり場」第１号。

松山　明子（新居浜市おもちゃ図書館きしゃポッポ代表）

障害児のために手作りおもちゃを作り続けて 10 年。また、写真家だった父の足跡を辿るうち写真の道へ。その流れで自宅を開放。夕陽の館をスタート。

齊藤　ゆか（聖徳大学生涯学習研究所専任講師）

99 年横浜国立大学大学院修了（「教育学」修士）、都内中学校教員、昭和女子大学助手を経て、04 年博士（学術）取得。専門は、ボランティア・ＮＰＯ論、生活経営学、福祉教育・ボランティア学習。全国のボランタリー活動育成に奔走する。

安田　いく代（我孫子市立第一小学校教頭）

小・中学校教諭、独立行政法人国立女性教育会館専門職員、柏市教育委員会指導主事、千葉県教育委員会社会教育主事を経て現職。

真壁　静夫（サン・ライフネット代表・まちづくりコーディネーター）

28 年間社会教育、生涯学習推進に取り組む。現在サン・ライフネット代表として「生涯学習は梅の一生に学べ」を旗頭に地域づくりと講演活動を展開。

鈴木　洋子（住みよい幕張を考える会会長）

聖徳大学人文学部児童学科生涯学習指導者コース卒業。（旧）労働省外郭財団の両立支援相談員、千葉県保育専門学院勤務後、03 年より千葉県生涯大学校講師。

豊村　泰彦（教育新聞社編集局報道部部長）

82 年教育新聞社入社。新聞製作のほか、生涯学習、環境、エネルギー、文化、芸術、健康、食育、グリーン・エコツーリズム、まちづくり、ユニバーサルデザインなどの分野で普及宣伝活動やイベント事業企画などに取り組んでいる。ＮＰＯ法人全国生涯学習まちづくり協会理事。

西村　美東士（聖徳大学人文学部児童学科教授）

現在、原案作成を担当した「連鎖的参画子育てまちづくり研究」が採択されて大張り切り。科研費で「社会化をめぐる青少年問題文献分析」も始まりつつある。

花輪　茂道（聖徳大学短期大学部総合文化学科教授）

39 年、日暮里生まれ。出雲大社ご縁特使、関東支部長。メイク松戸ビューティフル、（財）松戸みどりと花の基金、江戸川松戸フラワーライン会員。国分川を守る会会長。

名取　はにわ

東京大学法学部卒業後、73 年法務省入省。人権擁護局を始め、内閣総理大臣官房審議室を経て、95 年 内閣総理大臣官房男女共同参画室長・内閣審議官。99 年 日本学術会議事務局学術部長。01 年 文部科学省生涯学習政策局主任社会教育官。03 年 内閣府大臣官房審議官。同年８月内閣府男女共同参画局長に就任し、現在に至る。

小泉　恵子（聖徳大学人文学部音楽文化学科助教授）

東京芸術大学卒業。同大学院修士課程修了。第１回奏楽堂日本歌曲コンクール第１位。山田耕筰賞・木下記念金メダル受賞。

井桁　和美（聖徳大学人文学部音楽文化学科非常勤講師）

平成15年～19年文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」

「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」

＜研究組織＞

研究代表者	福　留　　強	生涯学習研究所　所長・人文学部児童学科　教授
第1部門主任	塩　美佐枝	人文学部児童学科　教授
第2部門主任	夏秋　英房	人文学部児童学科　助教授
第3部門主任	宮坂　いち子	人文学部英米文化学科　教授
第4部門主任	福　留　　強	人文学部児童学科　教授
第5部門主任	清水　英男	人文学部児童学科　教授
総括部門	齊藤　ゆか	生涯学習研究所　専任講師

＜学術フロンティア推進事業報告シリーズ　バックナンバー案内＞

No.	タイトル	発行年月	判型	頁数
1	『少子化に関する地域システムの研究』	2004.3	A4	100
2	『韓国の平生学習とまちづくりとまちづくりの推進』	2004.3	A4	155
3	『高齢者の生きがい対策と人材活性化に関する研究』	2004.3	A4	196(+100)
4	『少子社会における子どものための地域活動の展開』	2005.3	A4	196(+100)
5	『生涯学習指導者の養成と活用に関する研究』	2005.3	A4	46(+162)
6	『第６回生涯学習フォーラム』	2005.3	A4	120(+58)
7	『地域の教育力の向上と子ほめ運動の現状』	2005.3	B5	202
8	『地域福祉まちづくりの現状と実践的展開』	2005.7	A4	102
9	『北欧視察研修報告 -北欧の子育て支援 デンマーク・スウェーデンを訪ねて- 』	2005.11	A4	71(+15)

総括部門　「第7回生涯学習フォーラム」
- 学術フロンティア推進事業研究大会 -　報告書

平成15～19年度文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業

「学術フロンティア推進事業」

「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」

2005（平成17）年12月　聖徳大学生涯学習研究所　発行

聖徳大学　生涯学習研究所　学術フロンティア推進事業
住所：〒271-8551　千葉県松戸市松戸1169　聖徳大学生涯学習社会貢献センター6階
電話：047-365-5691　FAX：047-365-5692
E-mail：frontier@seitoku.ac.jp